

若狭の海辺に 築かれし古墳



ヒガンジョ古墳群

2021

美浜町教育委員会

例 言

1. 本書は、美浜町教育委員会が福井ライフ・アカデミー（福井県生涯学習センター）と連携し、以下のとおり実施した歴史講座（みはま土曜歴文講座）の記録集（講演録）です（所属・役職は当時）。

平成 29 年度みはま土曜歴文講座 第3回講座「若狭の海辺に築かれし古墳Ⅰ～若狭、丹後～」

平成 29 年(2017) 7 月 22 日 (土) 会場・美浜町歴史文化館

報告Ⅰ「若狭東部の海辺に築かれし古墳」 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏

報告Ⅱ「若狭西部の海辺に築かれし古墳」 おおい町立郷土史料館 主査 川嶋清人氏

報告Ⅲ「丹後の海辺に築かれし古墳」 与謝野町教育委員会 社会教育課 課長補佐 加藤清彦氏

トークセッション「若狭の海辺に築かれし古墳Ⅰ～若狭、丹後～」

進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏

パネリスト 上記の講師

平成 29 年度みはま土曜歴文講座 第4回講座「若狭の海辺に築かれし古墳Ⅱ～三河、志摩、能登～」

平成 29 年(2017) 8 月 6 日 (日) 会場・美浜町歴史文化館

報告Ⅰ「若狭・丹後の海辺に築かれし古墳」 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏

報告Ⅱ「三河の海辺に築かれし古墳」 岡崎市教育委員会 社会教育課 主査 山口遼介氏

報告Ⅲ「志摩の海辺に築かれし古墳」 志摩市教育委員会 生涯学習スポーツ課 技師 三好元樹氏

報告Ⅳ「能登の海辺に築かれし古墳」 七尾市教育委員会 文化課 専門員 北林雅康氏

トークセッション「若狭の海辺に築かれし古墳Ⅱ～三河、志摩、能登～」

進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏

パネリスト 上記の講師

平成 30 年度みはま土曜歴文講座 第5回講座

平成 30 年(2018) 8 月 11 日 (土・祝) 会場・美浜町歴史文化館

講演「総括・海辺に築かれし古墳」 大手前大学 史学研究所 主任 魚津知克氏

2. 歴史講座の講演・トークセッション等の活字化は、当日の録音記録をもとに株式会社美浜共同商事が行いました。本書全体の内容、文章表現を調整するために講師（著者）が必要に応じて加筆修正し、松葉が最終的な調整をしています。このため、本書の内容と歴史講座の内容とは同一ではないことをあらかじめお断りします。

3. 本書の刊行にあたって、山口遼介氏より「おおい町の横穴式石室踏査記録」をご寄稿いただきました。

4. 本書の編集は、講演者（著者）等の指導、助言のもと、松葉が行いました。

5. 歴史講座の実施から本書の刊行まで次の関係機関各位のご支援、ご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。（敬称略）

志摩市教育委員会、七尾市教育委員会、羽咋市教育委員会、福井県教育庁生涯学習・文化財課、福井ライフ・アカデミー、諫早直人、魚津知克、小原雄也、加藤清彦、川嶋清人、北林雅康、小林裕季、谷川陽子、中川佳三、中野知幸、菱田哲郎、福山博章、三好元樹、山口遼介、山本原也

目 次

例言・目次

講 演「総括・海辺に築かれし古墳 一列島の古墳時代王権・政権と若狭一」	1~16
学校法人大手前学園 総合企画室 主任	魚津知克
フォーラム I 「若狭東部の海辺に築かれし古墳」	17~24
美浜町教育委員会 歴史文化館 副館長（学芸員）	松葉竜司
フォーラム II 「若狭西部の海辺に築かれし古墳」	25~32
おおい町立郷土史料館 主査	川嶋清人
フォーラム III 「丹後の海辺に築かれし古墳」	33~43
与謝野町教育委員会 社会教育課 課長補佐	加藤晴彦
トークセッションI 「海辺に築かれし古墳 ~若狭湾沿岸~」	45~54
加藤晴彦、川嶋清人、松葉竜司	
フォーラムIV 「若狭湾沿岸の海辺に築かれし古墳」	55~56
美浜町教育委員会 歴史文化館 副館長（学芸員）	松葉竜司
フォーラムV 「三河の海辺に築かれし古墳」	57~67
岡崎市教育委員会 社会教育課 主査	山口透介
フォーラムVI 「志摩の海辺に築かれし古墳」	69~80
志摩市教育委員会 生涯学習スポーツ課 主査	三好元樹
フォーラムVII 「能登の海辺に築かれし古墳」	81~92
七尾市教育委員会 スポーツ・文化課 専門員	北林雅康
トークセッションII 「海辺に築かれし古墳 ~三河・志摩・能登・若狭~」	93~97
北林雅康、三好元樹、山口透介、松葉竜司	
寄稿「おおい町の横穴式石室踏査記録」	99~106
岡崎市教育委員会 社会教育課 主査	山口透介
図表・写真出典	107~112
講師（著者）略歴	

講演

総括・海辺に築かれし古墳 -列島の古墳時代王権・政権と若狭-

学校法人大手前学園 総合企画室 主任

魚津知克

こんにちは。魚津知克と申します。実家は江戸時代に金沢で米屋をやっていたみたいで、あまり海とは関係ないのですが、苗字は海とちょっとした縁があるかもしれません。勤めているのは西宮市にある大手前大学史学研究所（講演時）で、西宮や今津は有名な灘五郷のそれぞれ一つですが、江戸時代だけでなくもっと遡る古代の^{古のうき}武庫水門、武庫川があって、これは古代から文献史料にあって、立地からも古代から港があったことが言われています。職場も海に縁があります。



講演の様子（魚津知克氏）

松葉さんから今日は山の日というお話しがありましたが、先月は海の日で、最近、海の日と山の日が順にできたのですが、私の世代でも海の日と言われてあまりピンとこないので、国民の祝日が増えて何かわけがわかりません。国民の祝日をつくる国は他にもたくさんあると思いますが、漠然と山の日、漠然と海の日というものを国民の祝日として共有できるという国、地域はたいへん珍しいのではないかと思います。ないとは言えないのは、私の知っている限りで山と海を対比するのは例えばペトナムやミャンマーなど東南アジアの国に少しさります。これらの国の人達には山と海を対比する感覚はあるのですが、それ以外にほとんどないと思います。なおかつ祝日に漠然と山の日、海の日という祝日をつくることは、やはり日本列島の歴史を基礎とした、日本文化の一つの大きな特徴ではないかと思います。

ともかく、若狭の皆さんにはあまり意外ではないかもしませんが、この日本文化に深く関わるのある海の近くに、実は古墳が多く造られたのです。現在、日本全国、古墳ブームですが、海の近くに古墳が造られたということを知っている人はそんなにいないのではないかと思います。これを調べるとすごく面白いわけで、今回はその内容を見ていこうと思います。

1.はじめに

(1) これまでの経緯

まず私と若狭とのつながりということで、昔に撮った写真をアルバムから取ってきました。実は私、1992年に大学を留年した直後の傷心、ハートブレイクの3月に当時、福井県立若狭歴史民俗資料館の中司照世さんに呼ばれて上ノ塚古墳の発掘調査に加わりました。写真的整理が悪く、上ノ塚古墳の写真は見つけられなかったのですが、その翌々年、1994年秋の十善の森古墳の発掘調査時の写真が何枚かあ



写真1 十善の森古墳（魚津知克氏撮影）

りました。

若狭町、旧上中町に瓜割の滝があり、夏でもたいへん冷たい水が流れていますが、発掘調査の時に中司さんがちょっと気を利かせてくれて、昼間にジュースを入れて、本当に冷たくしておいて3時の休憩に飲むのですね。発掘調査では土中にある大きな遺物はすぐわかるのですが、ガラス玉のような小さな小玉はなかなか見つからないので、土ごと取ってザルで水に入れて、ウォーターセパレーションという専門用語で言えば格好良い名前になるのですが、その瓜割の滝から流れてくる水で土をザルで流して、要は水路の水でガラス玉を選別する作業をしていました。

ガラス玉を一生懸命見つけて、青色や緑色、コバルトブルーのガラス玉が多いのですが、多いと言つてもこの古墳がとても立派なので多いのですが、黄色や、特に赤色はレアなガラス玉で、すごく少なく小さくて珍しい。ウォーターセパレーションをしている時に珍しいという実感はあったのですが、その後、7、8年後に赤色の玉は遠くインドからマレーシアのあたりを通つて、中国の南方から日本に伝わり、そして最終的に十善の森古墳に副葬されたという珍しいガラス玉ということがようやくわかりました。数年前、実際にマレー半島のつけ根あたりまで赤色の小玉を調べに行きましたが、十善の森古墳発掘の当時は一心不乱にザル掬いをして赤色のガラス小玉は珍しいなど実感していました。

このような十善の森古墳の思い出ですが、当時の発掘の様子の写真を見ると、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館の館長を務められ、もう退職された畠中清隆さんの後ろ姿が写っていました。当時は中堅のバリバリの頃かと思いますが、土をどんどん掬うので強力さんと呼ばれていました。この十善の森古墳の石室はもう埋め戻されていますが、このような感じで1992～1995年ぐらいまで発掘に携わさせていただきました。

若狭歴史民俗資料館の発掘調査に参加させていただき、若狭とはその時からのお付き合いになりますが、その当時、私は京都に住み、よくJRバスで上中に来ていました。当時は免許も車ももつていなかつたので、あまり三方や美浜まで行く機会がなかったのですが、実は網谷克彦さんに連れていただいて美浜町の松原遺跡の発掘調査を1日見学させていただいた覚えがあります。今回、私費で昨日から美浜町に宿泊して、今朝、松原海岸で家族と一緒に海水浴をさせていただきましたが、美浜町とのご縁も1990年代から続いております。

(2) 近畿地方の地理的特性

そろそろ本題に入ります。近畿地方の写真に海辺、あるいは琵琶湖などの湖畔に築かれし古墳を菱形で示しました。いろいろ有名な古墳や古い古墳を四角形で、有名な海辺の遺跡の場所を丸形で示しています(図1)。

まだ研究の出発点、スタートラインで、あまり用語にこだわる必要もないかと思います。どのような言葉を使っても、「海辺に築かれし古墳」でも「海の古墳」でもよいかと思いますが、私は海もしくは湖の古墳という表現を今まで使ってきましたので、今日は多用するかもしれません。一応は「海辺に築かれし古墳」とイコール、同じということを了解して覚えておいていただければと思います。



写真2 十善の森古墳発掘調査の様子
(魚津知克氏撮影)

前から漠然と海とのつながり、海と古墳時代社会とのつながりということを考えてきたのですが、特に深く突っ込んで考えるようになったのは 2010 年代です。2010 年代から古墳に副葬された漁具、古墳時代に実際に使われた漁具、そして海の近くの古墳を集中的に勉強しています。2011 年からは「海の古墳を考える会」を作り、私と同じようにやはり海や島などに古墳がたくさん造られているのは変だと思っていた何人かの仲間の研究者と一緒に研究会を立ち上げて、5、6 回ほど研究会をしています。そのうち 1 回は福井市でも研究会をしました。2017 年からは近畿地方の中で海をどのように位置付けられるのかと、小難しく考えたりもしています。

今の歴史研究の中で考えている畿内と、本当に古墳時代の畿内が同じなのか、違うのか。意外と当たり前に思って、実はそうではない。今の行政区画にかなり縛られていないのかという疑問



図 1 近畿地方周辺の海の古墳位置図（ベース図に Google earth 写真を使用）

が浮かんできました。古墳時代の近畿地方はどのように捉えられてきたのかということを最近のテーマにしています。現在の県境などは考えずに地形として近畿地方全体を捉える、あるいは他の地方との関係で近畿地方をどう見るか、分析するかということをまず考えてみたい。そのように考えた時、やはり若狭は面白いといったお話しにならせていただきます。

近畿地方の周り全てが四方八方、海に取り囲まれています。これは日本列島全体もそうですが、特に近畿地方の場合、日本海側、太平洋側、そして瀬戸内海側とかなりメリハリのついた囲まれ方をしているという特徴が1点目です。

2点目として、意外にも他の地方にはない特徴ですが、淡路島と琵琶湖の形がよく似ています。古墳時代を研究すると、やはりポイントに違いないと思うのですが、この淡路島と琵琶湖の二つが同じような面積です。これはトンデモ説で全く信用しないで欲しいのですが、本当に冗談ですが、淡路島と琵琶湖の形があまりに似ているので地球の反対側から隕石がぶつかって、この淡路島が飛び出て残った穴が琵琶湖になったというぐらいに似ている。しかし、このような嘘の説が成り立つぐらいに両者の形が似ています。これは結構面白いことではないかと思います。すなわち片方は海に囲まれた陸地の島であって、片方は湖で水が真ん中にあって周りが陸地と、両方を補う要素があつて面白い。やはりこれらがあるから近畿地方は古代においても求心力を発揮できたのではないかというところがあります。

さらに言えば、淡路島と琵琶湖が他の地域とつながっています。瀬戸内海から九州、さらに朝鮮半島、中国、東南アジア、インドなどにつながるところの入り口に淡路島がある。本当に話がどんどん広がりますが、片や関東、東北、北海道、シベリアとつながるところの入り口に琵琶湖があって、ルート上にそれぞれが載っているというところがポイントではないかと思います。少し勇み足になりますが、特に北へのルートがポイントではないかと思います。

出発点を大和として、奈良盆地から四方八方にいくのですが、西の海路は瀬戸内海ということでおわかりやすい。東は二つのルートがあつて、峠を越えるルートと伊勢湾を越えるルートが二股となります。まあまあわかりやすい。

問題はやはり北で、一つは現在のJR山陰本線と同じように山陰に行くには陸路があまりにも長すぎるわけです。このルートは確実ですが、やはり海上交通、水上交通を使おうと思えば埒があかないという欠点があります。もし川を使うのであれば加古川を上がって由良川もしくは円山川に抜けるルートもあって、これは旧石器時代以後、よく使われているルートですが、これもやはり遠回りで、琵琶湖を通っていくルートが一番のポイントです。私は単身で西宮市に住んでいて、配偶者の東村純子は福井大学に勤めていますのでよく車で移動するのですが、必然的に琵琶湖のあたりを通ります。最初は名神高速道路を通っていましたが、途中からは琵琶湖西岸の湖西道路を使った方が早いということで、京都東インターで降りてから湖西道路を北上して敦賀にいくわけです。すると、関西に住んでいる者の感覚として六甲山や生駒山を越えるよりも、近江海津から敦賀へ越える七里半越えはさほど大層な峠ではないという感覚があります。もちろん1回は峠を越えてはいけないし、例えば冬場など季節によって変化はあるかもしれません、琵琶湖をうまく使えば日本海に出ることは容易ではなかろうかということになります。

しかし、この場合、琵琶湖や敦賀平野の港の問題もあります。もう一つのルートとしては湖西の途中から若狭に抜けるルートがあります。私が1994年に十善の森古墳の発掘調査を行った時はまさにこのルートを使っていました。近江今津駅でJR湖西線を降りてバスに乗って上中町に抜けたルートです。つまり、若狭ルートと敦賀ルートがあつて、琵琶湖の湖西を回って北の日本

海に抜けるルートがたいへん重要で、その一角として若狭がすごく大きな位置を占めているということを改めて感じました。

このようなお話しは、若狭の皆さんは「ああ、そりやそうだ」というお顔をされるのですが、他の地方の方にお話しをすると、「はー」、「へー」、「そうなんだー」とかいう感じで、なかなかこのあたりの地理的な感覚が一般の方々だけでなく、近畿地方にいる考古学の研究者の中でもあまり共有されていません。そのような一種の土地勘を抜きにして古墳時代の研究が理念的に進んでいる側面もあるのではないか、それは少し問題ではないかと感じています。

やはりルートの問題、他地方に行くにはどのような道があるのか、その道は湖を使っているのか、海を使っているのか、このようなことまでしっかりと研究していく必要があるかと思います。

(3) 概念設定と今回のテーマ

琵琶湖も含めた海というものがすごく大きなウエイトを占めているということを強調してきました。このような社会が古墳時代にあったということを少し頭の片隅に留めていただき、その前提を踏まえて今日のお話しの用語設定、概念設定をしていきたいと思います。

まず最初に「海辺に築かれし古墳」、私が今まで海の古墳と言ってきたような古墳とはどのような古墳なのかという点です。海の古墳とは、「海を舞台とした人間活動と深い関連をもつ脈絡により、海の近くに築造された古墳」と定義したいと思います。

では「海を舞台とした人間活動」とは何かということですが、四つあります。

まず、「1. 海・海産物を資源として利用する、生業活動もしくは生産活動」ですが、例えば漁撈や製塩、これは若狭にも資料があるのでご了解いただけると思いますが、例えば釣針、網、蛸壺を使ったような漁撈活動、そして製塩活動が関係する活動です。

次に、「2. 海上で繰り広げられた、人・もの・情報のやりとり、すなわち、海上交通や海上交易」ですが、これは瀬戸内海がすごくわかりやすい。瀬戸内海沿岸には古代の港が点々とあって、近くに同じく点々と海岸地域の首長墓があります。この海岸沿いの首長墳と古代の港の分布がよく似ています。私の後輩の石村智さんは東京文化財研究所で室長をされていますが、かなり面白い方で職業の傍らいろいろな活動をされていらっしゃいます。例えば、研究費を取ってシーカヤックを買ってそれを海辺に浮かべて実際に海辺から古墳を見ています。考古学のフィールドワークは大事ですが、まさか研究費を取ってカヤックを買うとは思いませんでした。ちゃんと研究しているのでよいですが、なかなかそこまで自分でやろうという研究者がいない中、彼は実際にやって、ちゃんとした本『よみがえる古代の港』を吉川弘文館から出しています。全然、無駄遣いではなく、その成果が本に表れています。そのような古代の港のあり方、そのような研究がどんどん進んでいます。これが二つの海に関係する人間活動の特徴になります。

それから、「3. 列島各地の海域で、あるいは列島をこえて渡海する形で実行される、外交・軍事活動」です。やはり古墳時代を通して東アジアとはかなりいろいろな交流関係をもっています。特に中国、中華、中原地域はもとより朝鮮半島でも古墳時代に平行する時期にはいろいろな国や地域が主導権を握ろうということで緊張関係があり、同盟したり、戦争したりするわけですが、その中でやはり日本列島の王權も深く関与していくわけです。その関与するルートはもちろん海になっていくわけですね。もちろん日本にとって外国は海外ですが、やはり海がポイントになってくるわけで、この三つの外交ということをすごく強調しておかなければならない。これは旧石器時代や縄文時代とは違った古墳時代、古代ならではの特徴ではないかと思います。

ここで、外交のところに絡めて用語をいくつか説明しておきたいと思います。

王権、例えば海外との外交や軍事などで主権を担う中枢を「倭王権」と呼びたいと思います。そして、近畿を中央部政権、九州北部・吉備・山陰・越（北陸）・関東北部を「有力な地方政権」と呼びます。門脇禎二さんが提唱された地方王国とパッと見、似ているのですが、王国ではなくて政権です。古墳時代の社会を幕の内弁当のようなイメージで見立てて、その弁当箱が王権、そして主食のご飯が近畿、中枢です。近畿がないとどうもならんというのが近畿中央部政権ですが、その他にもちゃんとおかげがそれぞれ独立してあった、松花堂弁当ぐらいですかね。箱弁当のような弁当箱をイメージしていただきたいのですが、もちろん地方政府も倭王権に属しているわけです。倭王権と近畿の勢力が完全なイコールではなく、必要不可欠ながらもあくまで一つの構成要素であり、その他にもそれぞれの地域の勢力があるといった考え方をしたいと思います。考古学では、倭王権と近畿の勢力は全く同じと捉える古墳時代の研究者が多いのですが、文献史学の古代史の研究者の中では山尾幸久先生や他の先生のように私の考えと同じように考える研究者が何人かいらっしゃいます。なので、今日の私の表現の仕方も突飛ではないと思いますが、私は他の考古学の古墳時代の研究者の方々とは少し見解が異なるので説明させていただきました。このようなこと也有って、題名は「列島の古墳時代王権・政権」としています。

地方政府の条件についても、私は考えるところがあるのですが、今日は時間があまりませんので、このあたりは割愛したいと思います。いずれにしても、いろいろな政権の関係、その政権を全て包含している王権の立場でも海がかなり大きな役割をもっていることを説明しておきます。

そして、「4. 列島の範囲外から列島各地への、海を越えた移住」です。これは特に古墳時代や古代に特徴的ですが、海の向こうから人が押し寄せてくるという事態が何回かありました。押し寄せてくる人々もいろいろな人がいて、例えば専門的な技術をもっている人々、農耕や鉄、海に関係する技術も含めた渡来文化の影響があります。列島の範囲外から列島各地への海を越えた移住があります。

この1～4が海を舞台とした人間活動です。これを踏まえて古墳時代には海が重要であることはわかりました。では具体的にどのようなものがあるのか。どのような海辺に築かれた古墳があるのかということを説明していきたいと思います。

2. 5世紀における「畿内」の様相

(1) 海辺に築かれし古墳の多様性

私が以前書いた論文で海の古墳の分類をしたので、その内容を今回新たに表にしてわかりやすくまとめました。実は「小さなものから大きなものまで動かす力」ではないのですが、小さな古墳から大きな古墳までいろいろな海の古墳があります。これも面白いところです。

小さなところからご説明しますが、福岡県新宮町、福岡市の少し北で、世界遺産で有名になつた宗像の少し南ですが、ここの中合に相島という島があります。九州島から船で20分ぐらいの島の古墳です。海辺にはたくさんの瀆物石くらいの石があるのですが、この石の中に実は古墳がたくさんあります。浜か、磯か、海か、古墳かわからないところですが、発掘すると石積みがあり古墳群になっています。これはA群、小さな古墳ですが、わざわざ海、磯に古墳を造るのはなぜなのか、それが海の古墳の研究のきっかけとしてあります。

もう少し大きな地域の首長層の人達も古墳を造っています。愛知県、三河湾に面した94mの前方後円墳で正法寺古墳があります。干拓で中世や近世に水田になっていますが、古代は海で、日

間賀島やさらに向こうに伊勢まで見えます。絶景に近いのですが、そのようなところに古墳が造られています。C 1 群の例として免島 5 号墳があります。地方政権の首長墓で、帆立貝形の造り出し付きの円墳です。免島 5 号墳は福井市川西地区、鷹巣の海水浴場のあたりにある大きな古墳で、周囲は水田がなにもない海岸段丘で、そのようなところにある造り出し付き円墳ですが、全長 90.5m で堂々たる古墳時代中期の古墳です。円墳もしくは帆立貝式古墳といった形の古墳が流行る、共有する集団がいたようで、その中の一つです。

主体部に石棺が入っています。C 1 群は地方政権の長の墳墓でよいかと思います。

さらに大きな古墳、C 2 群は近畿の中央部の海辺に立派な古墳を造っています。五色塚古墳は近畿の中心からは離れているのですが、この近くに明石海峡大橋があり、立地条件から見て私は近畿中央部政権、さらには倭王権中枢に入れてもよかろうと思っています。全長 194m という大きな古墳で、前方部を海に向けています。大学生や若い方にはデータに、親子連れのお出かけにも一番向いていると私は言っているのですが、実際にまだ現地を訪れていらっしゃらない方は、今からでも遅くないのでぜひ訪れていただきたいと思います。現在、五色塚古墳の周囲は全て宅地になっています。遠方から行くとどうしても車が便利ですが、古墳のあたりを車で通るのは結構難しいです。電車の駅も近くにありますので、いずれかの方法でぜひ実際に足を運んでいただきたいです。本当に素晴らしい、絶好のロケーションですが、実は今、大きなマンションが近くに建っているので、これさえなければ世界遺産にすべきではないかと思うぐらいの古墳です。実際に海外の考古学者を何回か連れて行ったこともあるのですが、これはもうすばらしいと皆さんが言われます。やはり一番高い後円部に立って前方部を見るとその延長線上に海峡が見えるという、明らかに海を強く意識した古墳だということが印象的です。

磯や海かわからないようなところにある古墳から、堂々たる古墳にいたるまで海辺に古墳を造っているということは、何らかの当時の社会的・文化的背景があるのであろうという予測を考古学者、古墳時代の研究者が抱いていますので、その中でいろいろな疑問点を解決していくこうという動きが実際に生まれ、現在、さまざまな研究活動がされています。

さて、この五色塚古墳をもう少し詳しく見たいと思います。なぜこんなに素晴らしい眺望が生まれるのか。実はこの場所、海岸段丘が海辺の際まで延び

分類	内容	特徴
A群	帆立貝式古墳群の基	福井県敦賀市西島上古墳群（2号墳が銅鏡でいろいろな種類：前半中紀～後半時代）
		福井県いわき市福島北山古墳群（3号墳以上「帆立貝式」帆島式）
		福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（1号墳を複数：帆島式）
		福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群の基
	帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（2号墳 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
B群	「帆立貝式」帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
	帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
		福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
		福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
		福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
C 1 群	帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
	「帆立貝式」帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
	「帆立貝式」帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
	「帆立貝式」帆立貝式古墳群の基	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
C 2 群	後円一帯・近畿の中央部古墳群	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）
	五色塚古墳	福井県丹生郡越前町舟橋塚古墳群（帆立貝式 3メートルの帆立貝式円墳：前期後半）

図 2 海・湖の古墳分類図



写真 3 五色塚古墳と小壹古墳（北から明石海峡と淡路島を望む）（神戸市教育委員会 2006）

ています。国道とJRと山陽電鉄を抜けばもう海まで段丘が延びている立地で、これを意識しているわけですね。特徴をまとめると、海岸段丘の先端に古墳が造られています。私の分類ではC2群t類で、今日はあまり前方後円墳の話をしませんが、前方部が海に向いているということでIII型に特徴付けています。

このように海の古墳、海辺に築かれし古墳もいろいろな要素に分類できます。その中で、小さなものから大きなものまであり、時代や場所においてもいろいろなバリエーションがあるので、その中の変化を見つけることが一つの研究のやり方ではないかと思います。そのような視点から、私は以前、論文（『『海の古墳』研究の意義、限界、展望』『史林』100-1）を書いています。

（2）海の生産用具副葬・供獻の背景 一五條猫塚古墳と住吉宮町古墳群

近畿地方は海に囲まれていることがわかり、いろいろな古墳が海に造られていたことはわかりました。ではその背景に何があるのかということを次に分析していきたいと思います。

古墳そのものが海に造られていたということから少し外れて、もう一つの様相として海に関係する遺物、簡単に言えば漁具、釣り針や鈎などの磯の道具が実は古墳に副葬されていることもあります。中には奈良県五條猫塚古墳のような海の近くではない陸地の、内陸の古墳にもこのような海に関係する遺物が副葬されているということ、またこちらは海の古墳ですが、神戸市住吉宮町古墳群でも興味深い海に関する遺物の取り扱いが認められることを次に紹介したいと思います。

近畿地方の範囲も意識しながら、あえて近畿の中心ではない、少し外側の地域の二つの事例を紹介することで、逆に近畿地方の特性、特徴が見えてくるのではないかと考えています。

まず、奈良県五條市の五條猫塚古墳は、優れた蒙古鉢形眉庇付冑や帶金具など朝鮮半島から渡来してきたものや、朝鮮半島の技術に強い影響を受けた、平たく言えば朝鮮半島から渡来してきたものが、そのまま高度な技術を使って作った副葬品が武器・武具類の中に混じり、また漁具も副葬されているわけですね。

鈎と考えられる遺物でかなりの大型品が副葬されています。副葬品全体の中でもすごく目立つ存在で、私はこの鈎の作り方を研究するところから始めたのですが、作り方を見ても4本に分かれた先を熊手状に本を一つに鍛造しています。現在と違って、この鍛接という技術は古代においてすごく高度な技術で、特にこのような厚みのあるもの同士を鍛接することは、スーパーハイテクニックと表現しても全く差し支えない。鍛金されたものではないけれども、装飾豊かな遺物に比べても引けを取らないぐらいのスーパーハイテクニックが使われていたと思うのですが、さらに鈎の根元を袋にしているという、今の鍛冶職人さんでも簡単には作れない逸品ではないかと思います。鍛接や焼入れという技術を含めて本当にマルチスーパーハイテクニックではないかと思うような技術で作られたものをあえて漁具として副葬して

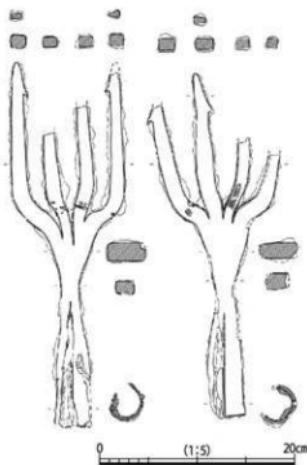


図3 五條猫塚古墳竪穴式石燈外出土銛実測図
(鈴木・川畠 2014)

いるところに古墳時代中期の大きな特徴があると考えています。

もう一つは実際の漁撈活動でこの鉛を使って何を捕るのかということですね。結論から言えば、実際に何かを捕るということではなく、クジラやイルカといった大きなものも捕れる、ポセイドンのような海の神や海の大きな魚などに意識を置いたような、海を治めていることを示す大型の遺物であると思います。この鉛で実際に五条猫塚古墳の地域首長が海にクジラを捕りに行こうと思ったわけではなく、やはり海を治めるイメージの中の一部としてこの漁具を副葬品に位置づけていたという現れではないかと思います。

この発掘調査報告書の編集をされた川畑純さんが論じられているのですが、この遺物がマルチスーパーハイテクニックといった技術で作られていることを含めて考えると、やはり朝鮮半島と日本との関係の中にある海を意識においていた遺物ではないか。五条猫塚古墳に副葬された遺物にはいろいろなものがあり、日本列島のこの地域のものもあり、近畿中央部政権の軍事組織を反映していたものもあるのですが、この漁具は海の向こう、倭王権の外側、具体的には朝鮮半島の国々や周囲の海の向こうへの眼差しを表現した遺物であろう、概念化された世界観であろうと私は考えているわけです。このようなものが海辺ではない内陸の古墳に副葬されていることが古墳時代の一つのポイントになります。



図4 五条猫塚古墳堅穴式石槨外出土遺物の外部性概念図（川畑2015）



図5 住吉宮町遺跡古墳分布図（図中の番号は調査次数を表す）（神戸市教育委員会2014）

今、大きな話をしましたが、もう少し地域の話をすると同様に面白い古墳があります。神戸市の住吉宮町古墳群は神戸市東灘区にある六甲アイランドという人工島の付け根の陸地のあたりにあり、JRや六甲ライナーなどの電車が通っている町なかを発掘調査すると、実は小さいけれどもかなりのこりがよい古墳がたくさん見つかり、やや小型のかわいい動物埴輪や円筒埴輪などが出土しています。この住吉宮町古墳群は住宅の建て替えや町なかのマンション建設工事などに伴う小規模な発掘調査を何十年も積み重ねて、このような古墳群であることがわかってきたわけですが、2014年時点で1辺10~20mぐらいの古墳が全部で78基見つかっています。面白いのは、ほとんどが方墳です。

その中でも、住吉駅のすぐ北東ぐらいの場所にある第5次調査で見つかったSX02という小さな古墳の周溝から、鍛接せず、おそらく紐で縛って4本1組にした鉛と須恵器、製塩土器が出土しています。大きな古墳から小さな古墳まで海辺に造るという地域ですが、実際の副葬品もしくは供献した捧げものにも海が反映されているということになります。住吉宮町古墳群はかなり海に近く、海の古墳と言っても差し支えないと思うのですが、もう少し上の階層のクラスになると五條猫塚古墳のように奈良県のような内陸にあっても海の遺物を副葬します。やはり当時の古墳時代の政治構造の中で海がかなり強く意識されていたことが、遺跡の位置だけではなく遺物の内容からもわかります。

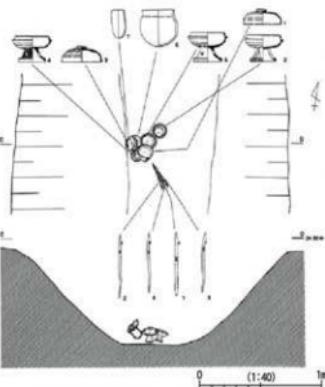


図6 住吉宮町遺跡第5次調査 SX02 遺物出土状況図
(兵庫県教育委員会 1990)

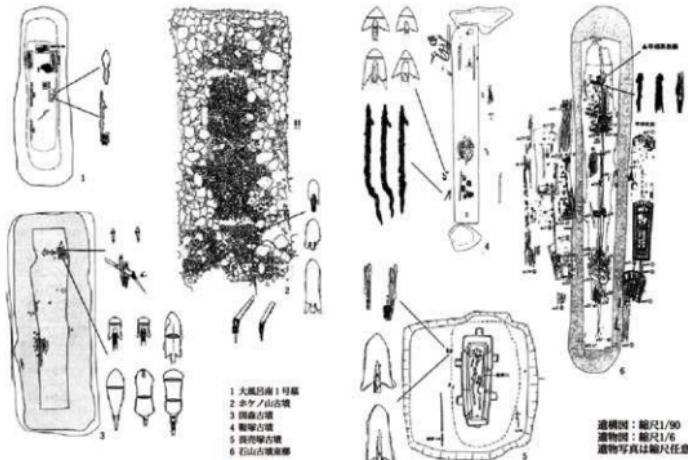


図7 鉄製漁具と鉄鏃の共伴（魚津 2010）

(3) 5世紀倭王権の統治原理と海

以上のように、倭王権レベルの列島全体を治めるという統治原理、統治理念にも海が反映されているわけです。そしてこの統治理念だけでなく、海辺の小さな古墳においても海が実際に意識されていることがわかると思います。もう少し詳しく見ます。

まず少し大きな統治理念のレベルでお話ししたいと思います。このような統治原理は、実は古墳時代初頭、もっと遡るならば丹後半島のような一部の地域では弥生時代後期から生まれてきて、古墳の造営が始まる段階、研究者によつては古墳ではなくまだ弥生時代の墳丘墓ではないかと言われるような一番古い古墳の段階から漁具が副葬されています。小さな漁具ですが、この段階の漁具で面白いのは、研究者の中で武器ではなく獣を狩るための道具ではないかと言われている平根系鉄鏃と漁具がセットになって副葬されていることです。さらに、ただ副葬されるのではなく、どうも古墳に埋める前に何らかの祭祀、儀礼をしていたと考えられます(図7)。

推測ですが、このような儀礼は今の我々が理解するような海幸、山幸といったような海のものと山のもの、釣りのものと狩りのものといったように何らかのパフォーマンスをして最後に古墳に副葬されたふしがあります。つまり、先に述べた統治理念には、ただ単に海だけではなく、もう一つ海と山というように二極を対比させるような、対抗させるような原理が古墳時代に生じたのではないか、倭王権が列島全体を統治する時に生じてきたのではないかということがうかがえます。

このような考えが生まれたのは考古学ではなく、実は古代史研究の方が少し先で、古代史の『古事記』や『日本書紀』などの記述を整理すると「山海之政」と呼ばれる理念がどうもあったらしい。淑徳大学の森田喜久男先生が指摘されていますが、人間だけが統治できる食国、農耕するような今で言うサトの中が食国で、その外側は人間だけが統治できるのではなく、神と人間の代表である王とが協調して治める世界が広がり、それが海と山であるということです。山や海といったものを国家、列島全体に位置づけて考え始めたのはどうも古墳時代になるのではないか。具体的には、海部と山部が設置されるのがおそらく5世紀ぐらいで、文献史学の研究でもこの人達の役割がよくわからない。普通、部民と言えば服部や鍛冶部といったように何らかの仕事があるのですが、海部と山部はいるだけなので「お前らはいるだけでよい」というところから始まつたらしい。なぜいるだけでよいかと言えば、この海や山というのは人間だけではなく神と王が協調して支配するようなもの、もう少し言うならば人間だけが支配できないという場所だから、存在することに意義があるというわけです。

実は、このような考え方がどんどん発展して8世紀、聖武天皇の時代にこの考えを受け継いで発展させた人がいます。大伴家持、現代人にとっては『万葉集』での有名な歌をたくさん残した人ですが、海に関係するものとして、『万葉集』巻十八「賀陸奥国出金詔書歌」の「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめ 願みはせじ」という歌があります。ここで大伴家持が「海行かば」というのは、大伴氏は天皇側近の近衛兵、近衛師団みたいな人達で天皇と一緒に遠征に行かなくてはいけない。人間だけの領域すなわち食国を外れて王が出ていくわけですが、神の力で酷い目に遭います。例えばヤマトタケルも



図8 倭國の統治空間模式図 (森田 2009)

伊吹山に行って酷い目に遭っていますが、そのとき大伴氏も天皇と一緒に行っているわけですね。大伴氏としては仕事上一緒にいかなければ仕方ないのですが、酷い目に遭って、王と一緒に苦労しているという歌が元々の「海行かば」の歌です。つまり大伴氏の由緒を強調している歌としての「海行かば」であって、何も日本列島から離れた天皇もいないどこかの海で死んでこいという歌ではない。

元を辿れば、海や山は王の支配する、完全に統治する世界から外れている。その外れた世界に向こうにあるのは、海の場合は三韓であって、山の場合は蝦夷になる。食国（まわり）にバッファゾーンみたいなものがあって、そのバッファゾーンの外に、海のかなたの三韓と山のかなたの蝦夷があり、その天下を治めるという考え方です。その中に神が関与していたという世界観が古墳時代と古代の間に生まれたということが、考古学の資料分析からもある程度のことが言えるということがわかつてきました。これは遅くとも5世紀、大きな巨大古墳を造っていたような倭王権の力が強まってきた時代には確立していったと考えられます。

3. 海に面する接続地域の意義 一紀伊・淡路・若狭一

さて、若狭や紀伊、淡路といった海に面する地域はどのような意義をもっているのか。先にも述べたように、私の考え方は近畿中央に政権があり地方にも政権があるというものです。すると当然政権どうしが、接続して隣り合わせになっている地域があるのではないかというものです。これらが接続地域で、具体的に言えば、海辺では紀伊と淡路、若狭の三つの地域が近畿地方周囲の接続地域として挙げられると思います。そして、これらの地域では古墳時代中期、5世紀にとても興味深い複合生産型集落が生まれます。

和歌山県和歌市の西庄遺跡からは、いろいろな遺構や遺物が見つかりました。主に製塩を大規模に行っていたのですが、塩作りだけではなく、例えば鉄器や鹿角を使った道具を作っています。海辺での塩作りと並行して、漁撈活動として鹿角の釣り針でカツオを釣ったり、刀や刀子の柄の一部に鹿角を活用していました。海辺ですが、いろいろな生産活動をしていましたことが西庄遺跡の発掘調査からわかっています。

若狭で言えば大島半島の先端にある浜糀遺跡も有名な製塩遺跡ですが、鉄鋤という鉄の薄い鉄板や鹿角で作られた刀装具、他に滑石製の祭祀道具などいろいろな道具が挙げられています。この浜糀遺跡も塩作りをしているだけでなく、複合的な生産をしていましたことがわかります。

もう一つ、淡路の場合は浜辺ではないのですが、木戸原遺跡という内陸の遺跡から鉄鋤という鉄板や祭祀道具が見つかっています。紀伊でも若狭でも淡路でも複合生産型集落が成立していくということですね。

西庄遺跡 (1)		紀淡海帳南遺跡 (2)		大隅遺跡 (3)		四國遺跡 呼麻地区遺跡群	
製塩	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器 縫合形	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	浜田口 縫合 縫石	縫合口 縫合 縫石
陶器	鉄鋤 縫合口 縫石	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	縫合口 縫合 縫石	縫合口 縫合 縫石
骨角器	鹿角材 木製品	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	縫合口 縫合 縫石	縫合口 縫合 縫石
祭祀	新居遺跡 (石・土) 縫合形	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 (石・土) 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	縫合口 縫合 縫石	縫合口 縫合 縫石
馬	馬糞・糞 馬糞	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 (石・土) 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	馬糞 馬糞・糞 馬糞	馬糞 馬糞・糞 馬糞
武器	刀装具	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 (石・土) 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	刀装具 刀装具	刀装具 刀装具
祭祀	未だ解説品 多岐	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	淡路遺跡 (石・土) 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	未だ解説品 多岐	未だ解説品 多岐
居住	*	*	新居遺跡 石枕遺跡	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	土器 火炎窓・灰室 打刃付 削刃付 刮削器	新居遺跡 石枕遺跡	新居遺跡 石枕遺跡
屋敷	多層	平頂	多層・大型建物	多層	多層	多層	多層

図9 各集落における手工業生産と集落要素の比較 (田中2013)

この複合生産型集落の位置づけとして、古墳時代中期の製塩、塩作りをしている地域もこの三つの地域、紀伊、淡路、若狭に集中してきます。製塩土器の移り変わりを見ると、例えば大阪湾周辺や北陸では古墳時代中期に土器製塩が集中していくことがわかるかと思います。なぜ集中してきたのかということですが、倭王権が生産を掌握していたと考える研究が多いのですが、私はそのレベルではなく近畿中央部政権レベルではないかと思います。なぜかと言えば、もし倭王権が、王権レベルで列島全体で塩生産を集約させたいのであれば、他の地域、具体的にはもっと前の時期から製塩をしていた瀬戸内などの地域でそのまま製塩をしたらよいのに、近畿の周りで製塩をするということはやはり近畿中央部政権との関係で理解すべきではないか。列島全体のレベルで評価すべきではないのではないかと考えるわけです。

ここでポイントになってくるのは、やはり若狭の状況ではないかと思います。若狭の場合、それまで大きな古墳が造られていなかったのに、古墳時代中期、5世紀に新たに首長墳が造られるということは、やはり近畿という範囲が大きくなって5世紀の段階には若狭にまで海で生産するという必要性が生まれた。この時期、若狭は瞬間に近畿中央部政権の中に入ったのではないかというのが私の考え方です。地域首長はもちろんいたのですが、その中に組み込まれることで新たに大きな前方後円墳を造り出すことになったのではないかと考えるわけです。

4. 6世紀から7世紀における海人集団と「海の古墳」

このような近畿中央部が一回大きくなるという状況が6～7世紀にまた整理されていくわけですね。特に6世紀後半ぐらいに整理されます。古墳時代中期に製塩が盛り上がってきた地域も古

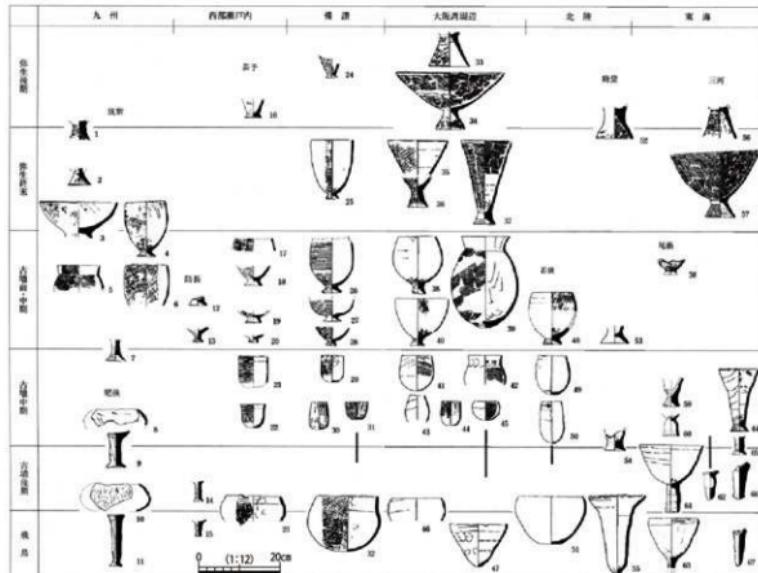


図 10 西日本の主な製塩土器 (積山 2012)

墳時代後期に空白が生まれます。生産減少、生産激減の後、古墳時代後期の後半にいっぺんにまた製塩が生まれてくる状況があります。具体的には紀伊や淡路では衰退するのですが、実は若狭の場合はある程度順調に推移しています。これを他の地域の状況と比べると、近畿の地域は1回膨らみますが、やはり近畿の中できること、できないことを整理していこうとします。塩作りはやはり瀬戸内に分担してもらおう、若狭は近畿の中に組み込むのではなく、北陸として分担してもらおうという状況が古墳時代後期、6世紀の最後に生まれる。5世紀に1回盛り上がったものを整理するような何らかの画期が6世紀後半にあった。それが例えば吉備、備讃瀬戸では再編された後に爆発的に塩作りを再開するということが起こっています。

この時に製塩をした古墳が備讃瀬戸、香川県坂出市の喜兵衛島にあります。この島では製塩土器の層が何10cmにもなって、土器片が積もっているような大規模な製塩活動をしていたのですが、喜兵衛島の中で古墳が造られています。標高が低い浜辺のところに造る古墳もあれば、標高の高い尾根のところに造る古墳もあって、確かに若狭でも製塩遺跡と古墳の分布が重なっていたり、かなり海辺に古墳を造っているところがあります。

列島規模での生産集約ではなく、やはりもっと地域ごとの経営状況をきちんと見ていく。海だけではなく、その地域の中には山もあれば、水田があって農耕もする。若狭でも横穴式石室を主体部にもつ群集墳が6世紀後半から7世紀に造られるのですが、群集墳の造り方はその地域の中での生産や、生産だけではなく6世紀後半以後の地域内の祭祀のあり方とオーバーラップしたような、かなり地元密着型の構造に変わっていきます。片方では中央差配の方向で整理して、地方政権を解消する方向で進むのですが、小さな地域の中では農耕も組み合わせたような自律的の経営をしています。それが喜兵衛島や若狭で見られるような古墳時代後半の群集墳のあり方ではないかと思います。

5.まとめと展望

まとめとして、「①4世紀から6世紀前半にかけての「海辺に築かれし古墳」は、近畿中央部を中心として各地の地域政権が主に海上ルートで相互に連携することで構成される倭王権の統治原理を鋭敏に示す」、これは古墳時代前期から中期、4～6世紀前半にかけての段階の海辺に築かれた古墳は、倭王権、もちろん近畿中央部政権が圧倒的な求心力をもっていたと思いますが、やはり地方政権も一定の存在感を示していたということです。その中で、どのように王権として統治するか、さらに海外に目を向けていくかという統治原理を示していると思います。

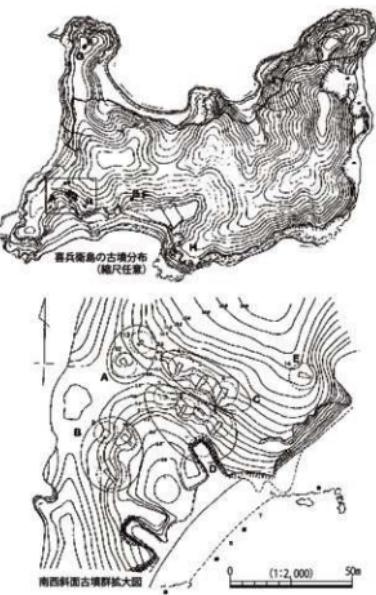


図11 喜兵衛島の古墳分布（弘田 1999）

6世紀後半に大きく変化します。陸路、例えば川を伝って行ったり、峠を越えて行ったりするような陸上交通も含んだ交通路を、全国に、列島全体に張り巡らせる中で、政治、行政だけではなく地域の中で農耕を含めた複合的な生業をして、さらに地域の中で祭祀をしていく。それを組織として経営単位として捉えていくという動きが海の古墳にも明らかに明確に反映しているのではないかと思います(図12・13)。つまり、「②6世紀後半から7世紀にかけての「海辺に築かれし古墳」は、中央政府の主導による産業地域分担を保証する山野河海交通路を基軸として編成された、海辺のさまざまな生産－貢納－生業－祭祀組織を反映している」、この二つを今日のまとめにしたいと思います。

最後に、若狭からの展望として一つ面白い事例をご紹介します。これはまだはっきりとは言えないのですが、私がかつて若狭歴史民俗資料館でお世話になっていた時に整理した美浜町の帝釈寺4号墳の埴輪をめぐる面白い事実です。あの力士形の人物埴輪はボロボロで表面が脆かったのでバインダーという樹脂で固めておけど中司さんに言われて作業しました。なので、今この館で展示されている埴輪は昔からよく知っています(写真4)。

力士像、相撲をしている力士形埴輪と言われていますが、瀬戸内のいくつかの古墳の中には力士のようですが入れ墨をしている痕がはっきりわかる埴輪があります。和歌山県の井辺八幡山古墳の埴輪も含めて入れ墨をしている埴輪があることがわかっています。ただ、力士が入れ墨をしている例はやはり文献を探してみても見当たらない。裸で入れ墨をしているのは海人、海部で、鯨面文身という言葉をご存知の方もおられると思いますが、裸で入れ墨をしているのは海の民であるという説を和歌山県の富加見泰彦さんが唱え、有力になってきています。現在、近畿地方や

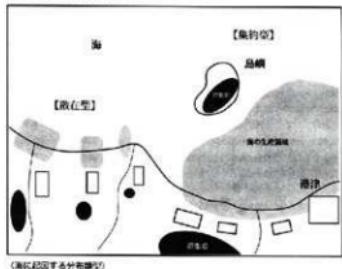
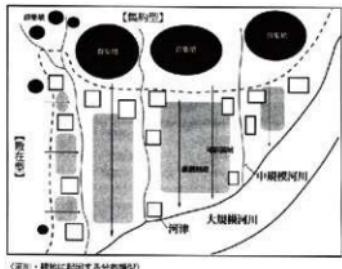


図12 群集墳の分布類型（森本2011）

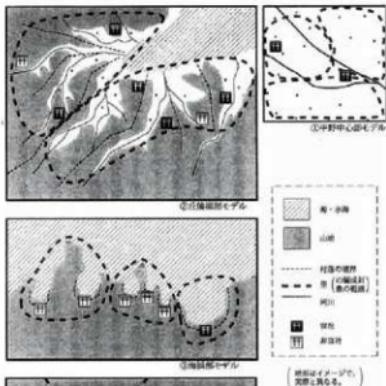


図13 村落と社の関係概念図（松尾2015）



写真4 帝釈寺4号墳出土人物埴輪



住吉宮町遺跡第24次調査

2号墳出土人物埴輪

0 (1:10) 20cm

図14 住吉宮町遺跡第24次調査2号墳・打出小桙古墳出土人物埴輪実測図

(神戸市教育委員会 2001・森岡 2014)

その周囲の埴輪資料が整理される中でこのような海人形埴輪がかなり多いのではないかと言われています。帝釈寺4号墳の力士形埴輪も最初からかなりボロボロだったのですが、私がさらにボロボロにしちゃって入れ墨の跡がなくなってしまったかもしれない私の責任かもしれません。ひょっとしたらこの埴輪も海人を表した埴輪かもしれません。

皆さんご存知かと思いますが、帝釈寺4号墳はかなり海に近いところにあります。そのような見方もできるかということをご紹介しました。全体的な顔の表情が典型的な海人形埴輪とは少し違うとは思うのですが、可能性としてはあるのかなと思います。このような海に関係する物事はまだまだわからないことがたくさんあります。まだまだ海のものとも山のものともつかないものがたくさんあります。若狭という地域は全体が海に面している面白い地域ですので、ぜひ皆さんもお考えいただきたいと思います。

以上で、今日の拙い発表を終わらせていただきます。今朝の海水浴で若狭の海を満喫して、とてもリラックスして発表することができました。どうもありがとうございました。

フォーラム I

若狭東部の海辺に築かれし古墳

美浜町歴史文化館 副館長（学芸員）

松葉竜司

皆さん、こんにちは。近年、巷では「古墳にコーエン協会」といった愛好団体も生まれ、墳活と言われるように古墳ブームです。「海の古墳研究会」という専門家が集まる研究集会が各地で定期的に開催されているように、最近は海の古墳が注目されています。

美浜町では、今から十数年前、平成 16~17 年度に敦賀半島の先端、海に面する尾根上に所在する浄土寺 2・3 号墳が発掘調査され、平成 25 年度には敦賀半島西岸の乙見谷で乙見古墳群の一部が発掘調査されました。

今回のトークセッションでは、若狭と丹後を合わせた若狭湾沿岸地域の海辺に築かれし古墳を取り上げます。次回は、三河と志摩を包括する伊勢湾、そして若狭と同じ北陸地方の一部、能登を交えて海辺に築かれし古墳を考えたいと思います。これを合わせて 1 日で議論すればシンポジウムとなって、それこそ美浜町の歴史フォーラムとなるので、少しもったいないと思わなくもないのですが、機会があれば講演録のような形で内容や成果を公表できればと考えています。

1. 「海辺に築かれし古墳」の定義

最初に「海辺に築かれし古墳」とは何か、何をもって海辺の古墳とするかという定義について触れたいと思います。まず一つは、当然「海辺に築かれし」なので、海浜部や海寄りの地域、あるいは若狭東部では敦賀半島、常神半島などさほど大きくない半島に造られた 6 世紀以降の古墳を「若狭東部の海辺に築かれし古墳」と捉えたいと思います。

そして今回と次回、各地の皆さんに事例報告をしていただくにあたっての前提として、いくつかのテーマをお渡ししております。まず、それを確認しておきたいと思います。

古墳時代は 400 年ほど続きます。約 400 年間にわたって各地域で有力者達が古墳を造り続けますが、今回、取り上げられる古墳のほとんどは古墳時代後・終末期の時代のものです。古墳が各地で爆発的にたくさん造られるようになった 6 ~ 7 世紀を中心に考えたいと思います。必要に応じて、それよりも古い 4 ~ 5 世紀の古墳も取り上げます。おそらく志摩のおじょか古墳という特徴的な古墳が取り上げられることも視野に置いています。あるいは丹後でも 4 ~ 5 世紀の古墳が取り上げられると思います。

一連の報告では、古墳そのもの、あるいは古墳から出土する遺物から、海に関わる人達、海人集団とも言われますが海人と言われるような海辺の人達がどのように見えるかという事例報告が中心になるかと思います。

それでは、まずは私から若狭東部の海辺に築かれし古墳について報告したいと思います。

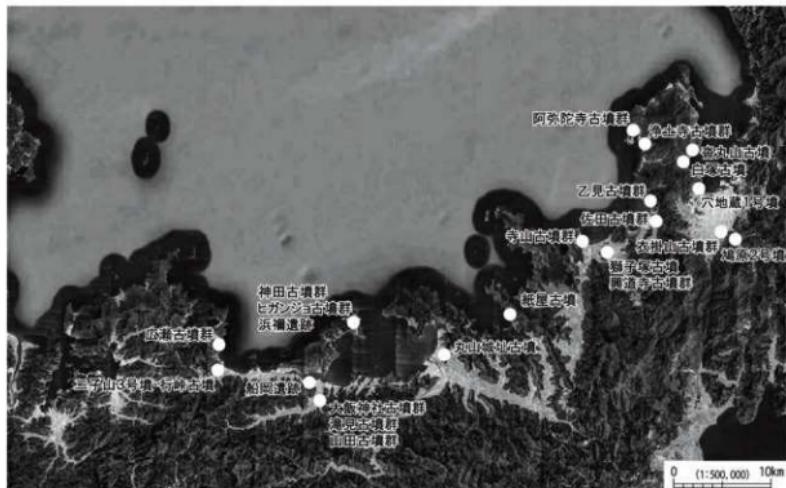


図1 関係古墳位置図（ベース図にGoogle earth写真を使用）

2. 若狭東部地域の古墳時代後期・首長墳の様相

敦賀半島周辺では西岸の半島基部に大きな群集墳として佐田古墳群が所在します。6～7世紀の古墳群で、一番古い古墳が6世紀前半に築造された帝釈寺4号墳で、盟主墳にあたります。総数はわかりませんが、消滅したものも含めて結構な基数の古墳があったようで、山裾から海岸段丘にかけて現在でも10基ほどの古墳が確認されています。古墳の埋葬施設は横穴式石室が中心で、国道を造る時に石室が見つかった、今も民家の庭先に石室が残っているといったようにいくつかの石室の発見例もあるのですが、発掘調査がほとんど行われていません。

帝釈寺4号墳の墳丘上には建物が建ち、付近にゲートボール場もあって、墳丘が削平されて古墳の全体像がわかりにくいのですが、とりあえず現時点では円墳と考えられています。ただ、前方後円墳の可能性も指摘されています。

帝釈寺4号墳からは円筒埴輪だけでなく、例えば人物や馬、家などを形取った埴輪が出土しています。このような形象埴輪があることもしかり、上端を外側に折り返す円筒埴輪の作り方を見てもしかり、大阪府高槻市の今城塚古墳は繼体大王の墳墓と言われていますが、北摂を中心とした地域でよく見られる円筒埴輪の作り方とよく似ているので、繼体そのものとは言いませんが、畿内中枢部とかなり親しい関係性を備えていたのが帝釈寺4号墳の被葬者になろうかと思います。

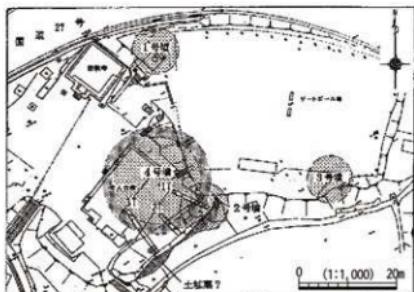


図2 佐田古墳群帝釈寺4号墳位置図(美浜町教育委員会 1993)

佐田古墳群との対比で考えた場合、一つ西側の地域、耳川下流域には6世紀前葉に造られた獅子塚古墳があり、その後、7世紀にかけて興道寺古墳群で小さな円墳が連続と造られます。耳川下流域を治めていた豪族の系譜にある古墳群ですが、獅子塚古墳は北部九州系の横穴式石室を備え、その中から角杯形土器や鍛冶道具などどちらかと言えば外来系、渡来系の文物が出土しています。

畿内中枢部とかなり親しい関係性をもつ佐田古墳群の被葬者とは豪族の毛色、カラーに違いがあって、同じ美浜町にあっても隣接する西と東とで大きな違いがあります。

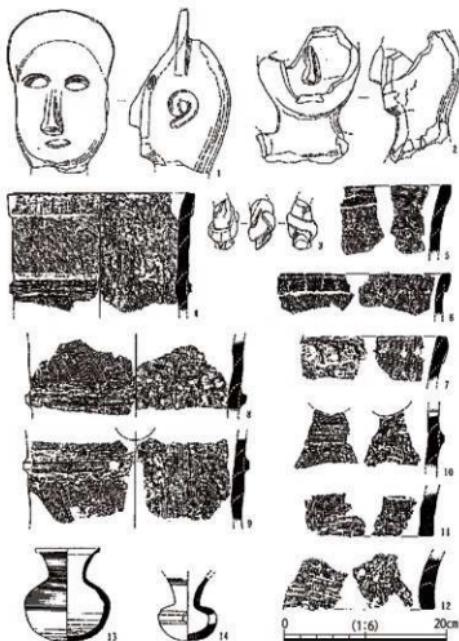


図3 佐田古墳群帝釈寺4号墳出土遺物実測図（美浜町教育委員会 1993）

3. 若狭東部地域の海辺に築かれし古墳の様相

若狭東部地域では、特に敦賀半島を中心として海辺に築かれし古墳が分布しています。敦賀半島西岸には浄土寺古墳群、阿弥陀寺古墳群、乙見古墳群などいくつかの小さな群集墳がそれぞれの尾根や山裾、谷筋などに分布しています。敦賀半島東岸の敦賀市域でも穴地蔵古墳群、沓丸山古墳、白塚古墳、尾尻古墳、色古墳など、やはり小さな平野ごとに小さな古墳、古墳群が分布しています。敦賀半島では西側にも東側にも古墳がたくさんあります。

(1) 乙見古墳群

乙見古墳群は、美浜町の北田と苔浜の間にある乙見谷という谷筋に所在します。この谷ではかつて2基の古墳があり、残念ながら1基が消滅し、残った1基が美浜町史跡に指定されています。残った方の古墳が乙見古墳と呼ばれている1号墳で、近年まで水田の中にボツンと1基だけ所在していましたが、近年、古墳のすぐ近くに道路が造られることとなり、古墳の一部が発掘調査されました。町指定の史跡でもあり、全面的な発掘調査は当然できませんが、実際に一部分であっても発掘すると墳丘の周囲はすでに圃場整備に伴う削平を受けていたことがわかりました。

美浜町佐田の郷土史家、本間宗次郎氏が記された書籍には1号墳はあまり石室の石積みが残っていないと書かれているのですが、実際に調査すると側壁の石積みが4段まで残り、石室下部も意外によく残っていることが確認できました。石室の規模も全長7mほどに推定でき、美浜町に

残る古墳の石室の中では大きい部類に入るのではないかと思います。残念ながら石室は盜掘を受けたようで、盜掘穴から鉄の棒や貝殻が出土しています。古墳の時期を決める土器は未発見ですが、石室構造から考えると7世紀に入った頃の古墳ではないかと考えています。

なお、乙見古墳群の付近に土器製塩遺跡が見当たらないので、被葬者がどんな生業をしていた人達なのかがわからない。例えば同じ若狭の端でも西端の高浜町の音海半島には目の前に崖を望めるような、本当に海の目の前に造られた広瀬古墳群があって、その古墳群の周囲でも製塩遺跡が見つかっていません。広瀬古墳群の被葬者は製塩の集団ではなく、魚を捕って加工するような漁撈に関わる人達の古墳群ではないかと考えられるところですが、被葬者像については乙見古墳群との共通性も考えられるのではないかと思います。

(2) 浄土寺古墳群

浄土寺古墳群は、敦賀半島西岸の先端、美浜原子力発電所がある小さな湾を望む山の尾根筋に所在します。3基の古墳があり、1号墳が山裾に6世紀後葉に造られ、2号墳と3号墳が尾根上に並んで7世紀前半に造されました。2号墳、3号墳とともに横穴式石室の玄室の奥に石棚という、板石を棚状に架け渡す施設が見つかっています。眼下の浄土寺遺跡から古墳とほぼ同時期の須恵器や製塩土器などが出土しています。



写真1 乙見1号墳



写真2 乙見1号墳石室底道部左側壁

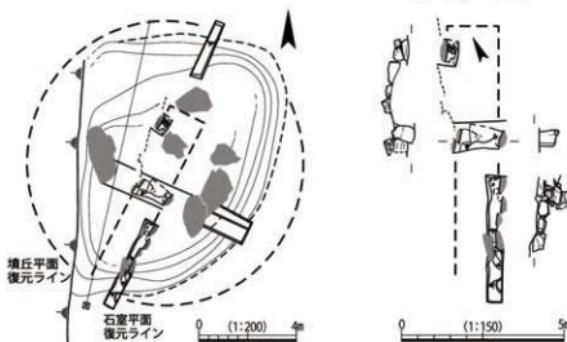


図4 乙見1号墳墳丘測量図・石室実測図

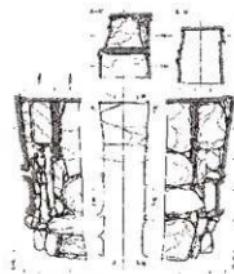
2号墳は全長7.2mの円墳で、横穴式石室の玄室の奥に2枚の板石を石棚として架け渡しています。墳丘背後の周溝からは製塙土器1個体が見つかっていますが、もともとは墳丘上にあったものが崩れ落ちたのでしょうか。少し変わった施設として墳丘の裾部に大きな石を縦に据え掛けた、墳丘外護列石と呼ばれる施設が確認されています。墳丘を守るために大きな石を使っていることが特徴で、おそらくこれほど立派な外護列石を備えている古墳は、若狭では浄土寺2号墳とおおい町のヒガンジョ13号墳くらいかと思います。墳丘外護列石をもつ古墳は若狭でもいくつか認められるのですが、浄土寺2号墳は小さいながらも結構、本格的に造られている古墳です。



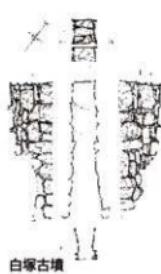
写真3 浄土寺2号墳



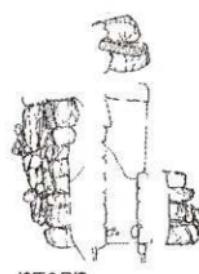
写真4 浄土寺3号墳



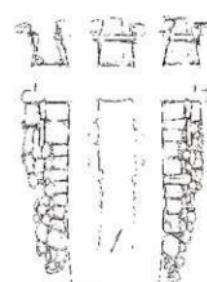
穴地蔵1号墳



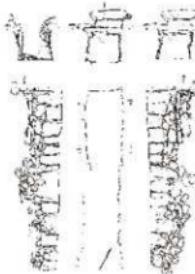
白塚古墳



越原2号墳



浄土寺2号墳



浄土寺3号墳

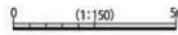


図5 敦賀半島周辺の石棚をもつ石室実測図 (敦賀市教育委員会 1991・同 2001・川村 1997他)

同じように浄土寺3号墳でも横穴式石室の玄室に板石を架け渡しています。ちなみにこの石棚は2号墳、3号墳とともに石室の床面から60cmの高さにあります。つまり石棚の下は本当に狭い空間で、遺骸は納められると思いますが、どちらかと言えば石室の中にもう一つ石室があるような印象を与える限られた空間になってしまいます。それでも、おそらくこのように石室を上下に区切るために使っているのが浄土寺古墳群の石棚です。

敦賀半島周辺で石室に石棚をもつ古墳として浄土寺古墳群の2基に加えて、敦賀市域の敦賀半島東岸に穴地蔵1号墳と白塚古墳が、敦賀平野から近江に抜けていく笙の川沿いに鳩原2号墳と、5基が見つかっています。やはり面白いのは、いずれの古墳でも床面から60cmほどの高さに石棚を造りつけています。穴地蔵1号墳や白塚古墳は石室自体が大きく造られ、天井も高いので、結果として相対的に石棚が低いところに造りつけられ、石室の上部空間がかなり広くなります。ただ、敦賀半島周辺の石棚の高さが共通している点は大きな特徴で、石室についてはともかく石棚については同じような造り方をしています。

ちなみに似たような石棚があるという点で共通するので、それぞれの古墳から出土する須恵器もきっと製作技法や産地が同じなのではないかと思って観察してみたのですが、土器の器形そのものは同じ時期の古墳からの出土なので当然似ているのですが、肉眼観察ではそれぞれの土器が焼かれた須恵器窯は異なるではないかということがわかりました。よく似ているのは石棚だけで、石室構造を含めて意外に古墳それぞれの個性が表出していることが新たにわかりました。

(3) 阿弥陀寺古墳群

阿弥陀寺古墳は、敦賀半島西岸の先端にあります。谷筋にあるので、直接は海を望まないのでですが、海岸線から山の斜面を上がってすぐのところに4基の古墳が所在します。6世紀後半から7世紀にかけての古墳群と考えられます。最も新しい古墳が阿弥陀寺4号墳で、おそらく7世紀前半の古墳です。同時期の浄土寺2号墳や3号墳では石室に石棚を架け渡していますが、阿弥陀寺古墳群の石室には石棚が認められません。石室が露出しているのである程度、石室構造がわかるのですが、石棚が見当たらない。7世紀に入って造られた敦賀半島周辺の古墳でも、全ての石室に石棚があるかと言えば、決してそうではないということにも注意しておく必要がありそうです。

阿弥陀寺古墳群のふもとには東奥裏遺跡という同時期の土器製塙遺跡があるので、おそらく製塙集団に伴う小さな古墳群があったことがわかります。



写真5 阿弥陀寺4号墳石室

(4) その他の古墳群

耳川下流域では河口部の左岸側、久々子湖畔に寺山古墳群があり、7世紀前後の古墳が3基ほど所在します。横穴式石室が露出しています。

また、常神半島では若狭湾海洋自然センターの近くに6世紀前半の横穴式石室をもつ紙屋古墳があります。常神半島にはいくつかの古墳群があるようですが、発掘調査例がなく、よくわからないというのが実際のところです。



写真6 寺山1号墳石室

4. 若狭東部地域の海辺に築かれし古墳を考える

最後に敦賀市域を含めた若狭東部地域の海辺に築かれし古墳の特徴を改めて考えたいと思います。

まず古墳の立地は、やはり海に近い、あるいは古墳から海浜や海そのものを望むことができますが、山あり谷ありといった感じで山の尾根やふもと、谷筋もあって、その場所に応じた選地がされている特徴があります。ひょっとすると、これは若狭西部とは異なるかもしれません。

また、古墳から製塩土器が出土する例が見られます。浄土寺2号墳では古墳の上に製塩土器を置いていたものと考えられ、また沓丸山古墳の石室から製塩土器が出土するなど、製塩に関わる遺物が認められます。

この地域の海辺に築かれし古墳の被葬者はどのような階層なのか。基本的には製塩、あるいは魚を捕つて加工するような海産物加工に関わるような生業に携わる集団のリーダーにあたるような人達を被葬者とするものがほとんどかと思います。

ただ、この地域では大規模な群集墳で、人物埴輪をもつ佐田古墳群も前面に海を望みます。敦賀半島城の小規模な群集墳と同質視できない佐田古墳群の被葬者は、塩を作っていたような末端の集団ではなく、あえて言えば敦賀半島西岸を掌握していたような、ワンランク上の、地域全体を治めたような集団であったのではないか。帝釈寺4号墳は在地首長墳にあたると思います。耳川下流域で言えば獅子塚古墳や興道寺古墳群が、敦賀平野では衣掛山古墳群が同じ性格の古墳にあたるものと考えられます。

佐田古墳群のような地域全体を治めるような在地の豪族層を被葬者とする古墳に対して、半島の海浜部にはそれぞれの製塩集団や漁撈集団、海人集団といったように直接的に海に関わる人達の古墳群があり、ほとんどは古墳の規模も小さく、基數も数基程度と数えるほどの小規模な群集墳が多い。このような複層的な階層構造が若狭東部地域の海辺に築かれし古墳の特徴ではないか。若狭西部の状況とは大きく異なるかもしれません。

埋葬施設は横穴式石室ですが、特徴を挙げるとすれば沓丸山古墳のように玄門立柱石が多用されています。若狭東部の海辺に築かれし古墳は無袖式の横穴式石室であることが特徴ですが、無袖式にも関わらず玄門のところに縦に長い石材を使い、内側に突出させて玄室と羨道部のような区切りとしています。袖がないのに



図6 若狭湾沿岸の古墳出土製塩土器実測図（敦賀市教育委員会 1988
・同 1991・福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2004他）

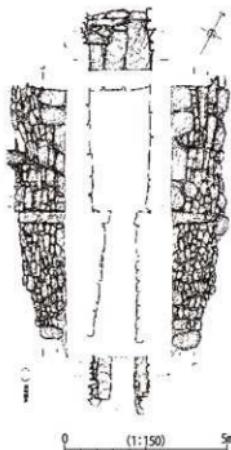


図7 長丸山古墳石室実測図
(敦賀市教育委員会 1991)

玄門は意識しています。若狭西部の大飯神社2号墳では典型的な無袖式石室ですが、玄門立柱石がありません。やはり石室に袖はなくとも立柱石を設けて玄門を意識している点も若狭東部の古墳の特徴になるかと思います。

以上、簡単に若狭東部の海辺に築かれし古墳についてご報告させていただきました。

フォーラムⅡ

若狭西部の海辺に築かれし古墳

おおい町立郷土史料館 主査 川嶋清人

皆さん、こんにちは。おおい町立郷土史料館の川嶋と申します。縁あって、おおい町に勤めていますが、私は小浜市西津、漁師町の出身です。実家は父親が漁業を営んでいまして、漁師をしていたのですが、その父親も亡くなつて、今は兄が継いでいまして海に縁を感じています。この後、加藤さんがお話をされますが、実は私は与謝野町にも少なからず縁があつて、私の奥さんが加悦町の出身で、このような形で縁が続くとは思ひませんでした。

1.はじめに

では、私からは若狭地方西部の海辺に築かれし古墳について報告したいと思います。まず若狭地方西部に位置する小浜市、おおい町、高浜町の3市町はたいへん古墳が多い地域です。3市町の古墳の総数は、消滅した古墳も含めて現在705基を数えます。その内訳として小浜市411基、おおい町203基、高浜町91基が確認されています。700基以上ありますが、調査例はごくわずかで、その消滅した古墳の中には土取りや石材採取などで発掘調査もされずに取り壊された古墳も多々あります。このような時に出土した鉄製品や土器などもあったという報告はあるのですが、それらが保存されているケースは数少なく、行方不明になっているものがほとんどです。

今回は6～7世紀、古墳時代後期の発掘調査された古墳を対象として報告したいと思っています。古墳時代後期に属する古墳の発掘調査は、昭和33～36年（1958～1961）に旧大飯町において同志社大学が調査を実施しました。大島半島と佐分利川流域に所在する後期古墳、いわゆる群集墳といわれる古墳群の学術調査が行われたのを嚆矢として、小浜市、高浜町でも調査が行われています。この後期古墳の調査によって、若狭は後期古墳の研究において注目される地域の一つになりました。

その後、高浜町で自治体史編纂にあたって古墳の確認調査が実施されています。二子山3号墳、行峠古墳といった小型の前方後円墳が発掘調査されました。これまで大飯郡においては前方後円墳は確認されていなかったのですが、この2基の古墳の発見によって初めて大飯郡で前方後円墳が確認されたことになります。

旧大飯町においては、昭和40～50年代の圃場整備や大島半島での大飯原子力発電所建設工事に伴い、いろいろな遺跡の発掘調査が進められました。後期古墳では吉見古墳、滝見27号墳、そして浜糸遺跡にあった埋没古墳も発掘調査されました。そして平成9～11年（1997～1999）にかけて、舞鶴若狭自動車道建設工事に伴って滝見古墳群、大飯神社古墳群、山田古墳群という古墳が密集した地域の古墳群が発掘調査されました。これらは若狭で初めて群集墳が面として発掘調査された例となっています。

小浜市では残念ながら古墳の調査がなかなか進まず、昭和43年に同志社大学による田島の傾古墳の発掘調査が行われたにすぎません。

では、若狭西部、高浜町から小浜市にかけての海辺に築かれた古墳についてお話ししたいと思います。

2. 高浜町の海辺に築かれし古墳

(1) 広瀬古墳群

まず高浜町の代表的な古墳として高浜町西端の内浦地区に広瀬古墳群があります。『高浜町誌』に載っている古墳分布図を見るとおり、内浦湾に突き出た広瀬鼻の付け根にあるちょうど山と海とが接する断崖上に4基の横穴式石室と石室の残骸5基の計9基の古墳が所在しています。石室の構造がわかる1号墳は全長約8mの両袖式の横穴式石室で、大正7年(1918)に石材を採取する目的で地元の青年団によって発掘されて管玉、銀環、直刀片、須恵器などが出土したことがしられています。その後の石室実測の際に出土した須恵器は7世紀前葉に位置づけられています。

広瀬古墳群の周辺には集落もなく耕作するような土地もほとんどないような海岸です。この周辺に民家は1軒もなく、近くの集落までは整備された道路を車で走って5~10分ぐらいで辿り着くような状況で、付近にはオートキャンプ場が整備されていますが、それ以前は景色がきれいな場所でした。広瀬古墳群の被葬者は製塩集団ではなく、漁撈などを生業としていた集団ではなかろうかと言われています。土地が狭いこともあり、製塩との関係は希薄かと思います。実際にこの場所に行ってみると、よくおわかりいただけるかと思います。

小浜市				おおい町				高浜町			
古墳(群)名	地区	基数	古墳(群)名	地区	基数	古墳(群)名	地区	基数	古墳(群)名	地区	基数
白富山古墳群		3	美生佐古墳群		4	豊浦古墳群		2	波浪古墳群		1
丸山古墳群		6	大津古墳群		7	御前立古墳群		15	御前立古墳群		4
佐野古墳群		5	こわね古墳群		12	ヒガリヤマ古墳群		16	山濱古墳群		9
大室古墳		1	風来山古墳群		5	尻川古墳群		1	雀飛古墳		7
御前立の細窓古墳		1	白堜山・津井山古墳		10	日向西古墳		1	小糸原古墳		1
丸谷(アモリ)古墳群	内海	2	高瀬古墳群		31	雪引古墳群		1	鶴見山古墳群		4
日向西古墳群		3	美生佐古墳群		31	村山古墳群		4	西浦松人塚群		4
河原山古墳群		1	小北古墳群		5	人見内古墳群		2	行水内古墳群		2
太田古墳		1	高瀬山古墳群		2	小畠山古墳群		10	小畠山古墳群		10
猪崎古墳		1	長坂山古墳群		6	小畠山・神石古墳群		10	猪崎古墳群		9
鳥越内古墳		1	高森山古墳群		6	八ヶ崎古墳群		2	東浦松人塚群		4
丸谷(アモリ)古墳群		2	おおの内古墳群		3	別所山古墳群		2	御山山古墳		1
ハラ石室古墳		3	上野八幡山古墳群		5	大船山古墳群		4	太田内古墳群		1
次吉古墳群		5	太田山古墳群		6	山田山古墳群		14	石谷内古墳		1
木津原古墳群		12	天神山古墳群		7	大原山古墳群		20	御山内古墳群		1
根岸古墳群		22	天神山古墳群		8	御崎古墳群		10	根岸古墳群		4
東河古墳群	内	4	天神山古墳群	内	9	御崎古墳群		12	御山古墳群		1
根岸古墳群	外	5	天神山古墳群	外	10	御崎古墳群		1	中糸原古墳群		7
今谷古墳群	内	4	天神山古墳群	内	11	御崎古墳群		27	上の山古墳		1
今谷古墳群	外	4	天神山古墳群	外	12	御崎古墳群		8	山の神古墳		4
マツダ(アモリ)山古墳群	内	10	天神山古墳群	内	13	御崎古墳群		12	御山古墳		1
丹生谷古墳群	内	5	天神山古墳群	内	14	御崎古墳群		6	御山古墳		1
今谷古墳群	外	5	天神山古墳群	外	15	御崎古墳群		1	高木塚古墳		1
丹生谷古墳群	内	5	天神山古墳群	内	16	御崎古墳群		2	御山古墳群		4
今谷古墳群	外	5	天神山古墳群	外	17	御崎古墳群		2	高木塚古墳		1
御崎の内古墳	内	7	天神山古墳群	内	18	御崎古墳群		1	高木塚古墳		1
御崎の外古墳	外	1	天神山古墳群	外	19	御崎古墳群		1	高木塚古墳		1
御崎の内古墳	内	1	天神山古墳群	内	20	御崎古墳群		1	高木塚古墳		1
御崎の外古墳	外	1	天神山古墳群	外	21	御崎古墳群		2	御崎古墳群		2
いなば山古墳	内	1	天神山古墳群	内	22	御崎古墳群		11	庄内古墳群		1
内海古墳群	内	4	天神山古墳群	内	23	御崎古墳群		1	庄内古墳群		1
内海古墳群	外	1	天神山古墳群	外	24	御崎古墳群		4	久留古墳群		2
御崎古墳群	内	1	天神山古墳群	内	25	御崎古墳群		1	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	天神山古墳群	外	26	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	天神山古墳群	内	27	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	天神山古墳群	外	28	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	4	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		29	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	4	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		30	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		31	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		32	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		33	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		34	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		35	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		36	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		37	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		38	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		39	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		40	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		41	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		42	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		43	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		44	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		45	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		46	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		47	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		48	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		49	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		50	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		51	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		52	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		53	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		54	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		55	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		56	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		57	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		58	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		59	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		60	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		61	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		62	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		63	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		64	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		65	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		66	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		67	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		68	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		69	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		70	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		71	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		72	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		73	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		74	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		75	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		76	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		77	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		78	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		79	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		80	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		81	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		82	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		83	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		84	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		85	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		86	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		87	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		88	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		89	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		90	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		91	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		92	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		93	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		94	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		95	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		96	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		97	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		98	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
内海古墳群	内	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		99	御崎古墳群		2	久留古墳群		2
御崎古墳群	外	1	今戸山古墳群(または木崎山古墳)		100	御崎古墳群		2	久留古墳群		2

表1 若狭西部の古墳の基数(福井県教育厅埋蔵文化財調査センター2004)

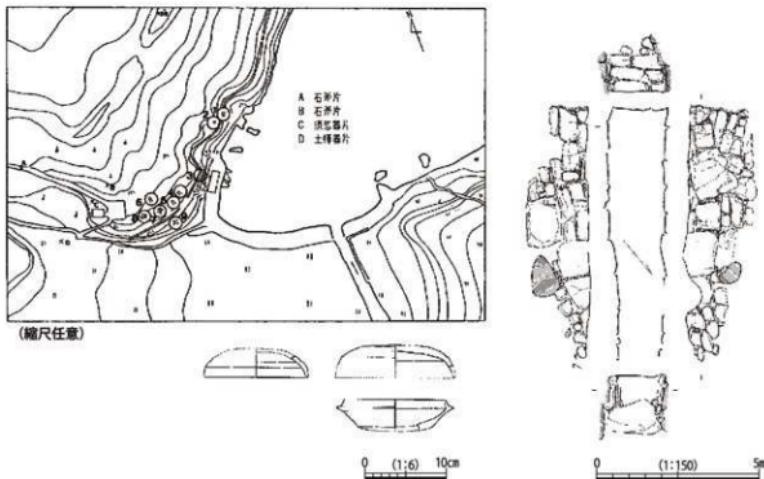


図1 広瀬古墳群分布図・1号墳石室実測図・1号墳出土須恵器実測図（森川他 1985・山口他 2013）

(2) 二子山3号墳・行峠古墳

小和田古墳群と行峠古墳群が所在する青郷地区は古代の青郷にあたり、海よりやや内陸に位置しています。小和田古墳群は尾根先端の一一番高いところに二子山3号墳が築かれ、3号墳を中心とした小型古墳群で、20基ほどの古墳からなる群集墳を形成しています。また、行峠古墳群は青葉山から派生した尾根上に古墳群が形成され、行峠古墳を中心として2基の古墳からなる古墳群です。この周辺には関谷古墳群、雉谷古墳群などの古墳群が分布し、青古墳群を形成しています。それぞれの古墳群の立地は少し海辺から離れています。

先の『高浜町誌』編纂にあたって、二子山3号墳と行峠古墳の2基の前方後円墳が発掘調査されました。

小和田古墳群は、小和田集落から南東の青葉山山麓に向かって広がっている低丘陵の上に20基ほどの古墳が立地しています。二子山3号墳は全長26mの小型の前方後円墳で、小和田古墳群の盟主墳です。平成元年(1989)に発掘調査されました。墳丘の段築、葺石、埴輪ではなく、左片袖式の横穴式石室から大刀、鉄鎌、鉤、刀子、斧、鎌などの鉄製品、耳環、玉類などの装身具、馬具、須恵器などが出土しました。6世紀前半の古墳です。

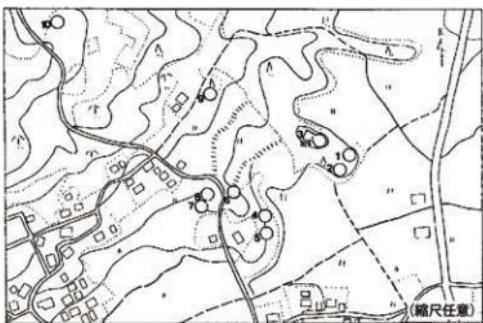


図2 小和田古墳群分布図（二子山3号墳位置図）（森川他 1985）

行峠古墳群は、小和田古墳群と同じく青葉山の山麓から東に延びる尾根上に2基の古墳が所在しています。尾根の先端に行峠古墳があり、平成3年（1991）に発掘調査が行われて、全長34mの小型の前方後円墳で右片袖式の横穴式石室があることがわかりました。二子山3号墳と同じような副葬品が出土しています。6世紀中葉に位置づけられる古墳です。

二子山3号墳と行峠古墳の被葬者は、青郷地区を6世紀前半から中葉にかけて支配した首長と考えられ、その周辺の古墳群の被葬者を従えたものと考えられます。青郷地区は海にも近いので、広瀬古墳群のような海浜の集団を支配下においていた首長であったのではないかと思われます。

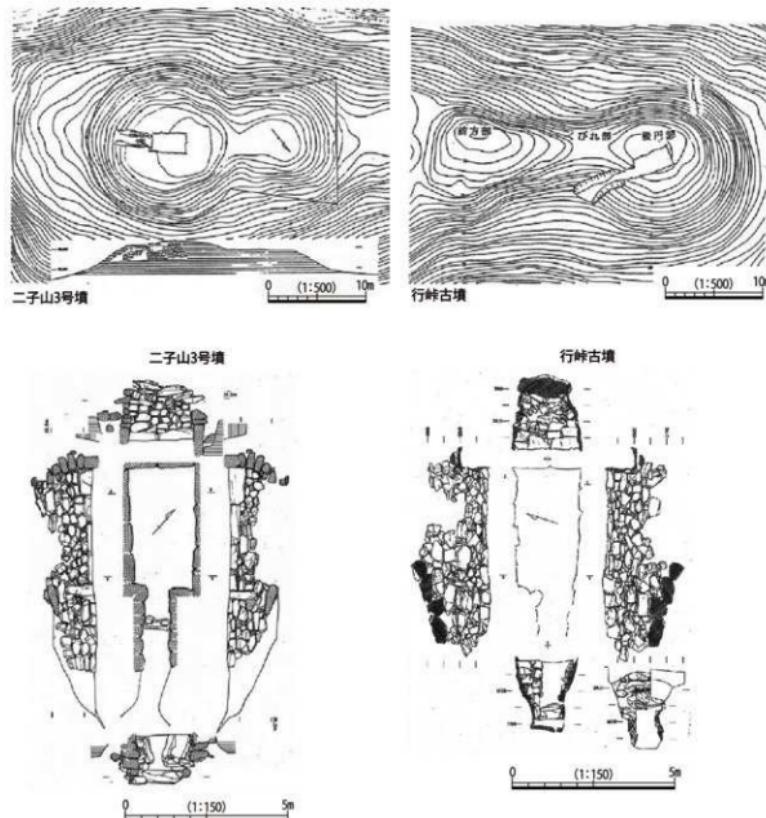


図3 二子山3号墳・行峠古墳 墳丘測量図・石室実測図（福井県立若狭歴史民俗資料館 1991・同 1992・網谷 1991）

古墳時代が終わり、奈良時代、律令期には天皇家やその周辺の人々に対する貢進品として、青郷から貢としてたくさんのお土産物が都に納められました。平城宮跡からも「青里御貢」、「若狭国遠敷郡青郷」といったように現在の青郷地区の地名が書かれた多くの貢の貢進木簡が出土しています。当時の役人がこの青郷の地域を支配していたということになるのですが、これはあくまでも推測でしかありませんが、この小和田古墳群や行崎古墳群に埋葬された支配者層が大和王権に取り込まれていって、後にその後裔がこの地域を治める役人となって貢として海産物や塩を都まで納めるために管理を任せていたのではないかと思います。

3. おおい町の海辺に築かれし古墳

(1) 神田古墳群・ヒガンジョ古墳群

おおい町の海辺に築かれた代表的な古墳が大島半島の先端部にあります。神田古墳群とヒガンジョ古墳群は大島半島の突端に近い宮留集落を中心として東側の山裾に神田古墳群、西側の山裾にヒガンジョ古墳群が所在しています。神田古墳群で15基の古墳が、ヒガンジョ古墳群では16基の古墳が確認されています。いずれも横穴式石室を埋葬施設としています。

昭和33年(1958)に神田4号墳・10号墳・11号墳、ヒガンジョ4号墳の4基の古墳が同志社大学によって発掘調査されました。これらの古墳群を築造した人々の集落がヒガンジョ古墳群の近くにある浜継遺跡で、同じく発掘調査が行われています。狭い平野ですが、同志社大学やその後の発掘調査で製塩炉跡や多量の製塩土器が出土しています。

ヒガンジョ古墳群では田畠の中にも古墳があつて、山裾には多くの古墳が築造されています。民家の庭の中にも古墳の大きな石室の一部が残されています。フェンスで囲まれて誰も触れないようにしている古墳もあります。ヒガンジョ4号墳は、巨大な石を積み上げて石室が造られています。推定で全長8mほどと考えられ、おおい町の史跡として指定されています。崇りはないと思いますが、地元の方々から恐れられているのか、ヒガンジョ古墳群の周辺ではお酒がお供えされている様子を見かけます。

この両古墳群の中で最も早くに築造された古墳が神田4号墳で、6世紀前半に位置づけられています。そして神田10号墳、11号墳が6世紀後半に、ヒガンジョ4号墳が7世紀前半から古墳が造られなくなる終末期に位置づけられています。

周辺には浜継遺跡や宮留遺跡などの製塩遺跡もあり、製塩炉跡や製塩土器が出土しています。今でも田畠の畦を歩くとたくさんの製塩土器を拾うことができるよう、おそらく神田古墳群とヒガンジョ古墳群の被葬者について、塩を作っていた集団、土器製塩の操業に深く関わった人々と推察されます。

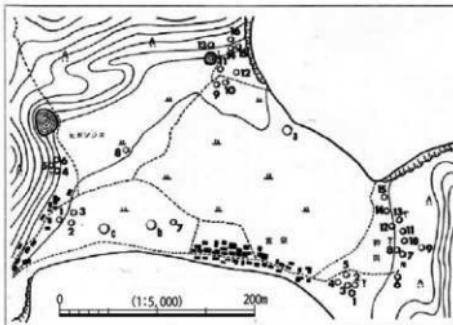


図4 神田古墳群・ヒガンジョ古墳群分布図 (石部他 1966)

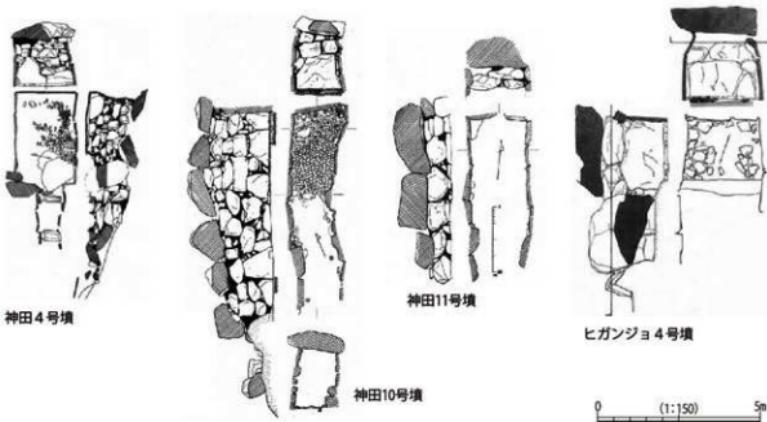


図5 神田4号墳・10号墳・11号墳・ヒガンジョ4号墳石室実測図（石部他 1966）

(2) 大飯神社古墳群

大島半島を離れて、佐分利川の下流域、少し内陸部に入りますが、大飯神社古墳群は山田集落にある大飯神社という式内社の背後の尾根や山裾、谷筋に30基ほどの古墳が所在しています。山頂部に1号墳が立地し、その他の古墳が山裾の傾斜面に張り付くように分布しています。また、その反対側の尾根には滝見古墳群が所在し、30基ほどの古墳が分布しています。

近くには水田が広がっているのですが、昔から滝水千軒、若宮千軒といわれるようなくたくさんの家が建っていたという伝承が残されています。農道改良工事の際に水田で芝崎遺跡の発掘調査がありましたが、古墳時代の建物跡が複数見つかっています。ごく一部の発掘で、その滝水千軒、若宮千軒が本当にあったかどうかまではわかりませんが、古墳の数から言えば周辺に多くの集落が存在したのではないかと考えられます。

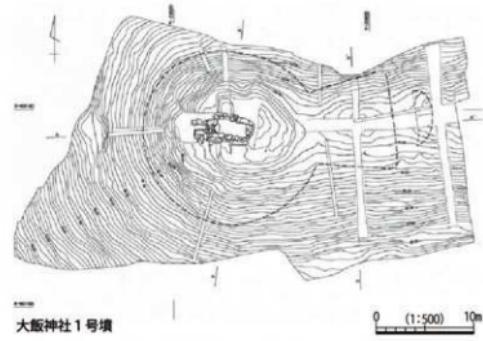


図6 大飯神社古墳群分布図・大飯神社1号墳墳丘測量図

（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2004）

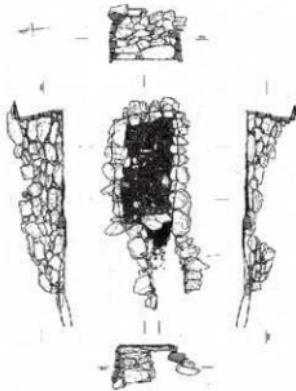
平成9～11年（1997～1999）にかけて舞鶴若狭自動車道建設工事に伴って、滝見古墳群・山田古墳群などとともに大飯神社古墳群では6基の古墳が発掘調査され、横穴式石室が見つかりました。1号墳以外の古墳は、いずれも無袖式の横穴式石室をもち、6世紀後半から7世紀前半に位置づけられています。

1号墳は佐分利川の下流域を眺望できるような丘陵の上端、標高86.8mに立地しています。全長26mの小型の前方後円墳で、二子山3号墳や行畔古墳と同じく小型の前方後円墳です。これまでおおい町は前方後円墳がない空白地帯と言われてきました。大島半島の日角浜古墳が前方後円墳ではないかと言われていましたが、まだ発掘調査がされていないので不確定な状況の中、この大飯神社1号墳の発見でようやくおおい町にも前方後円墳が確認されたことになります。

右片袖式の横穴式石室で、大刀、鉄鏃、弓、刀子、鎌などの鉄製品、玉類などの装身具、須恵器などが出土し、6世紀中葉に位置づけられています。この1号墳を中心に30基もの古墳群が展開するわけですが、1号墳を盟主墳のような存在として他の古墳の被葬者を支配していた、従えていたということになるのではないかと考えられています。1号墳の被葬者は、周辺地域を支配した在地首長と思われます。

この大飯神社古墳群と海との関連で言えば、大飯神社古墳群から海辺まで3kmほどの距離もあり、海と少し離れているので海との関わりが薄いと思われるかと思いますが、大飯神社古墳群の墳丘の外から製塩土器が出土しています。現在、私どもの館では企画展で大飯神社1号墳の出土品の展示をしていますが、その中の1点として製塩土器を展示しています。大飯神社古墳群から製塩土器が出土したからといって、古墳群の被葬者達が製塩集団とイコールということにはならない、短絡的に考えるのは危険かとは思いますが、このように内陸部の古墳群からも製塩土器が出土していることから、海辺の製塩集団と何らかの関わりがあるものと推察されるのではないかと思います。

大飯神社1号墳



大飯神社2号墳

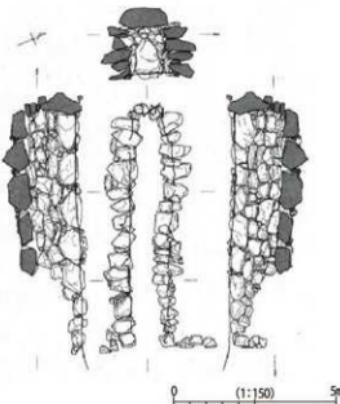


図7 大飯神社1号墳・2号墳石室実測図（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2004）



図8 内外海半島周辺の古墳分布図(国土地理院発行1/50,000 地形図「西津」「郷崎」を改変)

4. 小浜市の海辺に築かれし古墳

最後に小浜市の海辺に築かれし古墳ですが、冒頭にお話ししたとおり小浜市では古墳の発掘調査例が少ない地域です。海辺に築かれた古墳は内外海半島、そしておおい町と隣接する加斗地区に点在しています。もちろん消滅した古墳も含めての基数ですが、内外海地区で23基、小浜市の西端に位置する加斗地区で12基の古墳が確認されています。

その中の発掘調査例として田鳥集落近くに所在する傾古墳が挙げられます。傾古墳は無袖式の横穴式石室をもち、若干の副葬品が出土しました。7世紀前半に位置づけられている古墳で、傾遺跡などの製塩集団との関係が想定されます。

堅海集落には日暮山古墳群が、北山古墳の周辺には堅海製塩遺跡が、阿納尻古墳群の周辺には阿納尻遺跡があって、いずれの製塩遺跡からは製塩土器が出土し、古墳の近くに製塩遺跡もあって製塩集団と古墳との関わりが想定されます。一方で内外海地区のその他の古墳や、加斗地区的古墳の周辺では現時点での製塩遺跡や海に関する遺物の確認例が極めて少ないか、確認されていないような状況もありますが、そのような地域でもやはり製塩集団と何らかの関わりがあった集団ではなかろうかと思います。

以上で、高浜町、おおい町、小浜市の海辺に築かれた古墳についてご報告させていただきました。ありがとうございました。

フォーラムⅢ

丹後の海辺に築かれし古墳

与謝野町教育委員会 社会教育課 課長補佐 加藤晴彦

皆さん、こんにちは。与謝野町教育委員会の加藤と申します。若狭湾の一番西側、丹後半島からやって参りました。今日は丹後半島のお話しをしますが、準備の都合もあって、丹後の中でも、今日は舞鶴市域と大江町域の古墳には全く触れていません。丹後半島での事になります。

丹後半島の北海岸のあたり、京丹後市丹後町に神明山古墳という 190m の大型の前方後円墳があります。その北側の海岸部には 6 ~ 7 世紀の後期古墳として、20 基ぐらいあると言われている後期群集墳で横穴式石室をもつ大成古墳群があります。ただ、何をもって海の古墳と言うのか、実はなかなかわかりにくく、一概に海の古墳が何を指すのかといったことは、それほど簡単にお話しできません。

神明山古墳も大成古墳群も、時代は違いますが丹後を代表する首長墳です。トップの中のトップ、キングオブキングスの墳墓が海岸の横にあるということで、今でこそ埋まっていますが、いわゆるラグーンがかつてあり、そこに船が入り込んで天然の港になっていた場所です。神明山古墳のすぐ横までラグーンがありましたら、土砂が運ばれてどんどん埋まり、今はないように見えますが日本海側の沿岸地域にはかつてラグーンが点々とあったと言われています。丹後半島には今も残っているラグーンの久美浜湾がありますが、神明山古墳のところにももう一つ、竹野潟、竹野ラグーンがありました。

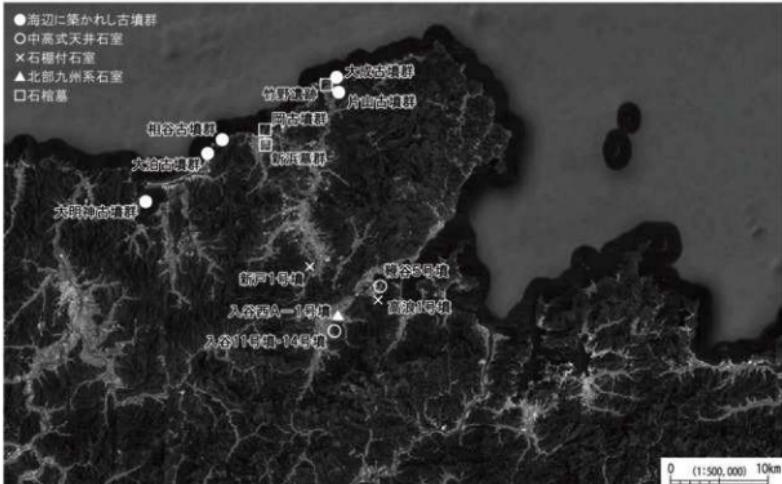


図1 関係古墳位置図(ベース図にGoogle earth写真を使用)

余談となりますのが、ラグーンは中世にだんだん埋まってしまうのですね。鎌倉期に地球上の気温が下がったようで、気温が下がると海面が下がります。海面が下がると海岸の風で海砂が内陸部に運ばれます。海岸線が下がって砂浜が長くなると風で運ばれる砂が多くなって、ラグーンが埋まってしまうと言われています。中世には埋まり始めたということになります。

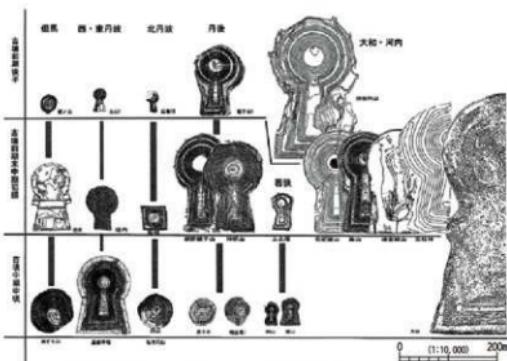


図2 古墳時代前期から中期前半の王墓の変遷（加藤2015）

1. 丹後と若狭の古墳の変遷

竹野ラグーン、竹野潟を中心に4世紀と6～7世紀の丹後を代表する海の古墳について、今回お話ししたいと思います。

丹後には4～5世紀の大きな古墳があります。丹後で大きな古墳を造っている4世紀頃、若狭の古墳は小さいのですが、5世紀に入って丹後の古墳が小さくなると若狭の古墳は前方後円墳となって大きくなります。ちょうど入れ替わるような感じですが、これは塩生産ではなく、おそらく海の交易・流通の窓口が丹後半島から若狭湾にシフトしたと思うわけです。そのような感じでポジションチェンジしていったという時代があると思ってください。今日のお話しの前段です。

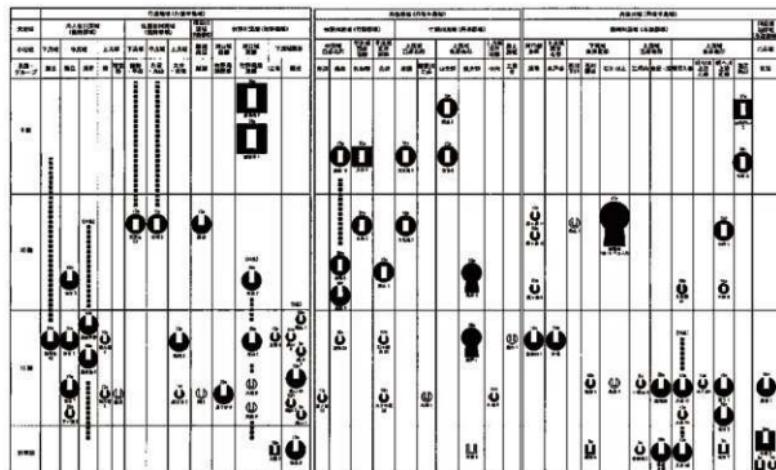


図3 丹後半島における古墳時代後期の古墳編年図（加藤2015）

6世紀の丹後半島の古墳の変遷を見ると前方後円墳が少ない。皆さんには横穴式石室の中に入ったことはありますか。石を組み上げたもので、石室の入口があり、中に入ると通路の羨道部と遺骸を安置する玄室という部屋があるといった構造です。奥の玄室が埋葬する部屋で、羨道部という通路の部分との境の玄門に立柱石、柱状に立った石があります。通路と部屋、羨道部と玄室からなるのが横穴式石室です。埋葬後は石室の入口を塞いでしまうのですが、何回も開けて追葬しています。

6世紀を通じて若狭の古墳は大きいです。

丹後の石室と比べてもわかりますが、丹後は玄室 자체が大きく、長いです。もう少し後の時期になると、若狭の古墳と比べても石室の玄室の大きさにさほど差があり

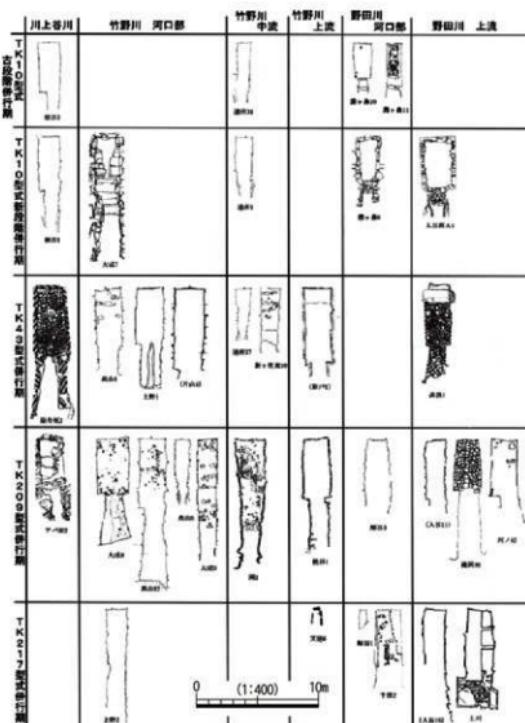


図4 丹後半島の主要な横穴式石室の編年図 (加藤 2015)

ません。むしろ丹後の石室の方が大きかったりするのですが、若狭の場合、全体的に通路がやたらと長いです。

墳丘の真ん中のあたりに石室を配置するのですが、例えば20mの古墳と50mの円墳とでは玄室の位置は変わらないのに羨道部をどんどん長くするのですね。この羨道部が長いということは古墳が大きくなるということになるのですが、若狭の古墳は見事にそのとおりで、通路の長い古墳があります。すなわち墳丘自体も大きいということになります。

2. 横穴式石室からみた丹後と若狭

丹後と若狭の地勢の似たところと言えば、平地が狭く、山ばかりというところです。丹後では大きな前方後円墳が4～5世紀に造られ、それに代わって若狭でも5世紀後半以後に大きな古墳が造られ、横穴式石室はかなり大規模化します。若狭の5世紀後半以後の特徴だと思いますが、この狭い平野で抱えられるような規模の古墳ではないと思います。製塩以外のものがないと、これほどの規模の横穴式石室は造らないですね。6世紀には完全に丹後と若狭の力関係が逆転しています。

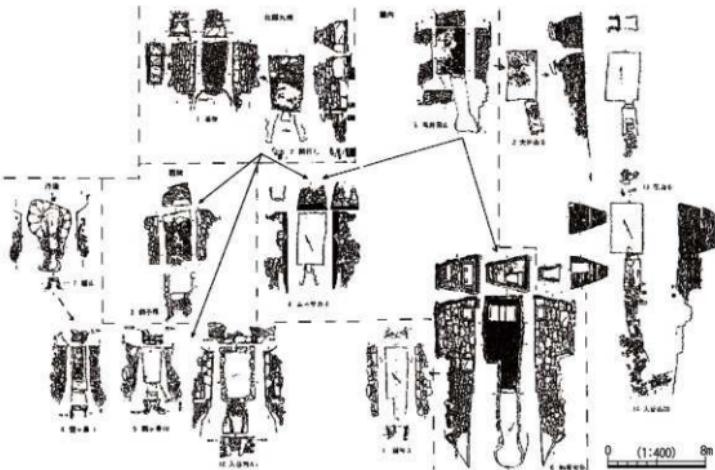


図5 丹後における導入期の石室の系譜（細川2000）

丹後と若狭は若狭湾を挟んで距離的に近い。ましてや海の航路を通じれば、もっと近いわけです。交流をしていたのかということをどのように明らかにするのか。

何か証拠がないかと考える上で、若狭の獅子塚古墳と丹後の入谷西A-1号墳を比較します。竪穴式横口式石室と見られる方もおられます、北部九州系の横穴式石室です。横穴式石室という墓制の一つで、造られたのは古墳時代の後ろ寄りの時代ですが、横穴式石室にも流行があって、形態がそれぞれの時代に応じて変わっていきます。九州北部で流行っていた横穴式石室の形態が日本海側だけでなく、日本列島のあちこちに広がっていくのですが、丹後と若狭のそれぞれの地域には北部九州系の横穴式石室があります。

石室の平面形を見ると両袖で前部が開くのですね（P50、トークセッションI－図3参照）。断面図で見ると、北部九州系の石室は前部のところが上方に上がって、この部分には天井石は載せません。いわゆる横穴式石室には羨道部にも天井石が載っていて石室の中に入るのですが、北部九州系の石室は入口の前部のところには天井石がなく、しかも横からではなく、墳丘の上から石室の中に入していくことになるのですね。これが初期の北部九州系の石室の一つの特徴です。

向山1号墳のように古い横穴式石室が若狭にはあるのですが、丹後でこのタイプの石室が出てくるのはずっと後です。入谷西A-1号墳は丹後における一番古い横穴式石室ですが、それでも6世紀中頃の時期で、しかも丹後の技術で造った石室ではない。この石室のモデルはどこから入って来たのかと言えば、若狭から入っ

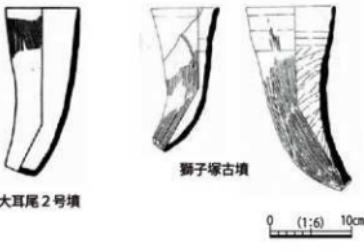


図6 大耳尾2号墳・獅子塚古墳出土角杯
(中村 1992・京丹後市教育委員会 2014)

ている可能性もあります。前庭部がハの字形に開き、石室には斜め上から入ることになるのですが、5世紀の段階のいわゆる北部九州系の横穴式石室の系統で、それが6世紀前葉に若狭の獅子塚古墳に伝わり、それが丹後の入谷西A-1号墳に伝わって変化していくと想定されている研究者もおられます。獅子塚古墳がモデルになって、その影響を受けて入谷西A-1号墳が造られたということです。

この背景には、首長同士の交流が必要ですが、交流があつてこのような墓制を取り入れ、なおかつ墳墓の造り方も取り入れた。見よう見ま似的で石室を造れないこともないのですが、やはり実際に造った人や指導する人・技術者も通じた交流がないと、このようなきっちりとした石室の形にならない。丹後における初期の横穴式石室の導入の契機はどうも若狭湾の首長との関係があり、その窓口は若狭であったと想定しています。

獅子塚古墳から角杯を見つかっていますが、丹後でも大耳尾2号墳から一つだけ角杯が出土しています。角杯は珍しく、あまり出土しないもので、このような文物の共通点も若狭と丹後の交易、交流の証ではなかろうかと言われています。

もう一つ、何か共通点はないかと思って探しました。若狭と丹後の関係と言えるかわかりませんが、若狭では東端の敦賀半島の周辺で穴地蔵1号墳や淨土寺2号墳・3号墳など5基の古墳の横穴式石室の中で石棚が見つかっています。丹後にも二つだけ石棚がある横穴式石室があります。新戸1号墳は前方後円墳で丹後の首長墳ですが、横穴式石室の中に石棚があります。もう一つ、高浪1号墳は石棚の下に空間がないので、階段みたいになっていますが、変形の石棚です。ただし、石棚がある石室の本場は紀伊となるので、若狭以外の地域との交流の可能性も考えられるかもしれません。若狭と丹後の関係だけではなく、近畿南部との関係を読み取らなければなりません。

若狭の石棚がある古墳は7世紀代ということで、時期的には丹後の石棚の方が一段階古く、6

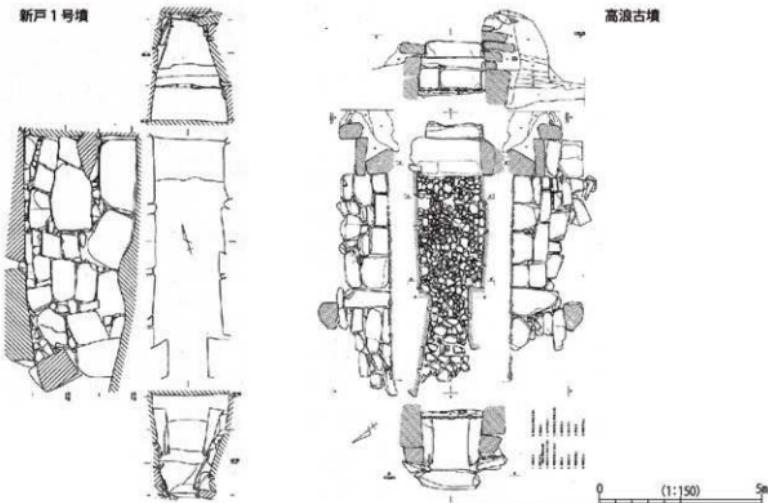


図7 新戸1号墳・高浪古墳石室実測図（大宮町教育委員会 1979・野田川町教育委員会 1985）

世紀段階のものしか丹後には見られないで、そのうち若狭でもまた古い時期の石棚をもつ古墳が見つかるのではないかという気がしています。

今、北部九州系の横穴式石室と石棚をもつ横穴式石室に見られる共通点を二つ挙げて、若狭と丹後との交易・交流の可能性をお話ししました。

3. 横穴式石室からみた丹後と因幡

次は、共通してない石室の様相も見ていきます。横穴式石室の流行、スタイルにはそれぞれ微妙な差があります。

今のところ若狭にはないはずですが、中高式天井をもつ横穴式石室が丹後にはあります。断面図で見るとおり、中高式天井とは玄室の天井部の真ん中あたりが1段上に上がっている石室です。

天井の真ん中が上がっているので中高式天井と呼んでいます。下高さんという鳥取県の研究者の方が論文で論じられ、中高式天井の本場は鳥取県鳥取市のあることで、旧国因幡にたくさんあります。下高さんの論文は1989年発行で、すでに25年ほど経過しているので、その後も事例が増えていると思いますが、1989年の時点で確認された31例のうち、鳥取県で15、16例ほどが見つかっているかと思います。

丹後半島では5例ほどの中高式天井をもつ石室があります。丹後半島の北端の大成古墳群で1例、あとは半島南部の天橋立のあたりに4例ほどがあります。もう1例は丹波、亀岡市域で確認されています。

丹後の中高式天井石室は、今のところは因幡の中高式天井からの影響という位置づけをしています。ただ、因幡にあって丹後にあって、同じく近畿北部の兵庫県北部の但馬にはこの石室はありません。今回、美浜町でお話しするにあたって但馬の研究者の方にもお話しを聞きましたが、但馬には中高式天井の石室は未だにないということで、但馬にはきわめて少ないかもしません。全くないとは言いませんが、横穴式石室の場合は割と石室の入口が空いているものが多いので、天井石が落ちてしまっていると中高式天井と判断できないことがあります、但馬にあれだけの古墳があれば1、2例は中高式天井の石室が見つかってもよいかと思いますが、今のところない。中高式天井石室の分布から見ても、海のつながりで因幡から但馬を飛ばして丹後半島へという流れが一つあります。ただ、中高式天井石室は若狭までは広がらないですね。

その代わり、獅子塚古墳と入谷西A-1号墳の例を挙げたように北部九州系石室を通じたラインがあるらしい。石棚は少ないですが、もし丹後と若狭で関係があるならば、このラインにあるものかもしれません。西からと東からという流れの中の二つのラインがあり、当時の豪族同士、トップ層同士の交流があったのではないかと思います。ちょうど丹後半島を境として、そのようなものが表面的に切れるということがわかります。今のところ6世紀の段階には丹後半島を境として西と東のネットワークがあると思っています。

4. 丹後の海辺に築かれし古墳

では丹後の海の古墳を見てみます。丹後半島の北海岸を、三つの地域に分けています。

地域社会の生業として、若狭では塩生産を中心というお話しでしたが、要するに海を生業の場にしている人達の古墳はどれにあたるのか。

その中でも比較的わかりやすい事例としては、大成古墳群のあたりにはラグーン、入り江があって物流の拠点、交易港としての性格が考えられるので、大成古墳群の被葬者は港を管理した人

達という位置づけができます。

もう一つのエリアは、網野潟、網野ラグーンがあるあたりとその西側の海岸線の相谷古墳群と大泊古墳群があります。6～7世紀の古墳ですが、周辺には6世紀以前の墳墓が全くありません。そもそも平地、平野もありませんが、6世紀に入ると古墳を造る人が確かに増えて、ほどほどの規模の横穴式石室が造られています。

田畠農耕地ではないところに古墳を築く人達が確実に現れるわけです。この立地から見れば、この人達は海に関係する人達と見なさなければ仕方ない。山には山の仕事もあって、このあたり

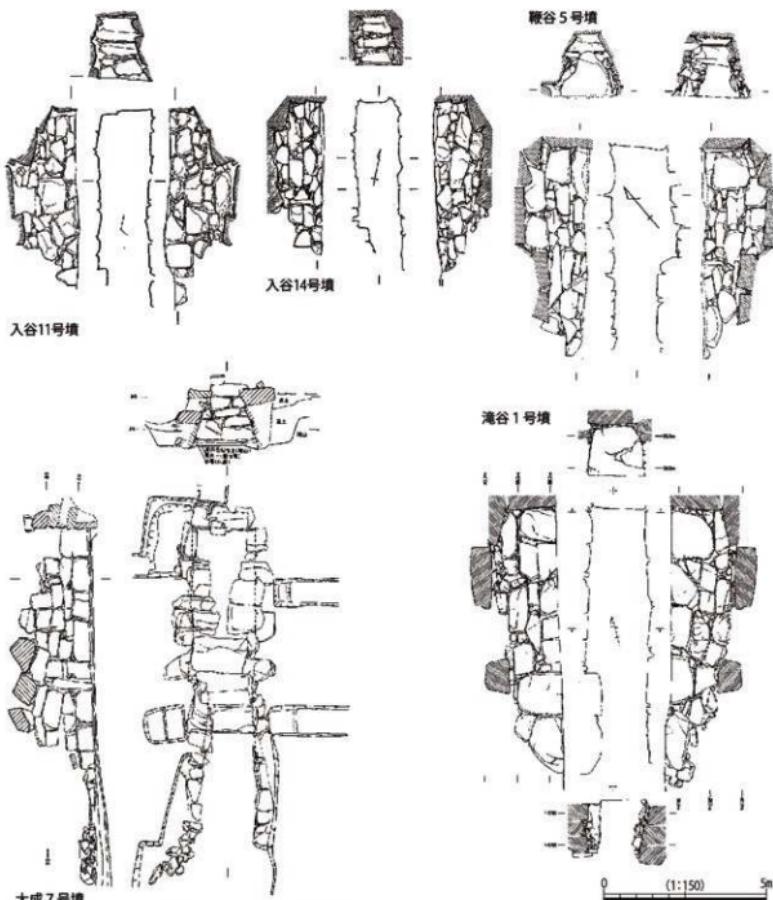


図8 丹後における中高式天井をもつ石室実測図

(京都府教育庁指導部文化財保護課 1968・佐藤他 2003・与謝野町教育委員会 2009)

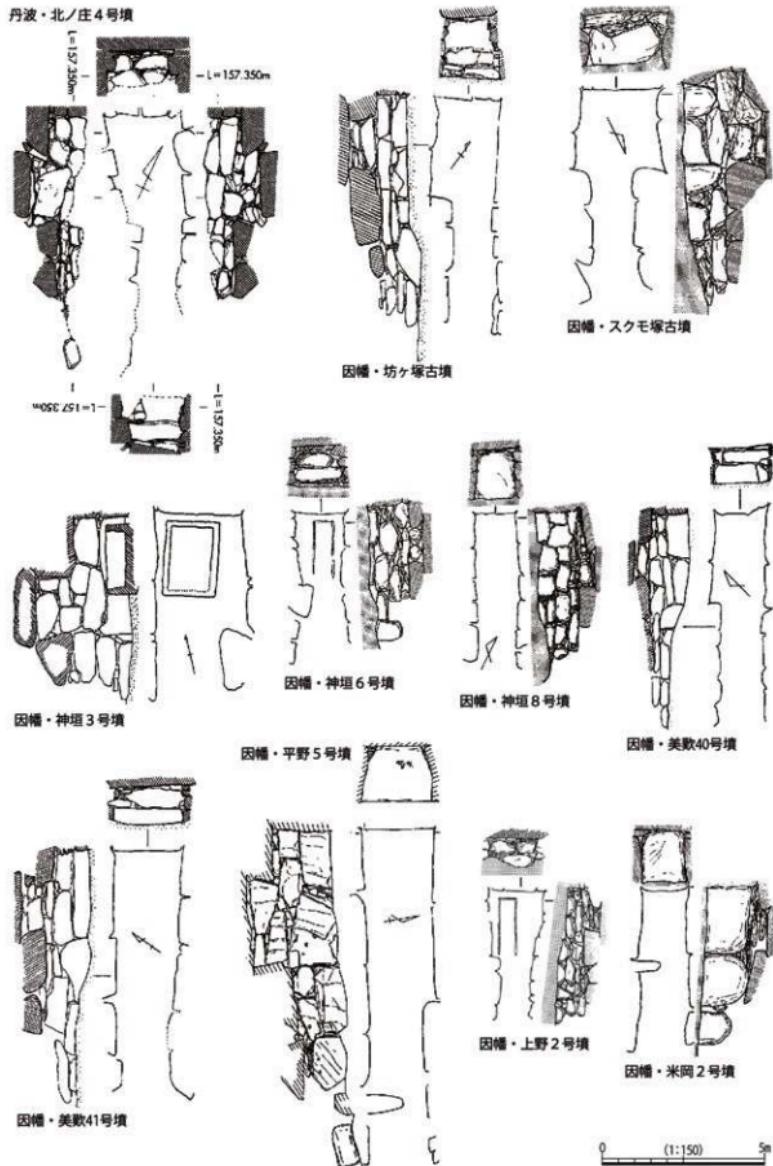


図9 丹波・因幡における中高式天井をもつ石室実測図（下高 1989・河野 2000）

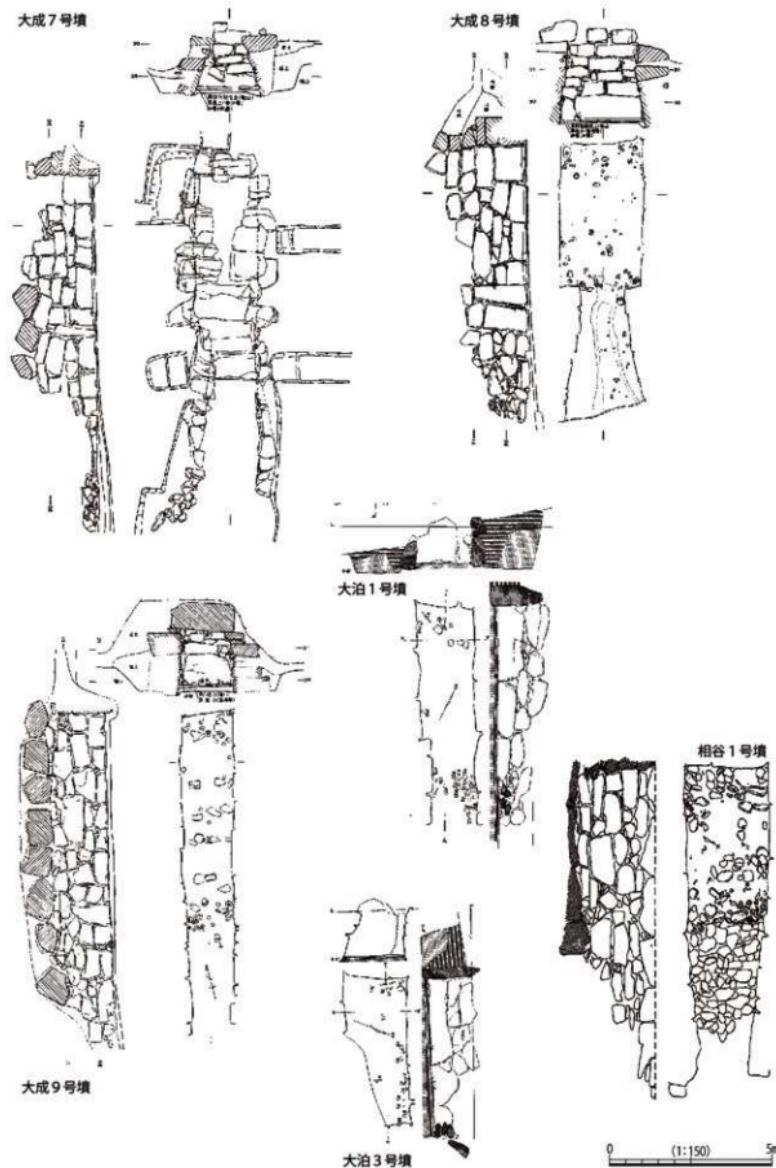
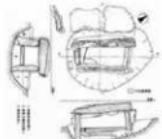


図 10 丹後半島北海岸の海辺に築かれし古墳石室実測図

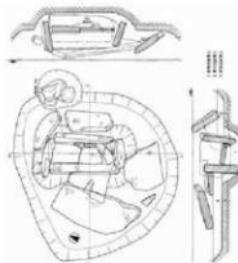
(同志社大学考古学研究会・大泊古墳群調査グループ 1964・京都府教育庁指導部文化財保護課 1968)



竹野遺跡 2号石棺



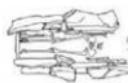
岡 2号填石室



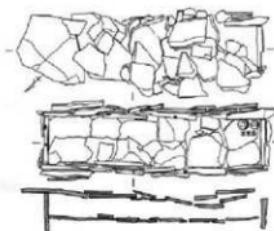
竹野遺跡 3号石棺



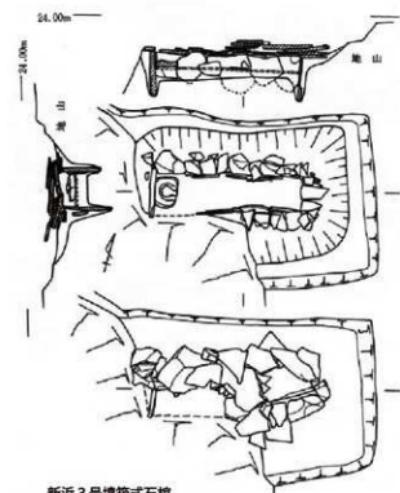
岡 4号填石室



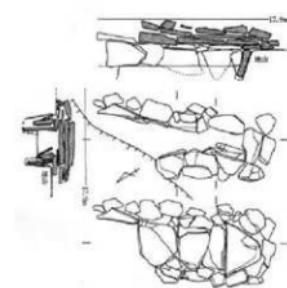
岡 3号填石室



勝山古墳



新浜 3号填箱式石棺



新浜 2号填箱式石棺

0 (1:60) 2m

図 11 丹後半島における石棺墓実測図 (樋口 1961・網野町教育委員会 1977・丹後町教育委員会 1983)

は山の中もあるのですが、周辺にはそれ以前の4～5世紀の古墳もなく、平地も全くなく、立地として海岸線を意識した古墳として突然6世紀にこの地に現れた古墳群というのは、やはり海を生業とした人達が被葬者と読み取ってもよいのではないかと思います。

同じようなものとして、久美浜のラグーンが現在も残っていますが、砂洲がずっと延びているところに後期古墳を造ります。横穴式石室ばかりですが、どうも古い時期のものはなさそうで、海を介した生業で生計を立てた者であろうと読み取れます。

さらに、網野ラグーンの東側にある岡古墳群と新浜古墳群の被葬者は少し変わった人達です。古墳の時期は5世紀終わり頃から6世紀前半のあたりで石棺墓を造ります。なぜか石棺墓が網野潟周辺に集中的に出現します。6世紀を前後するあたりの時期のものとして今のところ5例ほどがありますが、石棺を造っても墳丘がありません。古墳というよりは石棺墓で、一時の流行りだけなのかもしれません、変な墓制が現れるのが網野潟、網野ラグーンのあたりです。他の研究者の方とお話しをすると、いわゆる海岸線の砂浜のところに石棺墓を造る人達が日本列島中に点々といらるらしい。そのような人達は海との関係が深い人達ではなかろうかと目論んでいるようです。この人達が海で仕事をしていることを示す副葬品があればよいのですが、なかなか出土しないので、そうは上手くはいかないですね。

5世紀の終わりから6世紀代に海岸線の砂浜に造られた墳丘をもたない石棺墓の被葬者は、もしかしたら首長の元で働いていた現場の人達であった可能性もなきにしもあらずと予測はしています。海とつながるものが出土すればよいのですが、なかなかそうはいかないということもありますが、そのような事例もあるということです。

私の話はこれで終わります。ありがとうございました。

トークセッションⅠ

海辺に築かれし古墳～若狭湾沿岸～

与謝野町教育委員会 社会教育課 課長補佐

加藤晴彦

おおい町立郷土史料館 主査

川嶋清人

進行 美浜町歴史文化館 副館長（学芸員）

松葉竜司

【松葉】それではトークセッションを始めます。会場の皆さんからいただいたご質問も交えながら進めたいと思います。若狭と丹後は地理的な親近性もあって古墳の造り方がよく似ているのではないかと実は思っていたのですが、今朝に完成したという加藤さんの資料を拝見すると、意外にそうではなく、丹後には丹後のカラーがあるということがよくわかりました。



トークセッションの様子
(左から川嶋清人氏・加藤晴彦氏・松葉竜司氏)

1. 若狭の「海辺に築かれし古墳」を定義する

【松葉】今回のトークセッションは、若狭と丹後、広い目で見れば若狭湾沿岸の海辺に築かれし古墳ということで、その海辺に築かれし古墳とはどのようなものなのか、加藤さんのご報告でもその定義は難しいのではないかというご指摘もありました。そこで、まずその確認をしておきたいと思います。西部でも東部でも若狭では海浜部に造られた古墳の構造自体はよく似ていると思うのですが、改めて若狭西部ではどのような古墳が海辺に築かれし古墳と認識できるのか。川嶋さん、いかがでしょうか。

【川嶋】今回ご報告をさせていただいたように、やはり大飯郡では製塩はどうしても切っても切れない関係かと思います。おおい町では、特に大島半島の平野部全域からはほぼと言ってよいほど田畠から製塩土器が出土しています。また、高浜町でも海浜部で製塩遺跡が確認されています。ただ、製塩と言っても塩を作るだけが仕事ではなく、先ほど加藤さんもお話しされたように漁労など海との関わりもあり、塩を作るにも土器を作る集団もいたでしょうし、燃料となる木材を集めてくる集団など、いろいろな集団が分かれていたと思うのですが、大きくはやはり製塩に関する集団との関係が深いと私は思っています。

【松葉】海産物の入手・加工を含めた製塩を中心とした人達の古墳が若狭の海辺に築かれし古墳ということですね。古墳の立地も海のすぐ近くにあるということでおいかと思います。会場の方から「海からしか見えない古墳は海の民を意識した古墳と言えるのでしょうか」というご質問をいただきました。川嶋さん、いかがでしょうか。今日のトークセッションは3人しかいないので、すぐ発言の順番が回ってきます。

【川嶋】海から見える古墳といわれると、どうでしょうかね。山裾に築かれるような古墳は海からはなかなか見づらいと思います。例えば高浜町の二子山3号墳や行峠古墳は前方後円墳で、遠

くから見ても墳丘の形はよくわかるということはありますが、海から見えるという意識で古墳が造られたかどうか、何とも言えません。しかし、やはり象徴的な古墳ではあるかと思います。海から見えるという意識も少しあつたかと思っています。

【松葉】この質問の場合、例えば若狭東部の獅子塚古墳の場合、現在はどちらかと言えば海浜部から離れているのですが、古墳時代や古代においては久々子湖がラグーン、潟湖として内陸の方にぐっと入り込んで、言うなれば今は海には築かれていませんが、古墳時代当時からすれば海辺に築かれし古墳であったのではないかと思うのですね。

若狭西部の佐分利川流域では大飯神社古墳群から製塩土器が出土しています。製塩に関わっている人達の古墳群かと思うのですが、古墳群の立地は海から離れています。それでも海から古墳群が見えるのではないかという気もするのですね。広義で言えば大飯神社古墳群なども海辺の古墳なのではないかと思うのですが、川嶋さん、いかがですか。

【川嶋】学生の頃、大飯神社古墳群の発掘調査を行っていました。その後、福井県埋蔵文化財調査センターに就職して、引き続き大飯神社古墳群で1号墳の発掘調査をさせていただきました。古墳群は本郷地区にあるのですが、確かに1号墳からは海辺がよく見えます。古墳が造られた当初、おそらく海から古墳がきれいに見えたのではないかと思います。

【松葉】敦賀半島東岸の沓丸山古墳でも製塩土器が出土していますが、敦賀平野のちょうど首先にあたる、海岸線からはかなり離れて平野の南端に位置する衣掛山古墳群でも3号墳と15号墳から製塩土器が出土しています。ざっくりとし過ぎで、踏み込んで議論しなければならない問題でするので今回は止めておきますが、敦賀平野でも衣掛山古墳群の被葬者層が海浜部にいる製塩集団を掌握する、コントロールするというような視点で考へる必要があるように感じます。

若狭の海辺に築かれし古墳を定義するとすれば、「製塩集団を含めた海に関わる人達が埋葬され、海を意識して造られている古墳」ということになろうかと思います。

今日は大成古墳群も含めて、丹後半島の北岸でのいくつかの事例を加藤さんにご紹介いただきました。おそらくこれらの古墳群は海辺に築かれし古墳ということになるかと思うのですが、このような古墳の分布がやはり丹後半島の北端に集中していましたね。

【加藤】最後にお話しした相谷古墳群、大泊古墳群などの古墳のあり方は、各地の事例を拾っていくと日本中、どこにでもあるのではないかと思います。ただ、たまたま取り上げた事例だけで、いわゆる農耕する平地が少ない場所、なおかつそれよりも前の時代に古墳がない場所に造られた横穴式石室をもつ群集墳などは、海とのつながりが深いと想定することができるのでしょうか。平野が近くにあると条件が変わってしまい、当然、農耕もして海にも行ったということになるかと思いますので、あえてそのような条件を厳密に揃えている古墳という事例を拾い上げました。人は食べてていくために身の回りにあるものは何でも使います。海にも行く、農耕もするということで、例え海の古墳と言っても全く土地がないわけではないので、相谷と大泊の古墳群の被葬者も農耕をしていたと思います。

しかし、やはり気になるのは、海の古墳だから海が生業の場所となります。では実際に製塩、塩を作っていてなければ、何をしていたのかということになります。漁業をしていましたということになるのかもしれません。そうであれば漁撈で捕った魚をどのように流通させたのか、流通させるだけで生業として成り立っていたのかという議論になってしまいます。製塩についてはある程度製塩土器が集中するということでかなり正確に想定できるのですが、単純に漁撈だけをして食べていけるのかという疑問は当然あると思いますね。

【松葉】川嶋さん、いかがでしょうか。結構鋭いご指摘で、例えば須恵器生産も1年中須恵器を焼いているのか、半農・半陶というパターンはないのか。同じことがおそらく製塩にも言えるかと思います。

【川嶋】そうですね。私が報告した広瀬古墳群をどう捉えるかということも、おそらく今のご指摘に関わってくると思います。この古墳群の近くには平野もなく、どのように塩作りをするのか、何を生業としていた集団なのか、謎になっています。しかも広瀬古墳群まで行き着こうと思えば、いろいろな峠をいくつも越えていかなければいけないということもあります。もちろん製塩も含め、なぜここにこの古墳群が造られたのかということも考えていかなければいけないと思います。今、加藤さんがおっしゃったとおり漁撈だけでは生活していくこともあります、証拠がなければ憶測で言うことしかできませんので、なかなか難しいところです。

【松葉】そうですよね。若狭の海辺にある古墳は大島半島の神田古墳群のように6世紀前半から造営が始まるような古墳もあるのですが、同じ大島半島でもヒガンジヨ古墳群や敦賀半島の多くの古墳群では逆に6世紀後半から7世紀にかけて海辺の古墳が造られて、土器製塩もその頃から盛行していったように古墳と製塩のピークが重複します。農耕もしていた、製塩をしていた、魚を探っていた、そのあたりの実態はわからないのでなかなか難しいですが、とりあえず現時点ではそれはそれということで海辺に築かれし古墳は先ほどの定義を前提にしておきたいと思います。

2. 石棺墓・横穴墓と海辺の人々

【松葉】加藤さんのご報告で興味深かったのは、最後に触れられた石棺墓です。5世紀の終わり頃から6世紀前半、ひょっとすると6世紀中頃まであったのではないかということでしたが、これについては他の研究者のコメントも引き合いに出されて、これこそがまさに海辺の人達の墓ではないかといったご指摘をされていました。私はこの石棺墓に疎いので、個人的にもぜひお聞きしたいのですが、他の地域の事例も踏まえて教えていただきたいのですが、いかがでしょうか。

【加藤】実は私もよく知りません(笑)。丹後で仕事をしているので石棺墓があるということは知っているのですが、ちょうど京丹後市網野町の網野湯の周辺で集中して石棺墓が見つかっています。砂丘地帯に造っているのですね。海岸の横で、海を見晴らす場所、海と連続している場所とも言えるかもしれません、そのようなところに造っている石棺墓は少し特殊な事例です。ただ、先ほどの神明山古墳や大成古墳群の竹野湯周辺にもないこともないのですが、少しパターンが違うような感じがします。石棺墓そのものもいろいろと分類できそうな感じです。

他の地域となると、私も論文で書かれたものをしっかりと読んでなく、最近、海の古墳を一生懸命研究している人(西川修一氏)が神奈川県におられて、その人とずっとやり取りをしているのですが、「加藤君、丹後半島の海岸線に石棺墓はないの?」「ありますよ。」「やっぱりあるんだね」といった感じです。

石棺墓ではないですが、五色塚古墳の近くの埴輪棺のように、海岸線の砂浜のところに墳丘をもたずに単体でごろごろ、ごろごろと埋葬される人達、いわゆる海部系の人達ではなかろうかという目測を立てているということがあります。ただ、副葬品がほとんど出てこない。では何が出土したら海部の古墳なのかということになってしまないので難しいのですが、海部の目測としてそのような海岸線の砂浜沿いに墳丘をもたない、単体でぼこぼこと埋葬される人達を海の人というイメージで括れるのではないかという目測がある段階です。若狭にもあるのではないかですか。

【松葉】どうですか、川嶋さん。若狭西部にありそうですか。

【川嶋】今のところないです。

【松葉】確かに若狭では見たことないですね。浜糞遺跡では砂浜の上に埋没古墳か、土坑墓があつたかと思います。

【川嶋】浜糞古墳という埋没古墳です。特異な古墳で、横穴式石室ではなく木棺を使った埋葬施設が見つかったという報告があります。今のところこの1基だけですね。

【松葉】若狭ではイレギュラーな例と思います。

石室ではなく、山の斜面に穴を掘り込んで土中に直接埋葬する場所を造る横穴墓という墓制があります。例えば後の奈良時代に官人になっていくような人達が横穴墓に埋葬されているといった見解も多いのですが、最近では島根県の隠岐島に横穴墓が結構あり、それこそ海部、海人集団の墓ではないかと議論されていたかと思います。確かに丹後にも横穴墓は多かったかと思いますが、その立地は丹後半島の中でも内陸の方に入るのでしょうか。

【加藤】横穴は山の腹にゴンゴンと穴を空けて、その中に埋葬するものです。横穴墓が1つ見つかれば、5、6、10、20と近くでたくさん横穴が見つかります。被葬者にどのような人達がいるのか。松葉さんが話したように横穴墓はだいたい7世紀が主流で、その後の8世紀に入ると日本列島に中央政府、国家体制が整備されますが、横穴墓には役人のような人達が埋葬されるのではないかと言われているのですね。確かに丹後にも横穴墓がありますが、残念ながら海ではなく内陸部に分布しています。横穴墓の中から厨と書かれた墨書き土器も出土して、被葬者は官的な匂いがするのですね。海とは直接関係ありません。

【松葉】陸化した海部集団の墓でもなさそうです。最近、大島半島の付け根のあたりで犬見古墳群で横穴が発掘調査が行われています。福井県埋蔵文化財調査センターの発掘調査なので、川嶋さんは直接関わっていないと思いますが、あの横穴はどのように評価できそうですか。

【川嶋】あの横穴に関しては、まだ正式な報告が出ていませんが、横穴の中から近代のものやゴミも結構出てきたということもあって、横穴墓のようなものではないかと思われます。地元の方からは、おそらく冰室として使用されていたのではないかということをお話しもお聞きしています。

【加藤】丹後の横穴墓は海にはないとお話ししましたが、あるかないか全くわからないです。横穴墓がある山の腹を掘れば見つかるのですが、当然、横穴は埋まっています。山の上から土が崩れてきて埋まれば全く横穴墓が見えない。横穴墓が海岸線にあるかないか、ないとも言えないし、あるかもしれません。わからないので、海岸線に横穴墓があつて海部系の墓ではないか、丹後半島でわかるかと言えばわからないということにはなるのですが、ないということにもならないということだけ申しております。横穴墓はわからないです。

【松葉】そうですね。ありがとうございました。何年か前に敦賀半島東岸、敦賀市側でも香というところで複数基の横穴が発掘調査されているのですが、古墳時代のものかよくわからなくて、諸説あるような状況です。今後注意しておかないといけないので、よくわからないということが実際のところかと思います。



図1 犬見古墳群横穴分布図(福井県
教育庁埋蔵文化財調査センター-2018)

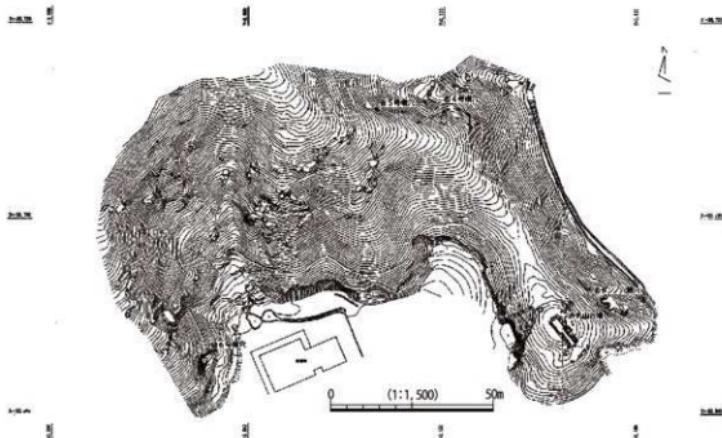


図2 沢横穴群分布図（教資市教育委員会 2013）

3. 若狭と丹後の横穴式石室

【松葉】石室の構造が顯著なのですが、現在の鳥取県、山陰の因幡から丹後に伝わった墓制と若狭から丹後に伝わった墓制、それぞれが丹後で混じり合っているというお話しが加藤さんからありました。ちなみにその混じり合っている場所は与謝野町のあたりでしょうか。

【加藤】そうそう。

【松葉】そうなのですね。与謝野町は国府があった宮津のあたりからは少し離れて谷が入り込んだところにありますよね。そこで混じり合っているということですが、獅子塚古墳の石室をモデルにして入谷西A-1号墳の石室が造られた、入谷西A-1号墳の九州系石室のモデルは獅子塚古墳ではないかというご指摘でした。ちなみに若狭の6世紀前葉の時代は若狭東部で獅子塚古墳、若干時代が降ってきよしの古墳群と九州系の横穴式石室が造られています。若狭西部でも同じ時期にいくつかの九州系の石室がありますが、いかがでしょうか。

【川嶋】二子山3号墳が北部九州系と言われている横穴式石室で、その次に造られた行峠古墳が畿内系の横穴式石室を備えているということで、その間に中央からの何らかの影響があったと言われています。

【松葉】入谷西A-1号墳の石室は、獅子塚古墳に限らずとも6世紀前葉の若狭の北部九州系の横穴式石室であれば、どの石室も入谷西A-1号墳のモデルの候補になり得ると思います。そうであればより地理的に近い若狭西部から石室の技術をもってきててもよいのではないかと思います。

【川嶋】時期的に見ても二子山3号墳、行峠古墳、大飯神社1号墳で前方後円墳が消滅するという時期になると思いますが、獅子塚古墳はもう少し早い段階の古墳ということで、高浜町から舞鶴を越えて丹後に行く道が一番手っ取り早いかと思います。

【松葉】加藤さん、いかがでしょうか。

【加藤】入谷西A-1古墳の石室は入口がハの字状に開いて、真横から石室に入るのではなく斜め上から石室に入る構造です。要するに墳丘の上から石室に入るという北部九州系の初期石室の

特徴を備えています。若狭では向山1号墳などがもう一つ前の時代にあり、今回、獅子塚古墳を引き合いに出しましたが、獅子塚古墳と入谷西A-1号墳では、獅子塚古墳の方が年代的に1型式か2型式古いので1世代から1.5世代ほどの年代差があります。獅子塚古墳からダイレクトというわけではなく、まだ見つかっていない北部九州系の石室が若狭のどこかにあり、影響を受けているのではないかと思っています。

若狭湾沿岸、若狭湾の周辺のラインをどう読むかという議論ですが、入谷西A-1古墳は丹後半島でも鳥取県側、日本海に出っ張った方ではなく、東側の若狭湾に面した方に立地しているわけです。若狭湾周辺というラインの中で獅子塚古墳の次世代の人達の古墳があつて、丹後半島の東側で豪族、首長連の連携、つながりがある中で古墳の形態を採用している。今のところ丹後半島でも西側ではこの手のタイプの石室はまだ見つかっていない。入谷西A-1古墳、霧ヶ鼻古墳群など丹後半島でも若狭湾に面したところではいくつか見つかっていますが、北部九州系の石室は形態が微妙に違います。全く同じではないのですが、斜めに入り込んで、ハの字に開いた石室の入口があるという約束事をもつて石室は丹後半島でも若狭湾に面したところにある。お墓を造る共通性、他界観を同じくするのか、同じモードのお墓を造っているのか、つながりがあったというのは丹後半島の中でも東側の若狭との関係がより強いのではないかというイメージをもっています。

【松葉】そうですね。福井県立大学小浜キャンパスの横の山上で最近見つかった丸山城址古墳では、発掘調査で意外にも北部九州系の横穴式石室が発見されました。若狭の場合、5世紀後半から6世紀前半の石室であれば、ほぼ九州系石室の範疇に入るのですが、実際に若狭の九州系石室の形態が全て同じかと言えば、それぞれ違います。当然、技術を受け入れる側、それもどの地域からどのように受け入れるかという問題が関わってきますので、若狭でも全て同じというわけではないというのが、実際のところかと思います。

会場の皆さんからご質問をいただいています。「九州系石室と竪穴系横口式石室とはどう違うのか、もしそれらが似ているのであれば但馬、兵庫県北部との関係があるのではないか」というご質問です。

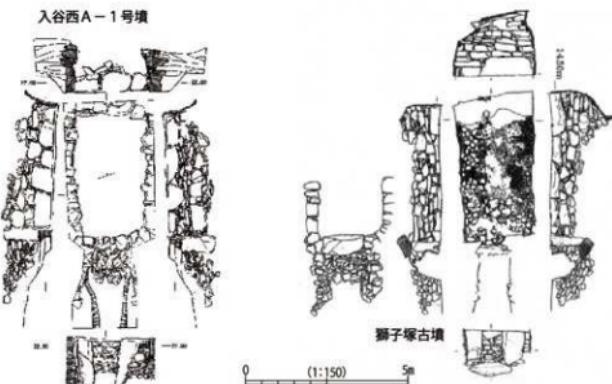


図3 入谷西A-1号墳・獅子塚古墳石室実測図（加悦町教育委員会 1983・入江 2009）

【加藤】竪穴系横口式石室には微妙な定義がありますが、北部九州系石室とは石室の平面形そのものが違います。普通の石室は横からすっと入れるので、北部九州系の石室は斜めに上がっていくのですね。天井石が石室に載っているのですが、北部九州系石室は入口に天井石がありません。竪穴系横口式石室の定義はすごくストライクゾーンが広いです。いろいろなジャンルがあって、単純に言えば少し段差があるものも竪穴系横口式石室になってしまいますので、厳密に言えば竪穴系横口式石室は用語として定着しているようで、していない感じがしています。確かに但馬には竪穴系横口式石室と言われているものがあり、丹後にもあります。石室の入口が斜めにはならないのですが、天井石がない微妙な石室が網野のあたりにあります。

弥生時代、但馬と丹後の土器はそっくりです。方言が似ているみたいなもので、かなり日常的な生活習慣の共通性が高いのが但馬と丹後です。むしろ中高式天井の石室が但馬にないのが不思議なくらいです。脱線しますが、6世紀中頃から後半、7世紀にかかる頃に中高式天井の石室が因幡にあって丹後にもあります。これと全く同じ現象を起こすのが、4世紀から5世紀前半の丹後型円筒埴輪です。普通、埴輪はラッパ状に開いているようなイメージがあるので、丹後型円筒埴輪は上の方が丸く収まって、穴が開いています。この埴輪と中高式天井石室の分布は全く一緒で、因幡にあって、丹後にあって、但馬にない。

当然、日常的に丹後と但馬は親しいのですが、なぜか因幡と丹後半島とのつながりが時折顔を出します。このような現象が中高式天井の石室に表れる。竪穴系横口式石室が但馬にあって、当然、丹後にもある。このようなつながりも丹後にもあります。丹後半島の中に、但馬とのつながりがあり、なぜか因幡が但馬とつながらずに丹後半島とつながるという事例があります。

【松葉】ありがとうございました。この「中高式天井の石室を導入した目的と中高式石室の使い方を知りたい」というご質問もいただいています。この起源は因幡、鳥取県ですよね。

【加藤】おそらく中高式天井の石室の震源地は因幡です。それが丹後に伝わってきて、若狭では途切れて、むしろ南下しているのかもしれません、要するに丹後から東の若狭には流れて行かないという交流関係があるということです。では、なぜ若狭に中高式天井の石室がなかったかというお話しですが、それは流行、モード、地域において石室はこう造るということがあったと単純に考えてよいと思います。あの石室の形態自体に意味があるものではないと思います。いわゆる窮窿式天井というドーム状に石を積み上げていく石室があるのですね。その形がもっと簡略化して石が大きくなっていくと中高式石室になるということが一つのパターンとして言われています。要するにそれ以前からある古い形態の横穴式石室のいろいろなパターンがある中の一つで、そして地域色、地域の特色、この地域はこのようなお墓を造るというような約束事があり、それ以外に特に意味があるというわけではないということかと思ってください。流行りです(笑)。

【松葉】同じようなものとして、石室の石棚もそうですよね。例えば和歌山県の岩橋千塚古墳群の石棚が初現で、紀氏の墓制ではないかと言われたこともありましたが、最近は海上交通に関わる人達の墓制ではないかという指摘が多くあります。

若狭では石棚は7世紀前半の敦賀半島周辺に集中していますが、丹後では6世紀後半の新戸1

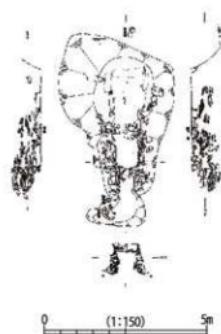


図4 離山古墳石室実測図
(網野町教育委員会 1993)

号墳と高浪古墳がありますね。近江北部、旧マキノ町でも石棚ではなく、石屋形と考えられるものが6世紀後半に斎頼塚古墳に入っています。ルートとして丹後を経由して若狭に石棚が伝わったかもしれないし、近江を経由したかもしれないし、時期が下つて直接畿内周辺から入ってきた可能性もなくはないということになります。

西と東との文化のやりとりの中で、いろいろなものがたまたま交わるところが与謝野町であり、丹後であるということでおいです。

【加藤】中高式天井の石室のお話しをしましたが、因幡のあたりも全ての石室が中高式天井の石室ではありません。やはり分布に粗密があります。丹後半島の中でも全てがそうではないので、因幡が震源地とは言いましたが、因幡の中でもそれを使う集団とそうでない集団がいるということです。

【松葉】ありがとうございました。

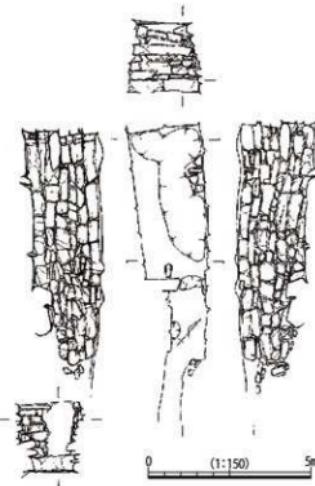


図5 斎頼塚古墳石室実測図(辻川1998)

3. 若狭の古墳、よもやま話

【松葉】若狭の古墳などについて、会場の皆さんからいろいろとご質問をいただいています。まず「小浜市の古墳の発掘調査が進んでいない理由は何でしょうか」ということです。

【川嶋】発掘調査の件数が少ないこともあると思いますが、若狭西部に比べて古墳の数もすごく少ないということもあります。松葉さんの若狭東部のご報告をお聞きしても、古墳の数が少ない。私はおおい町に勤めていますので、200基くらい古墳があるのが普通かと思っていましたが、海浜部を含めて小浜市から美浜町にかけて古墳が少ないと強く感じました。ただ、発掘調査が進まないというのは工事も少なく発掘調査の対象にならない、学術調査の対象にもならなかつたということもあるのでしょうか、そのあたりは発掘を担当される方にしかわからないところもあるかと思います。

【松葉】担当者のやる気がないということですか(怒)。

【川嶋】そういうわけではありません(笑)。

【松葉】今のお話は古墳の数そのものが少ないから必然的に発掘調査の件数も少ないということですね。意外にそこが若狭の東と西の典型的な違いですよね。

次のご質問です。「小浜市の岡津遺跡とすぐ横の加斗地区の古墳群の関係をもう少し詳しく聞きたい」ということです。

【川嶋】岡津製塩遺跡は国の史跡に指定されています。岡津製塩遺跡はおそらく奈良時代に入つてからの遺跡になりますので、直接的に古墳時代の製塩に関わっていたかどうかはわかりません。岡津製塩遺跡の周辺にもいくつかの製塩跡が残っており、製塩土器の出土もあるように聞いていますので、何らかの製塩集団との関わりがあったのではないかと考えています。

加斗から少し離れておおい町に入ると船岡製塩遺跡があります。岡津製塩遺跡とほぼ同時期に操業された大規模な製塩遺跡ですが、その近くの小堀集落の背後の裏山にも10基以上の古墳群が

二つあります。6世紀終わりから7世紀初め頃の古墳群だと思いますが、この古墳群の被葬者もおそらく船岡遺跡の前段階に何らかの製塩に関わった集団の古墳群ではないかと思っています。

【松葉】ご質問がもう一つあります。「大島半島は舟で行き来しないといけないのですが、昔は道もなく、橋もない中で、なぜ古墳が造られたのか」ということです。

【川嶋】高浜町和田あたりを掘るとすぐに砂が出てきます。今からおよそ1,200年前、西暦800年代に大島半島は高浜町和田とつながった、それまで大島半島は本当に島であったと言われています。大島半島は昭和40年頃まで船で往来していたところで、なぜそんなところに人々が住んで、たくさんの群集墳があるのかということですが、これも不思議なことで、もちろん製塩、塩を作っていたというところが大きいと思っています。それ以外になかなか答えが見つからないというのが現実です。

【松葉】舟で行き来していたということですね。「奈良時代には官道、いわゆる北陸道や東海道、東山道など国家が整備した道がありますが、若狭湾沿岸の場合、それ以前の古墳時代の交通手段は陸路か、海路か。古墳時代の若狭湾の交通路はどうであったのか」というご質問をいただいています。

【川嶋】私はどちらも使っていたと思っていますが、当時の海岸線は今よりもっと内陸に入っていた、現在、国道やJRが並行して走っているあたりは湿地帯であったと言われています。私が思っているのは小浜市の加斗あたりからやや内陸に入り、その湿地帯を避けつつ、佐分利川に沿って上流へ行く方法があったのではないか。そこから高浜町に抜けて舞鶴市、丹後へと抜ける道を考えています。佐分利川上流域にもたくさん古墳群が分布していますので、あのあたりに何か官衙的な施設があったのではないか。これも推測ですが、このように考えています。

【松葉】大飯郡衙、郡家があったのではないかということですね。若狭東部には北陸道が通り、近江の湖西、滋賀県高島市の旧今津町から上がってきて熊川を抜けて若狭に入り、そこから東に進んでくるのが奈良時代の北陸道のルートで、おそらくほぼ同じようなルート、原北陸道というべき道が古墳時代からあったのであろう。例えばそのルート沿いにあるのが獅子塚古墳や佐田古墳群、旧三方町のきよしの古墳群で、古墳の立地と古墳時代のルートはほぼ重複しているのではないかと思います。

4.まとめ

【松葉】最後になりますが、加藤さんと川嶋さんからそれぞれ一言コメントをいただいて、閉会としたいと思います。

【川嶋】今回、高浜町、おおい町、小浜市を対象に若狭西部の海辺の古墳を中心にご紹介しました。私は小浜市出身ですが、小浜市には古墳が少ないということを改めて思いました。おおい町



図6 小浜市加斗地区の古墳群分布図
(国土地理院発行1/25,000 地形図「小浜」を改変)

でも 200 基ほどありますが、発掘調査されている古墳はごくわずかしかありません。これから工事が増えてくると発掘調査することもあるかと思っています。学術的な発掘調査も含めて今後いろいろと調査していければと思っています。

【加藤】丹後半島から見た眼といった感じになるので、若狭の皆さんにどのように伝わるのか、私にはわからないですが、一つ気になるのは中高式石室と北部九州系の石室の境目があるとお話ししました。北部九州系の石室は南側の影響をあまり考えなくてよいのですね。いわゆる日本海伝いに伝わったという形になるので、そのような位置づけでよいかと思うのですが、もう一つは時代を超えた中でいろいろな重ねをしていくのですね。中高式石室は 6 世紀の話ですが、しかし 4 世紀には円筒埴輪でも因幡と丹後半島とつながりはあるということで、時代を超えて、150 年くらい飛んで同じようなラインがあるのですね。鳥取県と丹後半島のつながりはずつとあったのであろうと思います。

では、いわゆる北部九州系の石室、若狭湾沿岸、丹後半島の東側とのラインも 6 世紀の段階でありますですが、これもさらに後になっていくと、松葉さんにお世話をなったのですが、7~9 世紀に若狭湾を震源地とするへんちくりんな土師器の甕があります。「若狭湾系甕」という名称で、段々甕という俗称があって、美浜町歴史文化館でも展示されていますが、その甕の分布を拾うとちょうど若狭湾沿岸地域に広がりがあるって、西への分布は丹後半島の与謝野町ぐらいのところで止まってしまいます。やはりそのような人の流れ、まとまりがあるということは、100 年、200 年と時代を超えてあっても同じような流れがあり、そのようなものをいろいろと色を重ねていくと、ずっと底流としてあるという気がしました。

【松葉】今の加藤さんの土師器甕のお話しさは『丹後国遷政』という与謝野町教育委員会が発行された書籍にまとめられていますので、興味がありましたらご覧いただければと思います。

次回は若狭と三河、志摩、能登の地域を取り上げます。伊勢湾と能登半島、つまり他の地域と比較して広い目で見て、若狭の海辺に築かれし古墳にはどのような特徴があるのかという内容になります。特に伊勢と能登はとても変わった石室があった、それこそ九州や朝鮮半島から人がやってきて古墳を造ったのではないかという古墳もあり、また三河では三河湾三島にはまさに漁民の墓ではないかという古墳があり、それぞれの地域のなかなか面白い古墳が取り上げられますので、ご参加いただければと思います。今日は最後までご清聴いただき、ありがとうございました。これで閉会といたします。

フォーラムIV

若狭湾沿岸の海辺に築かれし古墳

美浜町歴史文化館 副館長（学芸員）

松葉竜司

今回のトークセッションに先立って、まずは若狭と丹後、つまり若狭湾沿岸の海辺に築かれし古墳について、前回のトークセッションをまとめる形で私から簡単にご報告させていただきます。よろしくお願ひします。

1. 前回のトークセッションの内容

今回は三河、志摩、能登の海辺に築かれし古墳について事例報告をいただき、伊勢湾沿岸地域と、若狭と同じ日本海沿岸の能登というそれぞれ特徴的な地域の海辺の古墳を比較して、どのようなことがわかるのかということで、今回のトークセッションを企画しました。

報告にあたって、今回、取り上げられる古墳は基本的に6～7世紀、古墳時代後・終末期の古墳が対象です。参考として古墳時代前・中期の古墳のお話もあるかもしれません。実際、古墳のあり方や出土遺物から海辺の地域にいる人達、例えば海部や海人集団と言われるような人達の存在をどのように考えるのかという各地域の事例をご報告いただきます。

前回の私の報告では若狭東部地域の海辺に築かれし古墳について、その特徴をお話しさせていただきました。若狭の場合、海浜部の土器製塩に関する集団と海辺に築かれし古墳の被葬者には密接な関係性があるのではないかという見通しのもと、若狭東部地域の古墳群では数基ほどで構成されるような小規模な群集墳が直接海を望み、山の尾根や谷筋に造られていることを確認しました。埋葬施設は横穴式石室ですが、若狭東端の敦賀半島周辺では7世紀に入ると石室に石棚という特異な施設を造りつけているという現象も確認できました。それらを踏まえて若狭西部や丹後との比較もできたのではないかと思います。

トークセッションでどのようなことが明らかとなったかと言えば、まず一つは古墳群の分布や規模がどうであるのか、例えば若狭西部の地域、現在のおおい町、高浜町にかけての地域の中でも佐分利川流域や大島半島のあたりでは古墳群の規模が大きく、古墳の基數が多い。逆に小浜市から若狭東部にかけては古墳群の規模が小さい。このことを踏まえた上で若狭と丹後の海辺に築かれし古墳の定義に関する問題として、若狭の海辺に築かれし古墳は造られた立地から見ても特に土器製塩との関係が強く、丹後の場合はそれだけではなく漁撈などを含めた生業集団との関係が強く、そのような集団の墳墓であると評価できるのではないかという議論となりました。

実際、古墳の石室の中や古墳群内に製塩土器を持ち込んでいる例もあり、これらは若狭における海辺に築かれし古墳の典型例です。同じように若狭の海浜部だけではなく、もう少し内陸に入ったところにも製塩土器を持ち込まれている大飯神社古墳群などもあり、広い意味で言えば古墳から海が見えるのであれば、それもまた海辺に築かれし古墳ということになるかとは思うのですが、実際、そのような古墳の被葬者層が海浜部の製塩集団をある程度掌握し、コントロールして、若狭の場合では集約的に塩を作らせるような人達、1ランク上位の集団になるかと思いますので、

少し分けて考えないといけないと考えられます。逆にもっとミクロな見方をすれば、すぐ前が海に面するようなところに造られた古墳が丹後半島の北端あたりの地域にあって、製塩や海産物加工、交易など海に関わるいろいろなことに関わっていた人達の古墳ではないかという指摘もありました。

2. 若狭と丹後の海辺に築かれし古墳

地理的な条件も含めて若狭と丹後は大変近しい関係があるということがわかりましたので、今回は逆に伊勢湾や能登といった地域とのさまざまな違いがあるのではないかと思います。

ただ、そうは言っても若狭と丹後の間にも違いがあることもわかりました。若狭では、最も古いもので5世紀中葉から、以後6世紀前半にかけて若狭のほぼ全城で北部九州系の横穴式石室が造られています。このような外來の文化、墓制を取り入れた地域であることがわかっていますが、丹後では東からこの若狭の北部九州系の横穴式石室を受け入れる一方で、逆に鳥取県、因幡から但馬を飛ばして、西の方から玄室の天井の真ん中が高くなる中高式天井をもつ横穴式石室を取り入れていることもわかり、西と東からの墓制の交差点となるようところが丹後であったということも理解できました。

これらを踏まえ、改めて「若狭の海辺に築かれし古墳」を定義すると、半島域や海浜部に造られた6世紀以後に海に面して、あるいは海に近いところに造られた古墳、そして製塩土器が古墳に持ち込まれるような事例も見られるということになろうかと思います。特に今回は生産、生業に関わる部分で直接、土器製塩に関係するような古墳を海辺に築かれし古墳として扱っていますが、それだけではなく海浜部の人達を掌握するような階層を被葬者とする古墳も、海辺に築かれし古墳には含まれると見えるかと思います。若狭では土器製塩、丹後では加えて漁撈、航海など海に関わる海辺の古墳が築かれていることが前回のトークセッションで改めて確認されました。

今回は、三河、志摩、そして能登の事例をご報告いただき、トークセッションしたいと思います。

三河の海辺に築かれし古墳

岡崎市教育委員会 社会教育課 主査 山口遙介

皆さん、こんにちは。愛知県岡崎市教育委員会の山口と申します。よろしくお願いします。私からは三河地域の海辺に築かれし古墳についてご報告させていただきたいと思います。

1. 三河の領域

現在の愛知県は、古代の律令制成立以後、尾張と三河の二つの国に分けられました。ちょうど尾張と三河の境には境川が流れ、国境の川になっています。愛知県中央部から東側にかけての3分の2ほどの範囲が三河の領域です。知多半島と渥美半島が突出していますが、知多半島は尾張に含まれ、渥美半島が三河の領域にあたります。

この三河は、さらに西三河と東三河とに分けられることがよくあります。現在の一級河川で、矢作川と豊川が山間部から流れてきて三河湾に注いでいます。この矢作川と豊川の流域に地域的、文化的なまとまりがあるので、矢作川流域を中心とする西三河、豊川流域を中心とする東三河と分けられています。この両河川の流域は肥沃な土地で、矢作川は岡崎平野、豊川は豊橋平野を流れています。両岸の河岸段丘は人が住むのに適した地形であり、集落遺跡が多く分布しています。

主だった古墳の分布においても、やはり矢作川流域と豊川流域の両岸の丘陵地に造られる古墳が多く認められます。そして、今日のテーマの海辺に築かれし古墳として三河湾には佐久島、日間賀島、篠島と、現在も人が住んでいる有人島があり、これを三河湾三島と呼ぶことが多いのですが、まさに全てが海に囲まれたこの三つの孤島にも古墳が築かれています。古代には三河湾三島から海産物が貢として中央に納められていたことが平城宮跡出土木簡からもしられています。なお、現在、佐久島は西尾市、日間賀島・篠島は南知多町に帰属しますが、古くは三河国幡豆郡に帰属していましたので、三河に含めて話を進めます。

三河湾は知多半島と渥美半島が両手を伸ばしたようにあって、湾の入り口が少し狭いので外海との海水の交換が小さく、そして矢作川や豊川などの河川から栄養を含んだ水が流れ込むということで魚介類が数多く生息しています。現

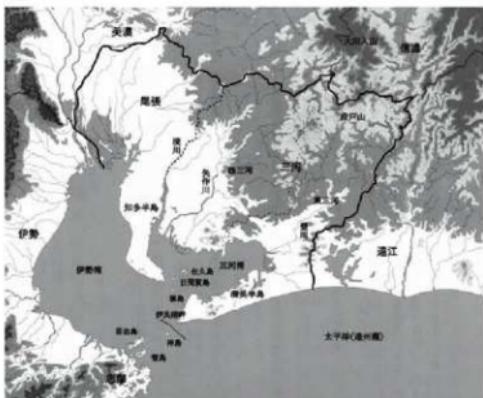


図1 三河の領域（西島 2008）

在もアサリやハマグリなどが有名です。

三河湾という知多半島と渥美半島に囲まれた湾から外に出れば太平洋の外海にいたるのかと言えばそうではなく、さらに伊勢湾があつて、そこから出ればようやく外海に出るということで二重の湾となっています。穏やかな海が三河湾で、伊勢湾を通じて三重県の方に、伊勢・志摩に通じるようなルートが古代から想定されています。例えば江戸時代にも東三河の人達がお伊勢参りに行くにあたっては陸路で歩いて行くと4日ぐらいかかるところを、三河湾と伊勢湾を抜けて行けばすぐに伊勢に行けるということで、半日や1日あれば行けてしまうということがありました。これは江戸時代の事例ですが、おそらく古墳時代でも変わらず、やはり海上交通が盛んで三河湾、伊勢湾を船が行き交っていたものと思います。

律令制が敷かれて三河と尾張の二国があったことはお話ししましたが、実は律令制成立以前、古墳時代もそうですが、尾張と三河の二つだけではなく、主に矢作川流域が三河国で、豊川流域の東三河は總国として別々の国として認識されていたようです。律令制以後は三河ですが、それより以前はやはり国としても違うほど東西三河は文化的にも違っていたのだと思います。

では渥美半島の先端部が總国であったのかと言えば、古代には志摩国、伊勢国的一部として認識されていたような時期もあったようで、渥美半島も一概には三河の枠で捉えられない特殊な地域であったように思います。

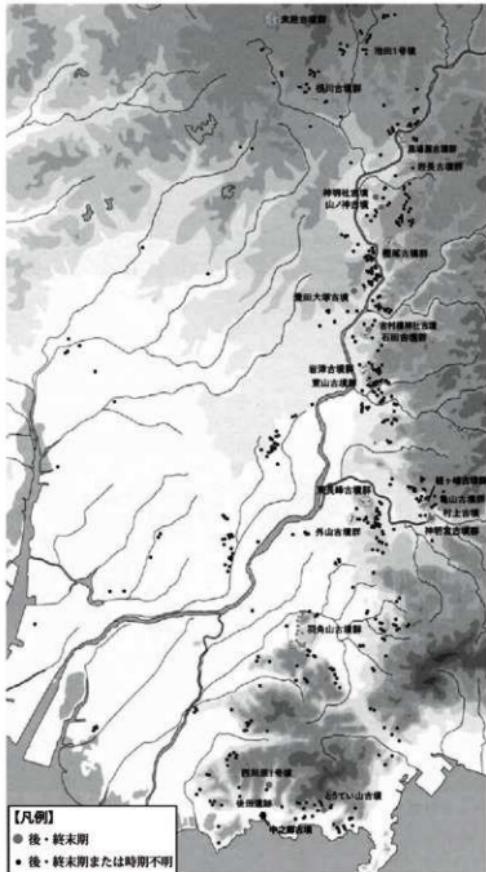


図2 西三河における後・終末期古墳の分布 (西島 2008)

2. 三河における横穴式石室の導入と展開

具体的に三河の古墳について見ていくたいと思います。海辺の古墳に触れていくたいところですが、対象となる沿岸部や半島、三河湾三島の古墳はなかなか発掘調査が進んでいない状況もあって断片的のことしかわからない古墳が多い状況です。また三河でも、矢作川と豊川の中流域が文化の中心地であり、沿岸部や島の古墳が三河地域を代表するものでもないので、まず内陸部の古墳について紹介してから海辺の古墳について触れていくたいと思います。

横穴式石室の展開を中心に、私がフィールドにしている西三河の事例を少しお話ししてから、東三河についても西三河との対比からお話ししたいと思います。

(1) 西三河における横穴式石室の導入と展開

西三河の地域には矢作川が流れ、岡崎市や豊田市のあたりを中流域と捉えると山間部を抜けてきた矢作川がちょうど岡崎市のあたりで平野が開けけてきます。そして矢作川沿いの左岸と右岸の両岸で多くの古墳が造られています。古墳だけでなく、集落も平野部に多く形成されています。矢作川氾濫原など沖積低地と呼ばれる比較的低い土地もありますが、やはりそのあたりには古墳は多くありません。矢作川下流部では合併して西尾市となりましたが、かつての幡豆町のあたりの沿岸部にも多くの古墳が築かれています。

西三河は東海地域で最も早い段階に横穴式石室が導入される地域で、全国的に見てもかなり早い段階と言えます。古墳時代中期後葉、5世紀後葉の時期に遡る横穴式石室があります。岡崎市の経ヶ峰1号墳と西尾市の中之郷古墳の石室が初現期にあたり、西三河で最初に造られた横穴式石室であろうと考えられています。若狭も同じですが、三河でもやはり北部九州系の石室、北部九州地域に祖形がある石室が西三河に導入されています。

経ヶ峰1号墳の石室はあまり残りが良くなく、天井石もないこともあって、発掘調査された時は竪穴式石室と認識されていました。入口がないので横穴式石室ではないと思われていたのが、後に、横穴式石室の入口にあたる部分の存在が指摘されて以降、北部九州系の竪穴系横口式石室であると考えられるようになりました。竪穴式石室に近いのですが、石室の一方の小口側を開口させて入口を造っています。これを横口と言って、横口部から1段下がって玄室に入るような構造になっています。このような竪穴系横口式石室は北部九州地域から導入されたのではないかと考えられています。

中之郷古墳は沿岸部の旧幡豆町に築かれた古墳です。経ヶ峰1号墳とほぼ同時期にあたります。石室の開口部は後世の積み直しなどもあってわかりにくいくらいですが、細かい石を多段積みして天井部に向けて持ち送りがあるなど、経ヶ峰1号墳とは違った系譜で北部九州から取り入れられた石室と言えます。

西三河という地域は早い段階、5世紀中後葉において経ヶ峰1号墳と中之郷古墳、2基の古墳で横穴式石室を採用するのですが、元のモデルとなる北部九州の石室がそ

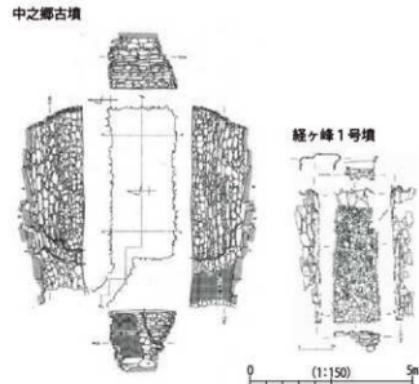


図3 経ヶ峰1号墳・中之郷古墳石室実測図
(岡崎市教育委員会 1981・三田 2019)

れぞれ違います。中之郷古墳の被葬者は沿岸部を掌握していた盟主として、経ヶ峰1号墳の被葬者は内陸部で自分が治めていた地域の首長として、独自に北部九州と関係をもって取り入れられた石室と見ることができます。

その後、経ヶ峰1号墳に見られるような堅穴系横口式石室は変容しながら三河で定着していきます。その一例として挙げると玄室に段を置いてすぐ入るような無袖式の石室が西三河では首長墳によく取り入れられています。無袖式石室は6世紀中葉ぐらいまでは首長墳の石室形態として採用されています。

もう一つ、西三河ではそれまでと系統が違う石室が造られます。6世紀中葉に玄室との境に立柱石といって縦長の石材を配置して、少しだけ玄室の内側に突出させて両袖のようにしているような石室で、疑似両袖式石室と呼ばれる石室が登場します。普通の両袖式の石室であれば袖部で狭まり、その幅で羨道部になるのですが、立柱石だけを内側に突出させることで仕切り、玄門の入口を造っていることになります。疑似両袖式は登場の段階から玄室が前室と後室に分かれる複室構造となるものもあります。

こうした疑似両袖式石室が6世紀中葉に出現し、6世紀後葉の最も完成された形は「三河型横穴式石室」と呼ばれ、矢作川流域で盛んに造られて他地域にも石室の形態が伝播していく元となるような石室を矢作川流域では生み出しています。この頃には地域の首長墳や群集墳の盟主墳な

神明宮1号墳

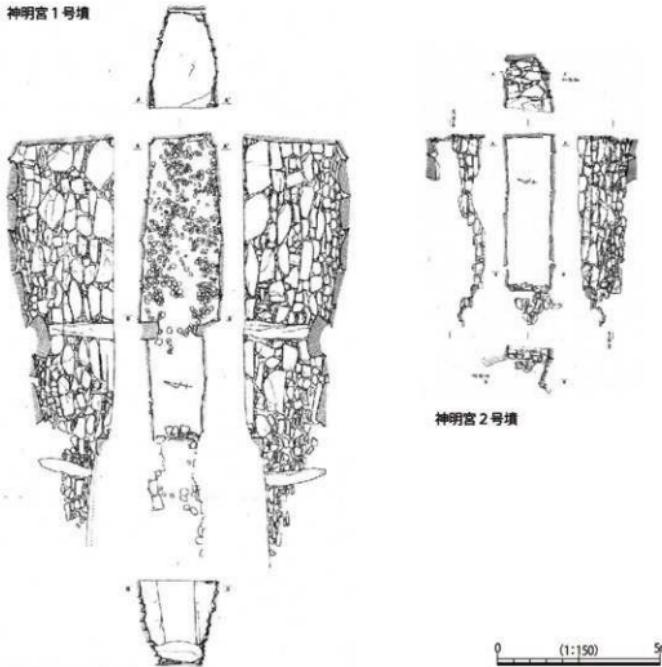


図4 神明宮1号墳・2号墳石室実測図（斎藤1989）

どに疑似両袖式の石室が普遍的に採用されるようになります。

横穴式石室の変遷図を見ると、堅穴系横口式石室が変容する中で無袖式石室が首長墳に取り入れられていくことがわかるかと思いますが、途中から擬似両袖式石室に取って変わられていくようになります。擬似両袖式石室は石室の石材だけでなく規模もかなり大きく、石室の大型化が図られます。無袖式石室はあまり大きくならずに7世紀に入ると徐々に造られなくなります。

三河地域では他地域に先駆けて横穴式石室を導入して、その後、在地で変容を遂げた無袖式石室が造られて6世紀後葉になると三河型横穴式石室を生み出し、それが他地域にまで伝播するような完成された横穴式石室を造り出していく。これが7世紀以降になると、古墳の石室規模も徐々に小さくなって終息に向かっていくような大きな流れがあるかと思います。

(2) 東三河における横穴式石室の導入と展開

次に東三河の石室について西三河と異なる点を中心につれてみたいと思います。

東三河、豊川流域では西三河よりも石室の導入が若干遅れ、6世紀前半に無袖式石室が採用されます。その後、6世紀中葉以降に西三河から三河型の横穴式石室が直接的、間接的に東三河の盟主墳で採用されます。ただ、東三河では西三河に見られない両袖式石室や積石塚の古墳が造られて、渡来系氏族の墓と指摘されるような墳丘・石室形態をもつ古墳もスポット的に認められていますので、西三河よりは複雑な石室のパターンがあるかと思います。7世紀以降、西三河では無袖式石室が造られなくなった段階でも東三河では依然として無袖式石室が造られ続け、長く無袖式石室が続く地域となっています。

この西三河と東三河の違いですが、西三河が横穴式石室をいち早く導入して在地で変容を遂げながら三河型横穴式石室を生み出して東三河に伝播していくといったように、一見、西三河が優勢に見られがちですが、横穴式石室以外の要素で見ると概に西三河が優勢とは言いづらい部分もあります。例えば前方後円墳、円墳といった墳丘の形態や墳丘の規模で見た場合、西三河では6世紀前葉には前方後円墳が造られなくなり、全て円墳に変わっていく。しかも、大きな三河型横穴式石室を内包する割には円墳の墳丘の規模が大きくて20mと、どちらかと言えば石室の大型化や定形化には熱心な反面、墳丘の形態や規模にはあまり拘っていないように見受けられます。

一方、東三河には6世紀後葉まで前方後円墳が造られ続けるという特徴があり、小地域ごとに前方後円墳を紐帶とした政治的な役割が認められるかと思います。副葬品を見ても西三河には装飾太刀が少ないのですが、東三河では金銅装、銀装、象嵌などで飾られた大刀や、金銅装馬具も多く認められる点で、副葬品の優劣でも東三河と西三河とで全く違う状況があります。

西三河では石室の規模、三河型横穴式石室の構築に階層差が現れているといえ、矢作川流域の中で共通した政治的、思想的な紐帶を背景に情報共有が図られているように感じます。逆に東三河では石室だけではなく墳丘形態や規模、副葬品などに重層的な階層差が現れていると思います。豊川流域内での小地域ごとに独立性が保持されて、石室形態が複雑化しているように思われます。

このような西と東の違いがどのような要因に起因するのか。やはり考えられるのは中央政権との関係性の違いがこのような状況を作り出していると思います。特に金銅装の遺物は地方の有力者に対して畿内政権から下賜されたような支配権の象徴としての側面もありますので、東三河には金銅装遺物が複数の時期に渡って入ってきているのではないかと思います。

3. 三河の海辺に築かれし古墳

海辺に築かれた古墳を見ていきたいと思います。三河地域で海辺と言えば、地勢的には三河湾沿岸部と渥美半島、そして三河湾三島が海辺にあたり、海辺に造られた古墳の対象としてよいと思います。

(1) 三河湾沿岸部の海辺に築かれし古墳

三河湾沿岸部の旧幡豆町はかなり平野が狭く、現在もそうですが谷ごとに集落があって、お祭りや神社が集落ごとに分布する地域です。地形的には北に山があり、小さな舌状の尾根が三河湾に向けて延びていますが、この尾根上に古墳がいくつか築かれています。最初に横穴式石室が導入された中之郷古墳の立地は、まさに海と目と鼻の先というようなところです。とうてい山古墳、下山古墳、西川原古墳などはこのような立地で、基本的には海を望む平野、海を望むような少し小高いところに古墳が築かれるという特徴があります。10基を超えるような大きな群集墳は少なく、10基未満の群集形態が多いと思います。

この幡豆地域の沿岸部に横穴式石室墳が築かれる背景として、古墳時代中期前葉に築かれた正法寺古墳の立地は示唆に富みます。海を臨む丘陵の先端に築かれたもので、三段築成の前方後円墳は全長94mを測る、西三河の同時期の古墳としては最大規模の前方後円墳で、古墳時代中期になり沿岸部地域一帯を広く掌握していた人物の古墳であろうと考えられています。古墳時代中期には沿岸部、この三河湾の海上交通を抑えることが重要であったと思いますが、これを機に海上交通に関わる沿岸部の中之郷古墳やこの幡豆地域の後期古墳が築かれていくのではないかと思います。

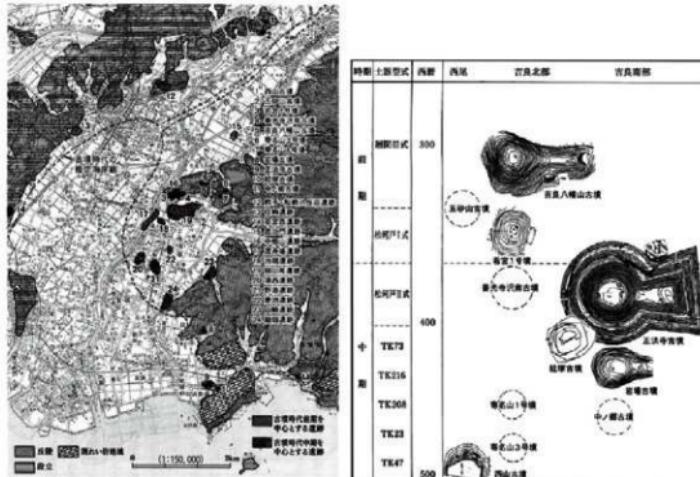


図5 矢作川河口地域の古墳と集落遺跡の分布と古墳編年表（三田 2008）

ただ、この沿岸部地域で発掘調査されている例があまり多くありません。調査された例として6世紀中葉から後葉にかけて造られたとうてい山古墳は、石室袖部に立柱石があつて擬似両袖式石室の範疇かと思いますが、玄室に入る羨道はスロープ状に下っていくような床面で、これは玄室に入る際に1段下がるというような竪穴系横口式石室の概念、思想が前部のスロープ状施設につながっています。この二つの要素が、このとうてい山古墳に見られると思います。

とうてい山古墳の玄室の中に組み合わせ式の箱式石棺が内包され、

1枚ずつ板材を立て箱状にして石棺としているのですが、石棺の石材は佐久島から産出される佐久石を使っています。佐久島でしか採れない石で、確実に佐久島から海を渡ってこの沿岸部に運んできたと考えてよいもので、三河湾三島と何らかのつながりがあると思っています。三河湾三島にも同じようにこの箱式石棺が石室に収められていますので、両者の関係は深いかと思います。

ただ、この箱式石棺は沿岸部ではとうてい山古墳の他に西川原1号墳や下山古墳などの石棺もきちんと調整をして組み合わせていますが、佐久島の古墳の石棺はあまり加工されていないので、加工の具合で言えば島より沿岸部の箱式石棺の方が丁寧な造りであることを観察すると、石棺の加工をする工人は沿岸部の方で掌握していたのではないかという見解もあります。

西川原1号墳は7世紀末頃の古墳で、出土品として帶金具、ベルトのバックルの部分とベルトのお尻の部分の金具や、畿内系の暗文が施された土師器も出土しています。帶金具は役人の身分にあたる人が身に着ける装飾品で、畿内系暗文土器の存在も古墳が造られた7世紀末という年代からして中央集権的な官僚制の中に組み込まれた一地方の行政的な被葬者像が考えられると思っています。古代の幡豆郡衙の所在とも絡んで興味深い古墳と思っています。

次に旧幡豆町の東隣りの沿岸部の地域、蒲郡市あたりです。蒲郡は東三河の領域に入っていますが、この沿岸部にもやはり古墳があります。ただ、あまり発掘調査事例がないこともあります。様相がよくわからないのですが、さほど大きくありませんが5世紀代の前方後円墳が海辺に1基あって、6世紀代に入って横穴式石室を導入するような地域です。ただ、副葬品を見ると銀象嵌の大刀など立派なものが出土していますので、やはり東三河の領域と考えてよさそうです。



図6 とうつい山古墳・西川原1号墳石室実測図
(三田 2019・愛知県埋蔵文化財センター2002)



写真1 とうつい山古墳と三河湾を望む（山口撮影）

(2) 三河湾三島の海辺に築かれし古墳

三河湾三島の佐久島、日間賀島、篠島について少しご紹介しておきたいと思います。篠島の古墳は数基ほどであったかと思いますので状況がよくわからないのですが、佐久島と日間賀島を見ると横穴式石室が造られ始めるのは6世紀前半の段階です。西三河の矢作川流域で石室が採用されて地域的な変容を遂げて一段階経たタイミングで、三河湾三島の古墳にも無袖式石室が導入されている状況です。

石室の変遷は西三河と同様で、まず無袖式の横穴式石室が導入されて、それ以降は擬似両袖式の横穴式石室に変わっていきます。大きくは西三河の変遷の範疇でよいと思っています。例えば佐久島の古墳では6世紀前半に無袖式石室が入って以降、擬似両袖式の石室が主体的に造られます。このように西三河的な様相が強い佐久島ですが、日間賀島では少し違う部分もあって、例えば石室側壁の基底部に少し大きめの板材を横方向に据えてから上部に細かい石を積み上げていくような石室があります。北地4号墳はおじょか古墳との関係から志摩との関連もあるのではないかと指摘されています。伊勢からの影響としては、三重県鈴鹿市にある岸岡山窯跡群で焼かれた脚付短頸壺という須恵器が三河湾三島の古墳の副葬品として入っているような状況もあります。さらに西三河との関係では捉えられないような、入口から奥壁に向かって幅がぐっと狭まっていく石室形態も日間賀島では見られるので、西三河と微妙に異なるような様相もあります。



図7 濑美半島・三河湾島嶼部における古墳の分布（西島2008）

日間賀島では比較的、古墳出土資料が知られています。やはり特筆されるのは鉄製の釣り針で、これは民俗資料としては鮫を捕獲するための釣り針と言われています。達磨形の石製の鍤具など漁撈具が出土しています。実際、古代の平城宮跡から出土する荷札木簡からは三河湾から鮫や鰐、黒鯛、鱈といった海産物が納められていましたが、そのような海産物を納める際に必要となる漁撈具が古墳に副葬されている例として、まさに海の古墳ではないかと思います。

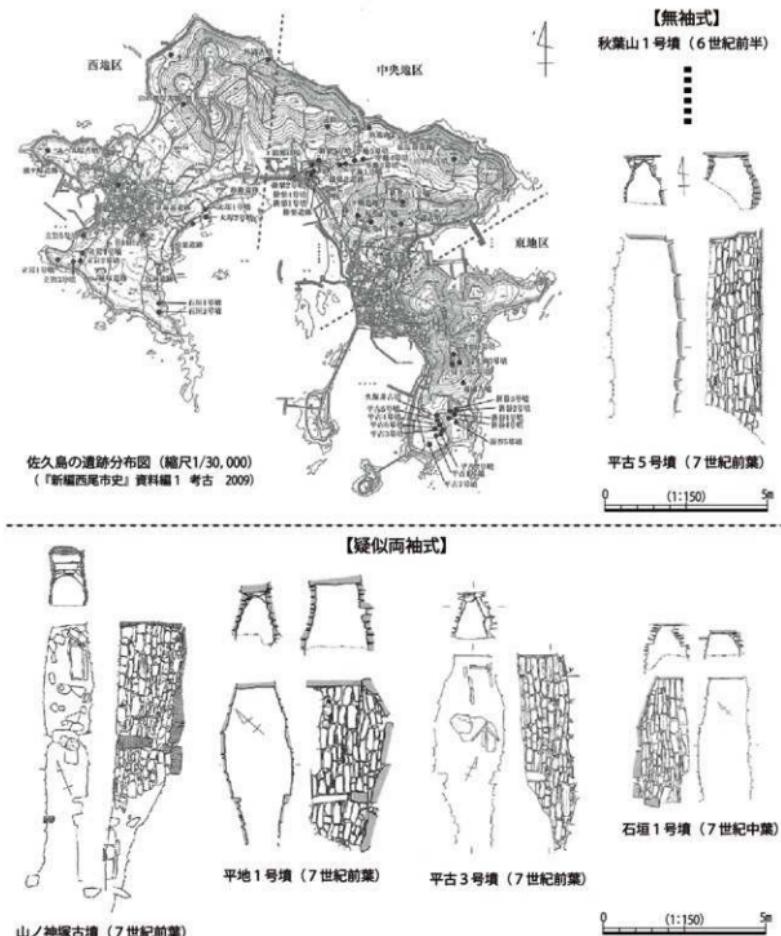
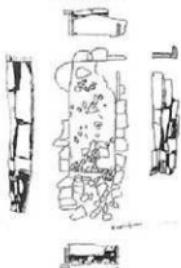


図8 佐久島の遺跡分布図・佐久島の横穴式石室実測図（愛知県2005・西尾市2019）

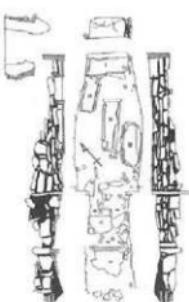
日間賀島の横穴式石室

【無袖式】



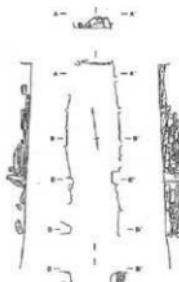
北地4号墳（6世紀後葉）

【両袖式】



北地6号墳（6世紀末～）

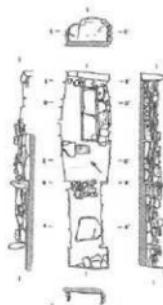
【疑似両袖式】



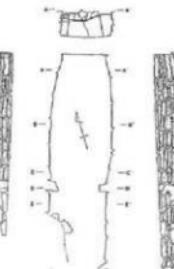
北地11号墳（7世紀前葉～）



北地5号墳（6世紀後葉～末）

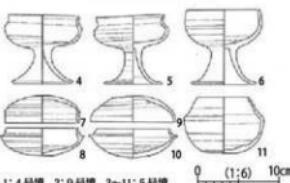
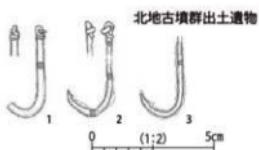


北地8号墳（6世紀末～）



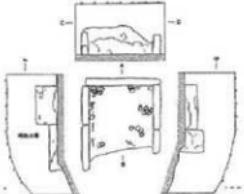
北地14号墳（7世紀前葉～）

0 (1:150) 5m



1:4号墳、2:9号墳、3~11:5号墳

【両袖式？・疑似両袖式？】



上海2号墳（6世紀前葉）

0 (1:150) 5m

篠島の横穴式石室

妙見齋古墳（6世紀後葉）

鰐浜古墳（7世紀前葉）

堂山古墳
(7世紀前葉～中葉)

図9 日間賀島・篠島の横穴式石室実測図 (南知多町教育委員会 1979・南知多町 1997・愛知県 2005)

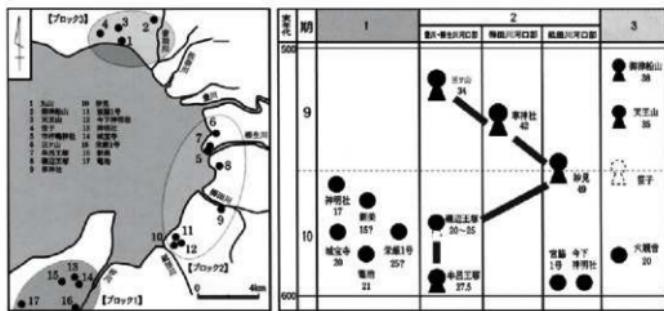


図 10 古墳時代における渥美半島沿岸部の首長墳・有力古墳の変遷（西島 2008）

（3）渥美半島の海辺に築かれた古墳

渥美半島は東三河には含まれるのですが、一時期は伊勢国、志摩国の一帯でした。海岸部というより海岸から少し入った丘陵上、海岸沿岸部を見下ろすような場所に古墳が立地しています。渥美半島の基部にあたるところにも古墳がいくつか造られていますが、三ツ山古墳、磯部王塚古墳、牟呂王塚古墳など6世紀代の前方後円墳がいくつか造られています。渥美半島基部の三ツ山古墳に始まる首長系列が渥美半島一帯の主導権を握っていたのではないかと考えられています。

三ツ山古墳と磯部王塚古墳の主体部から見ると、広く三河の石室の変遷と同じ状況があるので、渥美半島の基部から少し南に行ったところに、神明社古墳、新美古墳、城宝寺古墳、籠池古墳という四つの古墳があって、今までの三河の範疇では捉えられないような両袖式の石室や片袖式の石室が交互に造られるような特徴的な古墳です。このような渥美半島の四つの古墳は西三河や東三河ではなく、もっと広い伊勢、志摩などの地域との交流の中で石室が造られている可能性も高いと考えられます。

最後に、三河湾三島の佐久島と日間賀島があり、対岸にあたる旧幡豆郡のとうてい山古墳や下山古墳では佐久石を使った箱式石棺を共有している。小さく見れば一つの共有するような地域があるかと思います。佐久石ではありませんが、渥美半島の古墳でも組合式の箱式石棺を玄室にもつ古墳もあって、佐久石かどうかは別としても箱式石棺をもつという意味では渥美半島とも何らかの関係があると考えることもできるかと思います。

以上、三河の横穴式石室の変遷を中心に、沿岸部、三河湾三島、渥美半島の海の古墳について見てきました。渥美半島が少し変わっていることを指摘して、簡単ですが終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

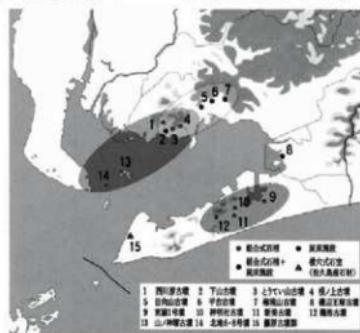


図 11 組合式石棺・屍床施設の分布（西島 2008）

フォーラムVI

志摩の海辺に築かれし古墳

志摩市教育委員会 生涯学習スポーツ課 主査 三好元樹

志摩市教育委員会の三好と申します。どうぞよろしくお願ひします。自分が発掘調査した事例なども含め、志摩の古墳についてお話しさせていただきたいと思います。

1. 志摩の領域と地域性

まず志摩の領域と地域性について、志摩はどんなところなのかということをお話しさせていただきます。志摩はリアス海岸でしられています。海が入り組んで急に台地が立ち上がっている地形になるのですが、それがまさに志摩のあり方を示していると思っています。

志摩は若狭と同じく古代には御食国と呼ばれた、朝廷に海産物などを納めた国です。若狭の場合、陸路で直線的に南下して琵琶湖を通って大和に入りますが、志摩は周りを高い山に囲まれているため、陸路で大和まで行くとなるとまず北上して伊賀に入り、そこから大和盆地に入していくようなルートをとらないといけない。直線距離では近いですが、実は陸路で行くにはけっこうな距離がある場所です。

周囲は、まず伊賀盆地のところに伊賀国があり、伊勢湾に沿って広がっている伊勢平野のところに伊勢国があります。伊勢平野の南側のほとんど平地がないところがおおむね志摩国の範囲で

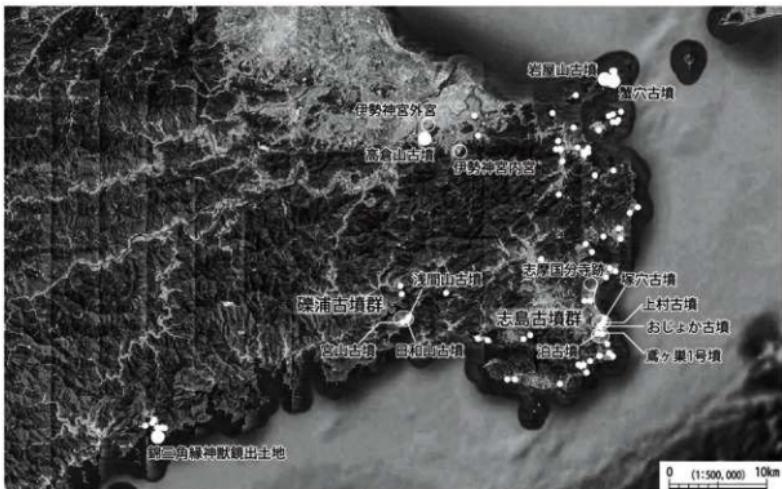


図1 志摩における古墳分布図（ベース図にGoogle earth写真を使用）

す。今日、松葉さんに車でご案内いただいたのですが、若狭の場合はけっこう奥に入っても海まで見通せるような、田畠の耕作地が広がっていて、地図で見てもかなりの水田がある広い土地がありますが、志摩では海岸から奥に1kmの平野があるようなところはほとんどありません。1km四方もないような平地しかないということになりますので、ほとんど水田耕作ができないような地域です。

ちなみに伊勢神宮は皆さんご存知かと思いますが、伊勢神宮の場所は志摩の北側、伊勢平野の南端にあたります。伊勢神宮には内宮と外宮があり、外宮は高倉山の麓にあるのですが、これはまた後で話題として出てきます。

古墳の立地で注目したいのが、和歌山県の南端にある古墳と三重県の南端にある古墳の間には古墳分布の空白地帯があって、古墳がない地域が三重県の南方から和歌山県にかけて広がっています。おそらくこのあたりが紀伊国と志摩国の境になると思うのですが、先ほど山口さんが渥美半島は志摩国とよく似ている、あいまいな部分があるといったお話をされていたように、同じく紀伊国と志摩国の境界もよくわかっていないところがあります。古墳時代にはおそらく実際に地図や図面で領域の把握はされていなかったと思われますが、それはおそらく古代にも続き、だいたいで志摩国、紀伊国と言っていたと思われます。

ちなみに古代には志摩国府と志摩国分寺ができるのですが、志摩半島が海に向かって突き出た先端部分に志摩国分寺は位置しています。

2. 志摩の古墳

それでは志摩の古墳について、主なものをお話しさせていただきます。

志摩の古墳の分布は、ほとんどが志摩半島でも東側に突き出た志摩半島の先端部に集中しています。そして大多数の古墳が海辺に立地しています。内陸にあるような古墳も少しあるのですが、ほとんどは内湾や太平洋などの海が見えるような場所です。

(1) 錦湾周辺

まず錦湾周辺では全く古墳の調査がされていません。ただ、志摩国では唯一となる出土地不明の三角縁神獣鏡があります。4世紀の古墳の存在を予想させますが、これが古墳から見つかったという記録があるわけではないので、祭祀に使われたのではないかとも言われてもいます。

(2) おじょか古墳

続いて志島と畔名の古墳群についてです。この古墳群では志摩で最も大規模に古墳が造られており、5世紀から7世紀まで、途切れることがないとは断言できませんが、継続して営まれている古墳群です。おじょか古墳から泊古墳までの距離が1kmほどあり、浜を挟んで古墳があるので、おじょか古墳の方が古く、そのあと泊古墳、鳶ヶ巣1号墳と造られ、その次に上村古墳、塚穴古墳というように古墳が造られています。

まず、おじょか古墳は5世紀後葉の築造で、先ほど三河の事例であった中之郷古墳と同じような時期、本州でもかなり古い時期の横穴式石室をもつ古墳としてされています。1967年に三重大学によって発掘調査が行われ、2010年代には出土遺物の保存処理が行われて報告書が刊行されています。

九州系の横穴式石室で、閉塞石に板石を使います。石室内部には石障と呼ばれる板石を置き、腰石として石室の壁面の下の部分に大きめの石を置きます。石室の平面図を見ると、羽子板形に

奥が広がる玄室と外に向かってハの字に広がる前庭部をもち、全て九州的な様相と言えます。九州の様相が強い、九州の石室をそのままもってきたような石室と評価されています。

出土したものの中に埴製枕があります。これは類例が少なく、他に4例しか確認されていませんが、その中でもおじょか古墳のものは装飾性が強く、突帯が付く埴輪的な作り方がされています。方格T字鏡といった九州に偏って分布する鏡や、腰飾りや刀剣の装具などと考えられる銅製の飾金具も出土しています。玉が1380点と三重県では2番目に多く出土し、黄緑色や黄色など5

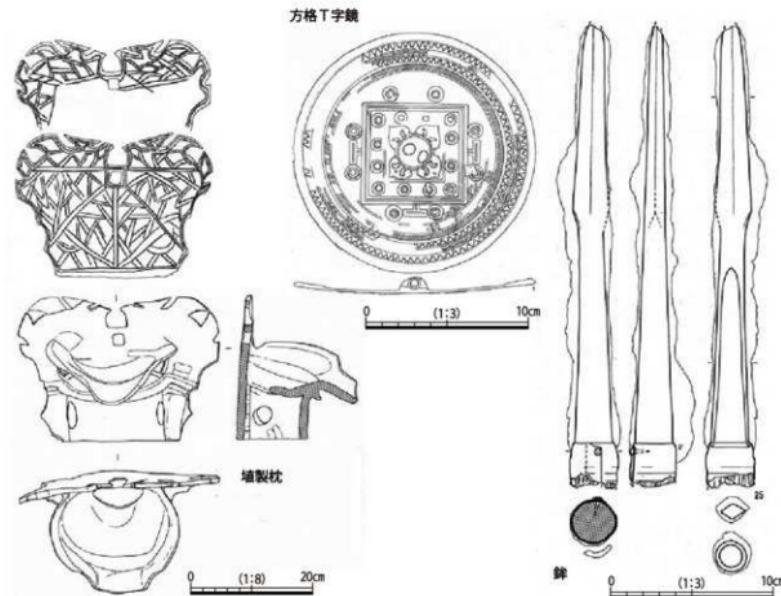
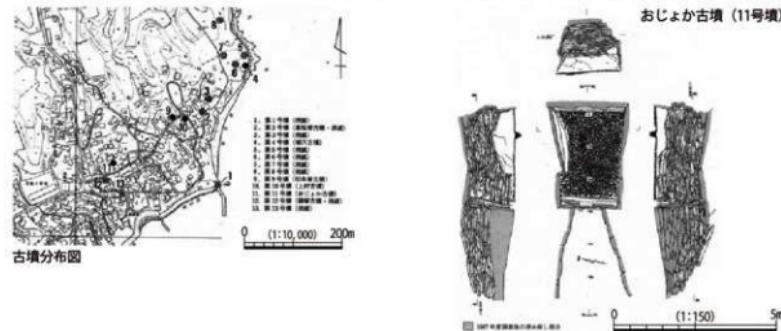


図2 志島古墳群古墳分布図・おじょか古墳(11号墳)石室実測図・おじょか古墳(11号墳)出土物実測図
(米田他 1992・志摩市教育委員会 2016)



写真1 おじよか古墳石室（志摩市教育委員会所蔵）



写真2 おじよか古墳出土鉢X線写真（志摩市教育委員会所蔵）

世紀後葉にしてはカラフルなガラス玉を含んでいる特徴があります。刀・剣なども出土しています。鉢は錫の装飾がついた珍しいもので、基部に錫の板を巻き付けています。X線で見ると、暗いところが錫の板で、鉄の紙で留めています。錫の装飾がついた鉢は、日本では熊本県のマロ塚古墳でしかまだ見つかっていませんが、形が似たものは朝鮮半島に銀装の鉢があって、その影響があるかと考えられる遺物です。鎌や短甲、大型の斧なども出土しています。

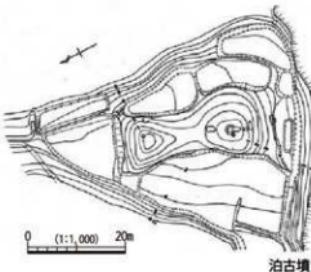
（3）泊古墳・鳴ヶ巣1号墳

おじよか古墳の次の世代の古墳となる泊古墳は6世紀前半の築造と言われています。発見が早く、1911年に開墾により発見されて遺物が出土しています。墳丘の平面図を見ると前方後円墳で、明治時代の記録しかないので何とも言えないところもありますが、石室は入口に段差をもつ竪穴系横口式石室と想定されています。古墳からは名古屋市の志段味大塚古墳と同一文様をもつ鏡や、馬具の杏葉などが出土しています。

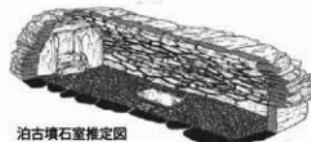
鳴ヶ巣1号墳は全く発掘調査がされていません。測量図がありますが、泊古墳の次の段階の前方後円墳が継続して造られたと考えられます。

（4）上村古墳

上村古墳は6世紀後葉の古墳と考えられています。1916年の大雨で墳丘と石室が半壊した際に遺物が取り出されています。現在も石室が半壊した状態で、石室の奥壁と側壁、玄門の立柱石が部分的に残されていますが、石室の中には組合式の石棺があります。



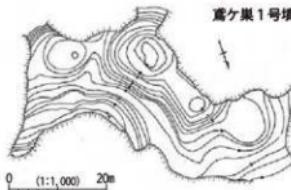
泊古墳



泊古墳石室推定図



銀装構円形容杏葉



鳴ヶ巣1号墳

図3 泊古墳・鳴ヶ巣1号墳墳丘測量図
泊古墳石室推定図・泊古墳出土遺物実測図
(三重県教育委員会 1969・山本 2002・宮原 2016)

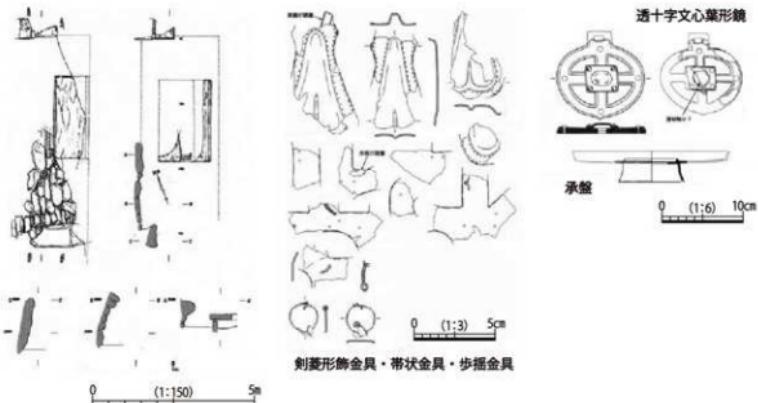


図4 上村古墳石室実測図・出土遺物実測図（米田他 1992・宮原 2016）

実は大型の組合式石棺は志摩や伊勢ではこれ以外に見つかっていません。察しのよい方は先ほどの三河のご報告でおわかりかと思いますが、とうてい山古墳に大型の石棺がありますので、三河との関わりを感じさせる古墳です。

出土した遺物の中には冠の可能性がある歩搖がついた金銅製品があります。馬具が一式と、銅鏡を載せるための台で、口の部分が左右に広がった承盤が出土しています。鈴や金糸なども出土しています。

(5) 塚穴古墳

塚穴古墳は7世紀前半の古墳で、2012～2014年度に私が担当して発掘調査をし、現在は出土遺物の保存処理を行っています。古墳の横に海が迫っており、すぐ近くは高さ12mほどの崖となっています。草刈りするときも注意が必要な古墳です。

石室の入口の裏側の箇所と直交する箇所で墳丘の断ち割り調査を行いました。石室の裏側は黒い土や黄色い土を用いて墳丘を造っています。墳丘の土を取ってしまうと外から石室の中が見えました。石の控え積みがほとんどされていないので、土で



写真3 塚穴古墳墳丘断割1
(志摩市教育委員会所蔵)



写真4 塚穴古墳墳丘断割2
(志摩市教育委員会所蔵)

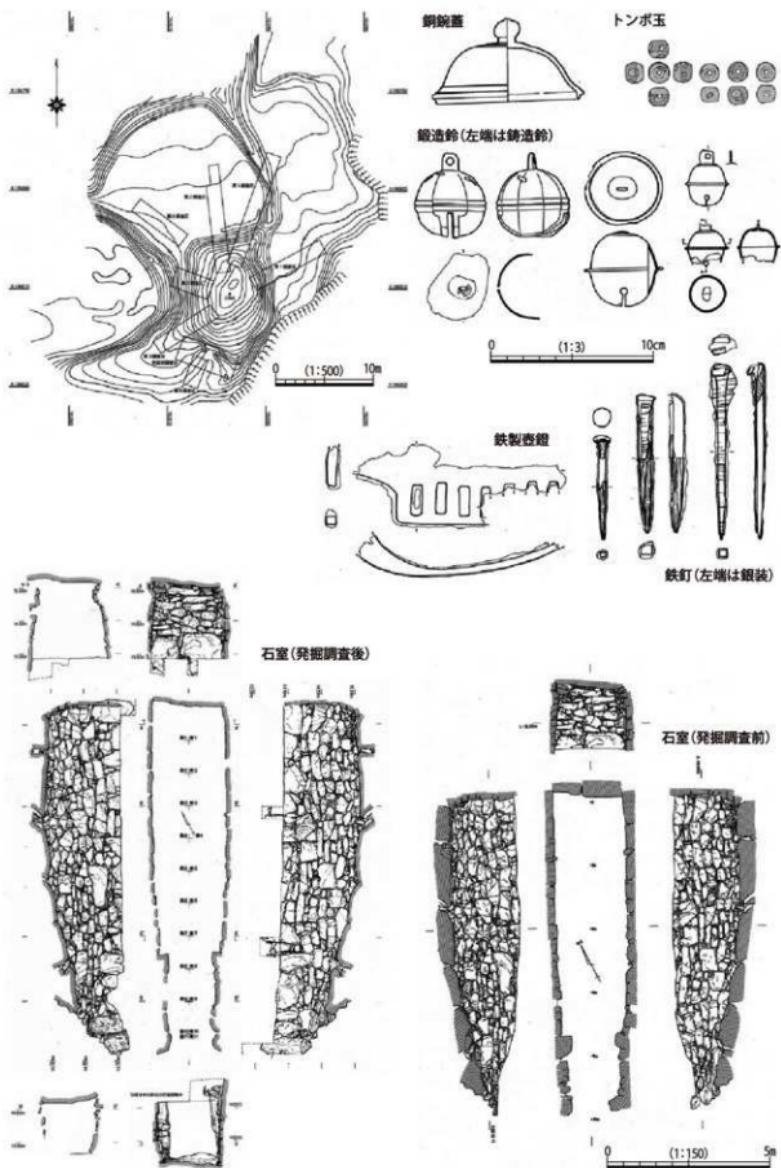


図5 塚穴古墳埴丘測量図・石室実測図・出土遺物実測図（志摩市教育委員会 2018）

埋めながらでしか絶対に組めないような石室の積み方をしています。墓壙を結構深く掘って石室を造っています。元々の表土の地面から天井石の高さくらいまで墓壙を深く掘って石室を組んでいることがわかりました。側面から断ち割ったところ、黒い土が下にあって、黄色い土が上に行くほど多くなっていくということで、まず周りにある表土を盛って、その下にある黄色い土を上に盛ったような墳丘の造り方をしています。



写真5 墳穴古墳石室（志摩市教育委員会所蔵）

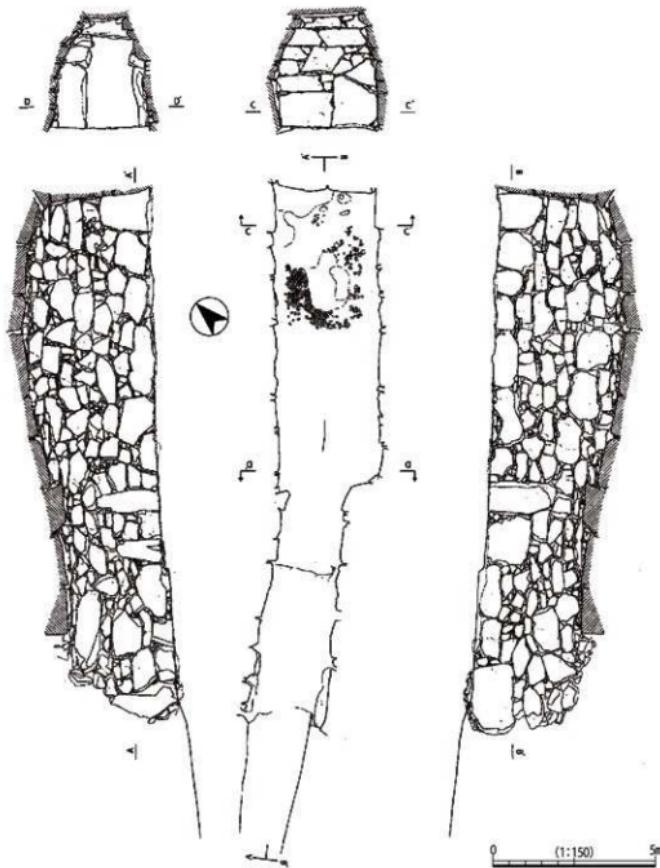


図6 高倉山古墳石室実測図（和田 2011）

横穴式石室は床面に礫をもち、長さ 7.7m と玄室は長く、羨道部は短いです。普通の石室は玄室より羨道部の天井が低く、その間に前壁という段差があつたり、一段下げる樋石と呼ばれるものがあるのですが、羨道部から玄室の奥壁まで段差をもたず、なだらかに天井が降りていく形が特徴です。

玄門の左袖は、下段部ではちゃんと袖となっているのですが、上段にいくほど袖の部分が解消されてなくなり、玄室と羨道部との境界がないような形をしています。閉塞石で閉塞をしています。

銅鏡や金銅装の鈴、金銅製品などの銅製品が出土しています。普通の玉だけでなく、トンボ玉というガラスを組み合わせた玉も 6 点ほど出土しています。釘が出土したので、木棺を使っていましたことがわかりました。釘の頭のところに銀の板を被せているような珍しい釘もあります。鉄製の壺型の鐘は関東を中心に分布しているもので、塚穴古墳が最西端の出土例になるかと思います。須恵器と土師器も出土しています。

志摩地域で最大の石室で、志摩の最有力者の墓と評価していますが、この古墳の石室を考えるにあたり欠かせない古墳が伊勢にあります。最初にご紹介した伊勢神宮の外宮の裏山に立地する 6 世紀後葉の高倉山古墳です。長い玄室に短い羨道部がつくという特徴をもつ巨大な横穴式石室をもつ古墳です。天井が真ん中で膨らんで入口に向かい下りていくような弧状となり、玄室と羨道部との間は天井の石を 1 段下げて造っています。この天井の形は先ほど三河型の横穴式石室とご報告されたものとよく似ており、三河の影響を受けつつ造られたものと評価されています。このような石室を高倉山型石室と呼んでいるのですが、この高倉山古墳を始めとして志摩や伊勢の各地域に見られるようになり、影響を受けた石室をもつ古墳の一つとして塚穴古墳が位置づけられるのではないかと思います。

(6) 磯浦古墳群(浅間山古墳・日和山古墳・宮山古墳)

磯浦古墳群のうち、浅間山古墳は墳丘の測量しかされていませんが、5 世紀の前方後円墳の可能性がある古墳です。ただ、崩れた墳形しかわからないので、判断が難しいです。

日和山古墳の横穴式石室は、左袖の部分が上段にいくと解消気味になる傾向があります。少しだけ前壁をもっており、天井はフラットです。時期がはつきりとわからないのですが、6 世紀後半頃と考えよいかと思っています。

6 世紀後葉の宮山古墳は 1984 年に発掘調査がされています。今は埋め戻されて現地に行っても何も見ることができません。双龍環頭大刀の柄頭や銅鏡、志摩では唯一となる海の生業に関わる道具である鉄製の釣針などが出土しています。

(7) 岩屋山古墳・蟹穴古墳・下之郷古墳群

答志島についてもご紹介したいと思います。答志島は、志摩と渥美半島との間にある島ですが、いくつかの古墳が造られています。

岩屋山古墳では墳丘に石が多用されていますが、これを渡来系の様相と言つてよいか決めがたい状態です。というのも古墳が岩山の頂上のあたりにあり、その岩山自体を削つて古墳を造っているので、最小限の労力で古墳を造るとなると、どうしてもかなり石が混じっている状態の墳丘とならざるを得ないので、そのような可能性も考慮しなくてはいけない古墳です。石室は玄門の袖と前壁がしっかりとしています。発掘調査が全くされておらず、遺物も見つかっていないので決

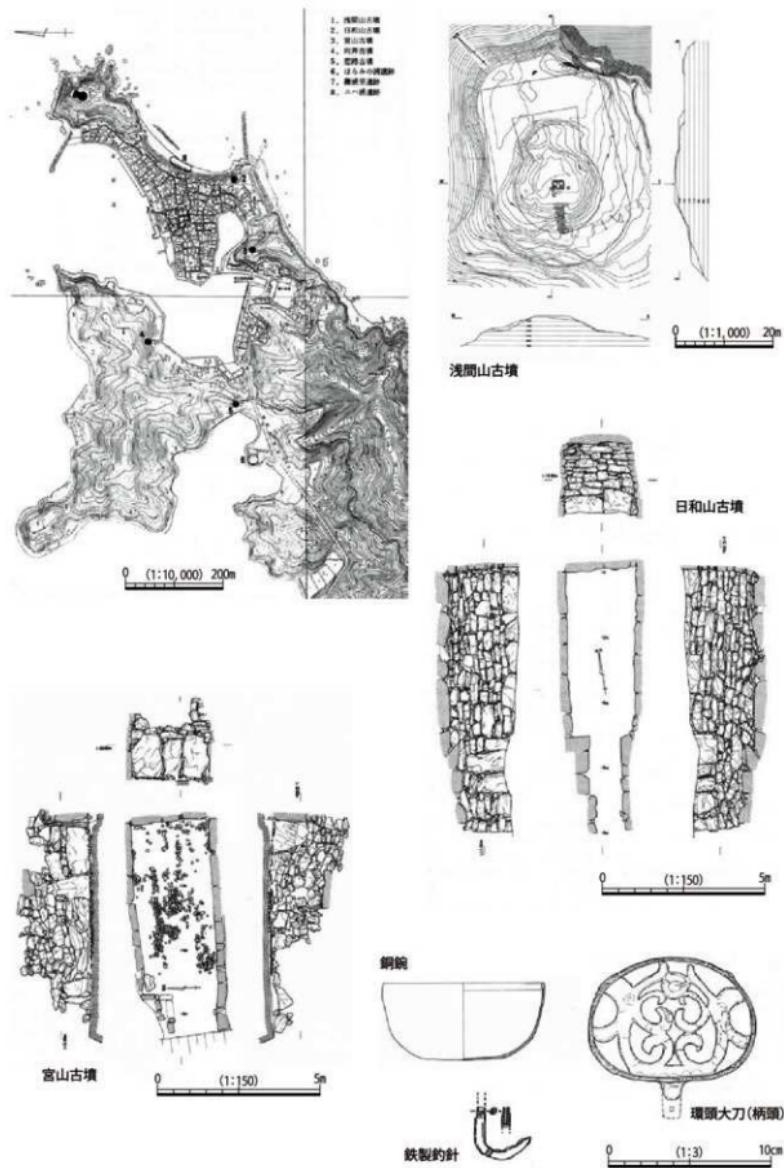
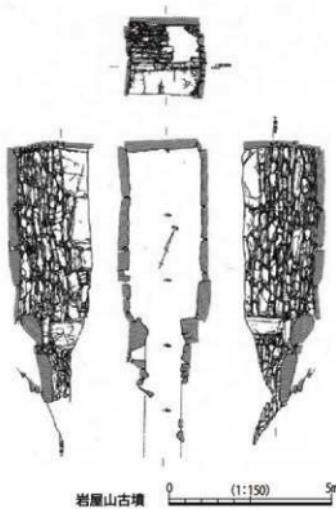
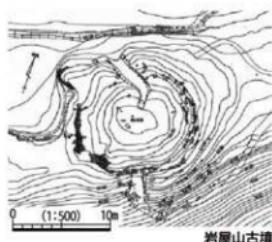
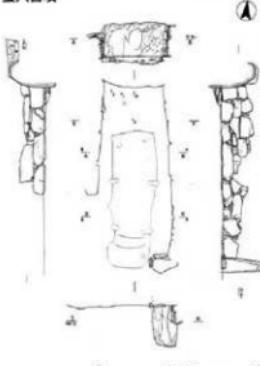


図7 碧浦古墳群古墳分布図・浅間山古墳墳丘測量図・日和山古墳石室実測図・宮山古墳石室実測図
・出土遺物実測図（米田他 1992）



蟹穴古墳



須恵器（東京国立博物館所蔵）

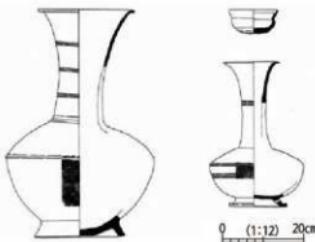


図8 岩屋山古墳周辺古墳分布図・岩屋山古墳墳丘測量図・岩屋山古墳石室実測図・蟹穴古墳石室実測図
・出土遺物実測図（米田他 1992・三重県生活部文化課県誌編さん室 1999）

めににくいのですが、袖の部分がしっかりとしている特徴から6世紀中頃の築造と考えてよいかと思います。

最後の段階の古墳として蟹穴古墳が答志島に造られます。1921年に発見され、東京国立博物館に須恵器が所蔵されています。1998年に発掘調査が行われました。石室の入口に立柱石を立てた無袖式の石室で、平面図を見ると側壁が緩やかに張り出す、緩やかな胴張りをもつ石室と評価されます。胴張りの石室は三河地域によく見られるので、三河からの影響を受けた古墳と評価してよいと思われます。

ここまで玄室の規模が5mを超えるような大型の横穴式石室をもつ古墳をご紹介したのですが、小規模な古墳についてもご紹介したいと思います。

下之郷古墳群の6号墳は、発掘調査がされたのですが、石室の奥壁しか残っておらず、あまりよくわかっていないのですが、石室が小規模であることは間違いない古墳です。須恵器、土師器の他に武器、刀子などの工具、そして少量の装身具が出土しています。おそらく志摩の小規模な古墳は、このようなセットを副葬品にもっているものが多いのではないかと考えています。

3. 志摩の古墳時代集落

集落についても簡単に見ておきたいと思います。

志摩では、若狭にあるような製塩の痕跡が全く認められません。知多式製塩土器がごく少量出土してはいるのですが、製塩をしていたとは到底思えません。知多式の製塩土器は志摩の地域で作っていたのではなく、知多から搬入されたのではないかと評価されています。

漁撈具は志摩でよく出土します。さほど発掘調査されていないので、遺跡数自体は少ないのでですが、三重県内でも特に志摩に集中しているという評価がされています。

白浜遺跡ではヤスや鉛、骨製の鏃などもあります。アワビオコシや彌も出土していますが、弥生時代のものも含まれています。発掘調査では砂浜で出土するので層位で区別できません。砂浜に遺跡が立地して、海がすぐ傍にあり、縦穴住居があり、骨角製品を使って生業として漁撈などをを行っていたという集落です。

4. 古墳時代の志摩の性格

最後に古墳時代の志摩の性格について、自分の考えるところをまとめておきたいと思います。

集落でみられる生業は主に漁撈です。水田を造ることができる面積が乏しいので、おそらくほとんど農耕をしていません。そして製塩もしていないと思います。

各時期の最大の横穴式石室をもつ古墳は志島周辺に多いのですが、先ほど見てきたように疠浦や答志島にそれに匹敵する大きさの古墳があることから、志摩を一元的に統治するような人達がいたという評価はできないかと思います。

これは平凡な古墳でもそうですが、基本的な副葬品として刀、鏃であることが多いのですが武器を含んでいます。工具はほとんどが刀子で、あと少量の装身具をもつという構成が一般的な葬制で、大規模な古墳になると馬具や金銅製品を含む銅製品が加わるというような副葬品の方が多いです。

あとは討論で議論を深めたいと思います。発表を終わりにします。ありがとうございました。

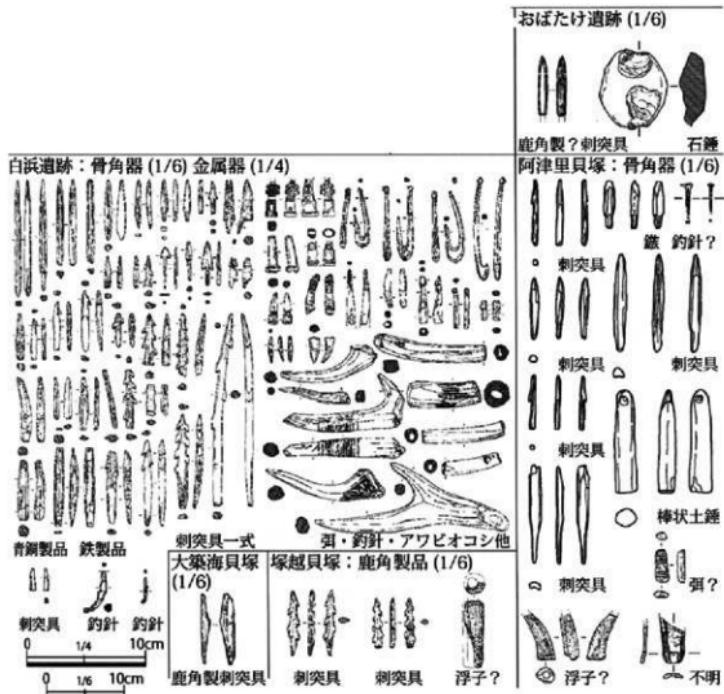


図9 三重県における集落遺跡出土漁撈具 (宮原 2015)

フォーラムⅦ

能登の海辺に築かれし古墳

七尾市教育委員会 スポーツ・文化課 専門員

北林雅康

七尾市教育委員会の北林です。今日は能登から車でやって来たのですが、金沢は現在、北陸新幹線開通効果で大変賑わっていますが、盛り上がっているのは金沢だけで、能登にはその波及効果があまりありません。それはやはり陸上交通の面で能登半島という地理的なデメリットがあるかと思います。しかし、陸上交通が栄える前、水上交通が盛んであった頃は、ある意味、能登半島は大陸にも近い場所で先進的なものを取り入れてきた地域であったと思います。

1. 能登の地理と地勢

石川県は白山を源流とした手取川の扇状地として開けた加賀と長狭な海岸線が続く能登で構成されます。石川県の面積は全国で34位ですが、総海岸線の延長では全国23位ということで、狭いながらも海岸線が長いことがわかります。さらに海岸線の3/4が能登半島になります。能登は海、海岸とともにある地域であることがわかると思います。

能登半島は左手の握った親指の形のように日本海に突き出ています。石川県は西側、福井県と接する加賀市から小松市、金沢市、能登半島の基部に位置する宝達志水町や羽咋市まで、羽咋市には千里浜というなぎさドライブウェイもあるように砂浜、砂丘が続くのですが、それより北側は岩礁地帯で、崖や岩礁も多く、砂浜は小規模です。映画「ゼロの焦點」でもありましたが、ヤセの断崖、能登金剛といった険しい崖や岩礁地帯がずっと続いている地形で、日本海に面する沿岸部を外浦といいます。

半島の西側は偏西風や対馬海流もありますが、能登半島そのものが防波堤となっており、反対の東側にある富山湾は内湾となり、比較的穏やかです。西風が直接当たらない、能登半島の喉元にあたる七尾湾の一带を内浦といって波は穏やかで、外浦と内浦では風土が異なります。

羽咋には邑知潟があり、北東に向かって邑知地溝帶が延び、七尾湾にいたります。

能登国は養老2年(718)に羽咋、能登、鳳至、珠洲の4郡が越前国から分かれて立国しました。平成30年(2018)がちょうど能登立国1300年を迎えるということで、「こしのくに国府サミット」が七尾市で開催されます。能登郡が「能登」の国名となって立国するわけですが、この地域は中世にも守護所、府中があり、能登畠山氏の拠城として七尾城という史跡があります。天正5年(1577)に上杉謙信により落城しますが、天正9年(1581)には前田利家は織田信長から能登一国を与えられて七尾城に入り、その後には金沢(尾山)に移り、加賀百万石の礎を築きます。

能登の地理的特性として日本海に突き出ている半島なので、古代には渤海船が能登に頻繁に流れ着いており、まさに大陸の玄関口でした。南からの温暖な海流と北からの冷たい海流がぶつかり交わるところで、植物的にも寒地性植物の南限・暖帶性植物の北限となる植物が混在する地域にもなっています。

能登半島は大半が低山地で高い山がなく、能登への入口、白山山系の末端に連なる宝達丘陵に

標高 637m の宝達山があります。東京スカイツリーより 3m 高く、これが能登で一番高い山です。この宝達山の北東側には標高 565m の石動山を代表とする山々が、西には眉丈山の山々が能登の穀倉地帯となる邑知地溝帯に沿って、羽咋市から七尾市に向けて北東に延びています。

そして、奥能登では標高 567m の高州山から丘陵が樹枝状に延び、段丘状のままそのまま海岸線に落ち込むという、海沿いにほとんど平野、平地がないような地形になっています。大きな河川もなく、いろいろな小河川が造り出した小さな谷地形が点在していますが、このようなところに村が形成され、現在も集落の拠点となっています。



図1 能登半島の後期・終末期の主な古墳分布図（戸澤・北林2011）

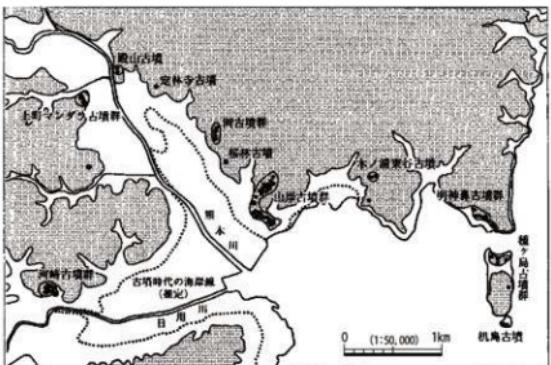


図2 七尾西湾の主な古墳分布図（西野他 1996）

2. 能登の古墳の展開

石川県では、墳丘のある古墳が約2,400基、横穴墓が約700基、約3,100基の墳墓が確認されています。そのうち、能登では約2,000基、七尾市で約640基、中能登町で約570基の古墳が確認されており、県内の総数の4割を占めています。

能登は平地が少ないので、海に近いところに古墳が立地しています。あえて海辺に古墳を築いたのか、地理的な要因で海辺に築かれたのか、なかなか判断できません。

（1）古墳時代前期の古墳

古墳時代前期初頭では、七尾西湾の机島に全長約20mの前方後方墳、机島古墳群が造られます。この時期の古墳として国分岩屋山古墳群、上町マンダラ古墳群、国分尼塚古墳群などもありますが、海辺というよりは海と平地部を望める場所に立地しています。その中で、国分尼塚1号墳は全長50mを越える前方後方墳で、斐鳳鏡や武具など多彩な副葬品の中に漁労具のヤスが出土しています。約3.5km東の海岸段丘の先端部に大型の建物群（倉庫）からなる国史跡万行遺跡があります。

古墳時代前期後葉の首長墳は、七尾湾から離れて内陸の邑知地溝帯の中央部に造営されます。石動山系には墓参考地である小田中龟塚（全長61m、前方後円墳）と長径約67mの円墳とも、全長72mの帆立貝形古墳ともいわれる小田中親王塚古墳、眉丈山系には国史跡雨の宮1号墳（全長64m、前方後方墳）、次いで2号墳（全長74m、前方後円墳）が造られます。

（2）古墳時代中期～後期初頭の古墳

古墳時代中期に入ると、墳丘が帆立貝型で全長64mの水白鍋山古墳、同じく帆立貝型で全長44mの小竹ガラボ山古墳と造られます。分布の中心が大きく二つの地域に見られます。一つは邑知地溝帯西端の羽咋の地域で、全長90mの滻大塚古墳を筆頭として滻・柴垣古墳群が造られます。もう一つは邑知地溝帯東端の七尾南湾で42mの円墳、矢田丸山古墳、そして矢田古墳群が造られます。古墳時代前期から中期にかけて、七尾湾周辺からいったん邑知潟地溝帯中央部に首長墳が移動するのですが、中期の後半からまた七尾湾周辺でも古墳が造られ始め、羽咋では滻大塚古墳、七尾湾周辺では矢田古墳群と矢田丸山古墳という全長42mの埴輪をもつ円墳が造られ始めます。

滝大塚古墳は、立地からもわかるように滝岬の海岸段丘の先端にあります。帆立貝形の墳丘で、福井市の免島長山古墳に墳形が似ていると言われています。残念ながら現在は墳丘の改変を受けて、なかなか旧状を留めていないのですが、葺石や埴輪をもち、5世紀前半の畿内との強い関係の中で造られ、海を意識した古墳と言われています。能登の中で、この時期の中核となる古墳です。滝大塚古墳に次いで5世紀末頃に造られた滝3号墳は、能登では最古級の横穴式石室を備え、副葬品として須恵器、刀、馬具などが出土しています。邑知地溝帯の西端でこのような古墳が造られ始めたことがわかります。

これに後続して、6世紀前半に柳田古墳群の山伏山1号墳という全長50mの前方後円墳が造られます。右袖式の畿内系横穴式石室をもち、石室に赤色顔料が塗られています。馬具も出土しています。

能登では、古墳時代中期に円墳が多く造られ、古墳時代後期に入ると能登と越中を結ぶ交通の要衝の地で竹生野天王山1号墳、そして矢田高木森古墳という三つの前方後円墳が同時期に造られるという現象がありますが、これは一時期のことと、その後、前方後円墳が造られなくなります。

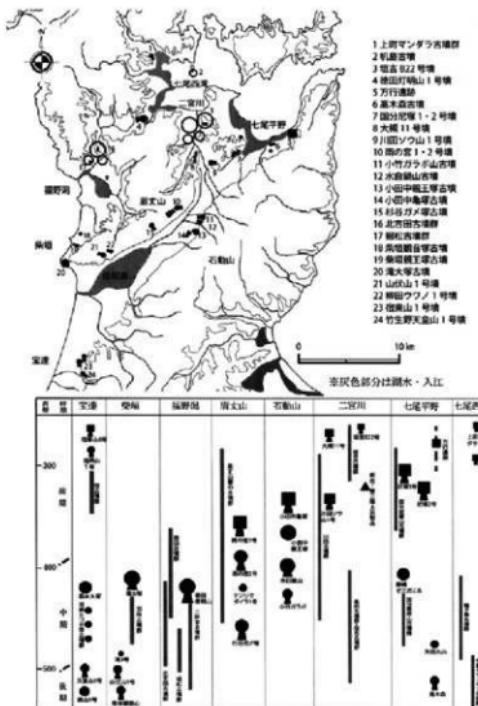


図3 能登の古墳と潟湖（伊藤2016）



写真1 滝大塚古墳(羽咋市教育委員会所蔵)



写真2 矢田高木森古墳

(七尾市教育委員会所蔵)

矢田高木森古墳は、後円部がこんもりとしていますが、後円部の墳丘が高い古相のタイプで、現在は木が伐採され、優美な墳丘が観察できます。七尾南湾部で古墳時代後期前半に造られた盟主墳の一つです。昭和33年（1958）の調査では竪穴式石室ではないかと考えられていましたが、おそらく横穴式石室ではないかと思われています。地元で「海石」と呼ばれる砂岩を利用して石材を構築して、床には薄い板状石の安山岩を敷いているという特徴があります。余談ですが、古墳には後藤守一先生が揮毫された石碑がありますが、石材として丸い海石を使っています。

(3) 古墳時代後・終末期の古墳

古墳時代後期は、円墳を主体とした小規模の群集墳が多く造られます。何と言っても後期古墳の中心地は七尾南湾周辺と、七尾西湾の旧中島町の周辺で、多くの古墳が分布しています。七尾南湾では三室まどがけ古墳群、七尾西湾では中島ヤマンタン古墳群などが海辺に造られます。内陸では、能登と越中を結ぶ結節点に位置する散田金谷古墳が造られます。

7世紀前後には双龍文環頭大刀が出土した曾祢1号墳（中能登町）、袖ヶ畠古墳（穴水町）、大畠4号墳（珠洲市）などが造られ、7世紀前半に畿内的な様式で造られた巨石積みの石室をもつ院内勅使塚古墳が七尾湾からやや内陸の場所に造られ、7世紀後半に能登島に須曾蝦夷穴古墳が造られた後、石室をもつ古墳は7世紀末頃の大畠南古墳群（珠洲市）を最後に、終焉を迎えるといった大きな流れになっていきます。

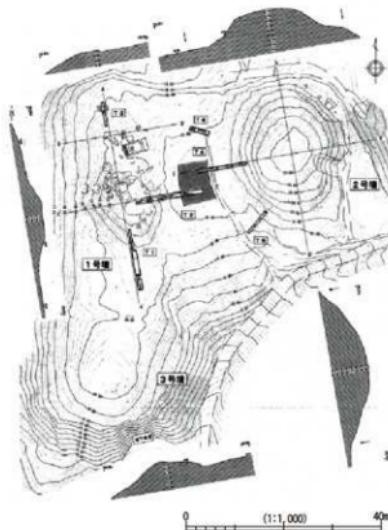


図4 佐味今田谷内古墳群分布図（七尾市教育委員会 2016）

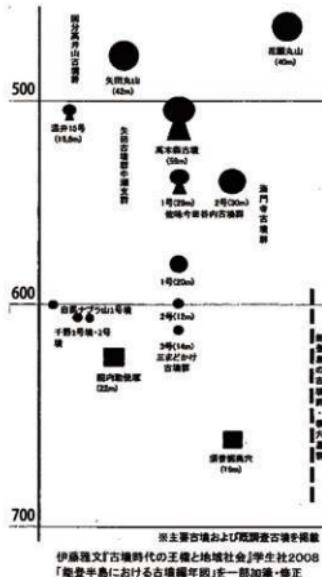


図5 七尾南湾の後・終末期の古墳編年略図
(七尾市教育委員会 2016)

表1 能登半島の海辺に築かれた古墳一覧表（北林作成）

		古墳群名	古墳名	立地	墳形	規模(m)	外部施設	内部施設	時期	主な出土品	備考
輪島市	船舟横穴墓群	1号横穴	丘陵	丘陵			横穴墓		大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体		
志賀町	千曲二子塚古墳群	8号横穴	丘陵						5個、人骨3体	墓具として各種玉類が 多量に附着。	
外 湖	柴垣古墳群	C1号墳	海岸段丘 鳥居原-小治 橋高18m	円墳	径17m	周溝	横穴式石室 (北面開口)	6.壁蓋～ 7切頂	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	海岸から石材採取 山柱石9北部丸太村系 佐藤報告書-14年石室 考古学会 4時(A・B・C・D) 13基	
羽咋市	柴垣古墳群	C2号墳	海岸段丘 鳥居原-小治 橋高18m	円墳(構内)	径16m	周溝	横穴式石室 (北面開口)	7.前室～ 中室	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	北室(S28年調査) 一重石室 及反室(全周14基)	
宝造落志水町	柴垣古墳群	柴垣円山 1号墳	海岸段丘 海岸段丘 橋高5m	円墳	径21.5m	周溝	箱形石棺	5.前半	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	板石(安治川)海岸部 「羽咋市史 原始古代編」 1972羽咋市役所	
珠洲市	大畠古墳群	2号墳	海岸段丘 柴垣芦原山 柴垣-こづ塚 占拠	前方後圓 後円頂	全長35m	葺石	横穴式石室 (右側開口)	6.中室	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	石室は西南に開口 「柴垣古墳」	
内 湖	水禪寺古墳群	3号墳	海岸段丘 山伏山11号墳	円墳	径49m	葺石 溝、埴輪	横穴式石室 (右側開口)	5.後半	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	「柴垣古墳」	
登町	岩坂横穴墓群	2号	山林2号 横穴墓	丘陵	径15m	周溝	横穴式石室 (右側開口)	7.前室	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	平面方形の石室 石室前面に赤色顔料 「柴垣古墳」	
水禪寺古墳群	1号墳	山伏山11号墳	山伏山(内陸部)	前方後円墳	全長50m	周溝	横穴式石室 (右側開口)	8c.未定	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	石室前面に赤色顔料 「柴垣古墳」	
大畠古墳群	2号墳	山伏山11号墳	山伏山(内陸部)	丘陵	径21m (右側開口)	周溝	横穴式石室 (右側開口)	8c.未定	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	石室前面に赤色顔料 「柴垣古墳」	
大畠古墳群	3号墳	山伏山11号墳	山伏山(内陸部)	丘陵	径21m (右側開口)	周溝	横穴式石室 (右側開口)	8c.未定	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	石室前面に赤色顔料 「柴垣古墳」	
宮大古墳	1号墳	山伏山11号墳	山伏山(内陸部)	丘陵	径21m (右側開口)	周溝	横穴式石室 (右側開口)	8c.未定	大正5、昭和10、水晶 鏡切子玉、青玉器管 ガラス、人骨3体	石室前面に赤色顔料 「柴垣古墳」	

6世紀初頭と6世紀後半の間の時期をつなぐような古墳はないかということで最近、発掘調査したのが佐味今田谷内古墳群です。確認調査だけあまり詳細なことは言えませんが、佐味今田谷内古墳は6世紀前半から中頃に位置づけられると思います。古墳群からは海を見下ろすことができ、海が間近なところにあります。現在は県道がありますが、昭和初期まではすぐ近くまで海でした。海の先を眺めると万行跡や三室まどかけ古墳群なども見え、さらに能登島があります。

1号墳は前方後円墳で、2号墳は円墳です。1号墳の主体部は完全に盗掘されていたので、トレチをわずかに入れて切り合ひだけ確認しました。2号墳には周溝があるようで、径30m、比高差が5mと墳丘が高い円墳です。この要素だけ見ると、もっと古い古墳と考えたくなるのですが、発掘調査を実施していないので、現在は同じような時期の古墳と考えています。

三室まどかけ古墳群は6世紀後半から7世紀前半にかけての古墳群ですが、尾根上に1・2号墳が、その下の方に3号墳が分かれて立地していました。2号墳からはヤスと鉄釣針、帆立貝といった海にまつわる遺物が出土しています。帆立貝も単に貝殻が混入していたことも考えられるのですが、石に置かれ、その上に骨が載っていたので、やはり意図的に置いたのではないかと考えられます。道路を造るときに古墳が壊れるということで、1号墳は現状保存、2・3号墳は解体・移築して整備されています。

1号墳は北部九州系の横穴式石室で、袖石があり、腰石に大きな石材を使っています。石材に「海石」を使っており、高木森古墳でもこの石を使っていますので、もしかしてこのような用石に海との関わりをもっているのかかもしれません。石室の床に安山岩の板石を使っているところも高木森古墳と同じです。この板石は能登島で採れる石で、須曾蝦夷穴古墳の石材としても利用されています。石室の積み方は大型の腰石を据えて、小口積みと長手積みを段ごとに繰り返し、奥壁に引っ掛け



写真3 佐味今田谷内1号墳
(七尾市教育委員会所蔵)



写真4 佐味今田谷内2号墳
(七尾市教育委員会所蔵)



写真5 三室まどかけ3号墳
(七尾市教育委員会所蔵)

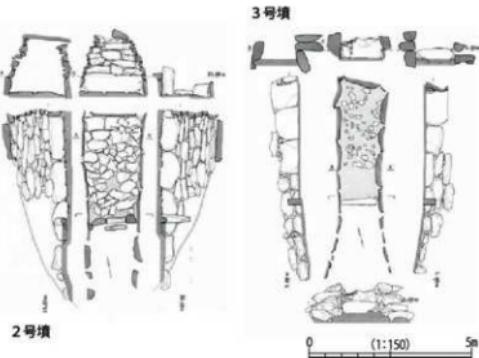


図6 三室まどかけ2号墳・3号墳石室実測図
(石川県立埋蔵文化財センター1994)

るよう力石状に石を積んでいることがわかります。

外浦の志賀町（旧富来町）に千浦二子塚古墳群があります。鳥越岬がすぐ近くにあり、眼前の海に向かって石室が開口しています。昭和 28 年に九学会総合調査により発掘調査されましたが、その後、雑木が繁茂して全く人が入れるような場所でもなかったのですが、地元の方々が何とかしてこの古墳群を残していくみたいという熱意もあって、平成 22 年（2010）に石川考古学研究会が主体となって地元の住民の方々と一緒に草刈りから始めて調査をしました。

C 2 号墳は 7 世紀前半から 7 世紀中頃と考えられる古墳で、実は二つの横穴式石室を有していました。須曾蝦夷穴古墳に次いで能登では 2 例目となる双室墳の発見となりました。墳丘測量とトレンチ調査のみで詳細な発掘調査は行われていませんが、このような古墳が確認されたということで、2012 年に町の史跡に指定され、現在は、住民の方々が管理されている古墳群を見学することができます。

院内動使塚古墳は 7 世紀前半の方墳で、盗掘を受けており、石室の中から少量の須恵器が出土しただけです。巨石積みの石室で、須曾蝦夷穴古墳より先行する時期の盟主墳と考えられています。古墳の立地が七尾南湾沿岸ではなく、内陸に入っていることが特徴です。

宝達志水町にある 6 世紀後半の散田金谷古墳には、能登で唯一の組合式の家型石棺があります。石室には立柱石があり、いわゆる北部九州系の石室です。畿内的な様相は邑知地溝帯でも西端、気多大社がある羽咋のあたりに集中しています。

（4）古墳時代終末期の古墳

7 世紀初頭～中頃に造られた七見いずがま古墳（能登町）は横穴式石室をもつ古墳で、袖ヶ畠古墳（穴水町）では双龍文環頭大刀が出土しています。

須曾蝦夷穴古墳は能登島の中腹にある、単独に立地する古墳です。雄穴と雌穴と二つの石室を

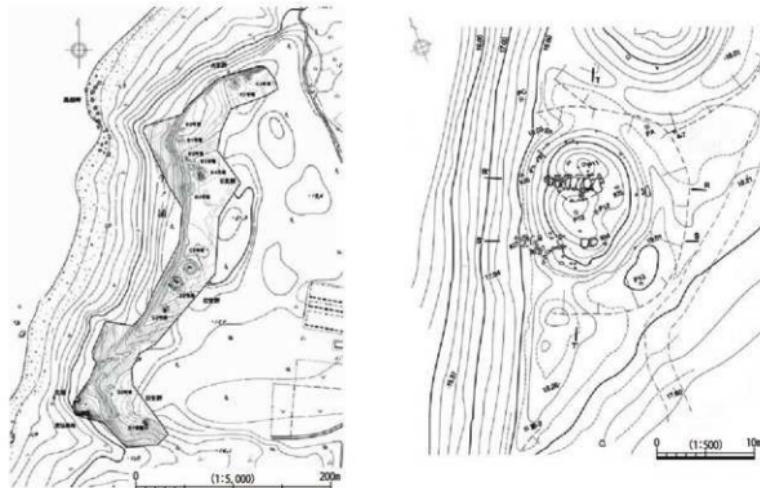


図 7 千浦二子塚古墳群古墳分布図・C 2 号墳墳丘測量図（伊藤他 2014）

もつ7世紀後半の双室墳で、石室の平面形は雄穴がT字状、雌穴は逆L字状となっています。石室の中からほどぞ穴鉄斧や銀象嵌円頭大刀などが出土しています。石室の特徴は安山岩の板石を積み上げてドーム状に組んでいます。雄穴の石室の奥壁は隅三角の持ち送り状で、奥壁と側壁を渡すように力石的にドーム状に組んで形をとっています。この板石は三室まどかけ古墳で利用されていた板石と同じで、眼前にある一本木鼻岬で採れる石です。その板石を対岸の三室まどかけ古墳や高木森古墳で利用しており、七尾南湾を介して、石室に同じ石材を使用する共通項を見いだすことができます。

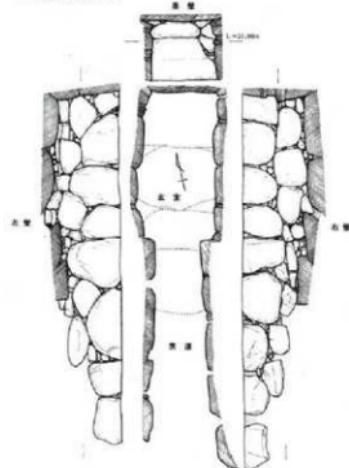
これまで須曾蝦夷穴古墳の石室は、高句麗の技術で造っているのではないかと指摘されていましたが、雄穴石室のT字型という平面形は、羽咋の柴垣ところ塚古墳という7世紀前半の古墳で見つかっています。また板石積みという技術もすでに七尾西湾の中島の瀬嵐木の浦東谷1号墳で用いられています。もともと能登にあった石室の技術の総体として須曾蝦夷穴古墳の石室が造られているのではないかと考えられます。どこかの地域から伝わってきたというより、もしかして地域の中での技術と考えられるのではないかと石川県埋蔵文化財センターの伊藤雅文さんなどが指摘されています。

最後に、能登では6世紀末から7世紀にかけて横穴墓群がかなり増えてくる傾向があります。志雄地区と能登島、輪島、珠洲で横穴墓群が造られる地域がありますが、輪島では稻舟・大川・

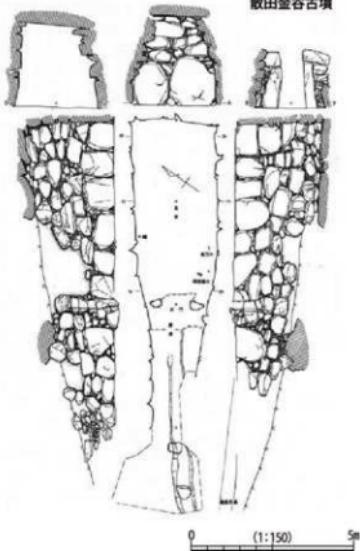


写真6 須曾蝦夷穴古墳雌穴石室
(七尾市教育委員会所蔵)

院内動使塚古墳



散田金谷古墳



0 (1:150) 5m

図8 院内動使塚古墳・散田金谷古墳石室実測図 (志雄町教育委員会 1980・七尾市教育委員会 1985)

三井の横穴墓群が、珠洲では鈴内・谷崎・南黒丸・岩坂などの横穴墓群が見られます。

3. 能登の古墳と生業

能登の塩づくりは、弥生時代の終わり頃から大阪湾周辺の影響を受けた大型脚台をもつ倒杯形の製塩土器を用いて七尾南湾・西湾で始まります。この脚台の大きさが小型化、齊一化され、だいたい6世紀に盛行します。能登式の製塩土器で平底の製塩土器は若狭から伝わってきたもので、これがだいたい8～9世紀あたりには外浦や羽咋周辺で使われるようになります。また、7～8世紀に盛行する棒状脚タイプが七尾湾一帯で一般的に用いられるようになります。

大伴家持は越中国守時代に能登半島を巡っています。その時に詠んだ歌として「香島より熊来を指して漕ぐ船の樹取る間なく都し思ほゆ」(『万葉集』卷17-4027)があり、「香島より熊来をさして漕ぐ船の」ということで、古代、香島津があったとされる現在の七尾港から、熊来、七尾西湾の中島あたりに向かって、税を納めているか、仕事をしているか、見に行くために家持は巡回するわけです。もう一首、「鳥總立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ」(『万葉集』卷17-4026)という熊来に行く途中に詠んだ歌も残っています。能登の珠洲には舟木部がいたことが木簡からわかっていますが、やはり豊富な森林資源、それを用いた造船技術が極めて重要な生業として存在していたようです。家持はそれを見に来たのではないか。「能登の島で船木切る」ということは、おそらく船の材料にする木を管理してそれを切って船を造っていた。では何のために船を造っていたのかと言えば、能登は東北遠征、蝦夷地に向かう必要があつたということが大きいのではないかということで、ご紹介させていただきました。

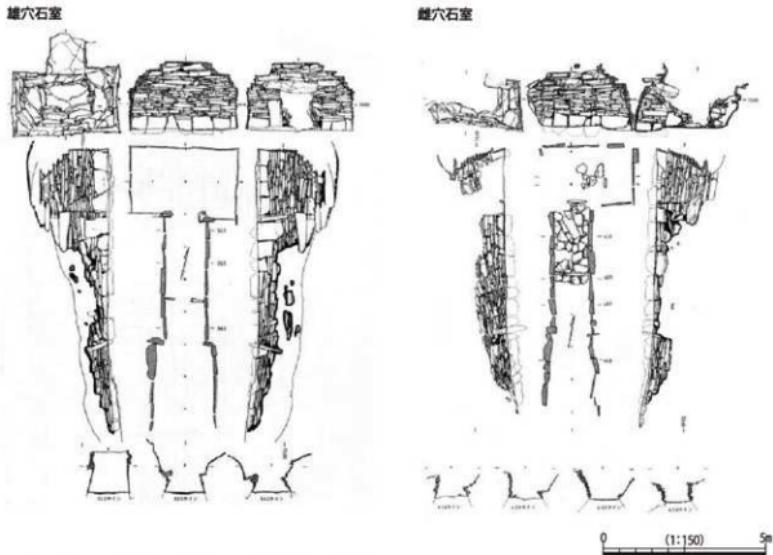


図9 須曾蝦夷穴古墳石室実測図（能登島町教育委員会 2001）

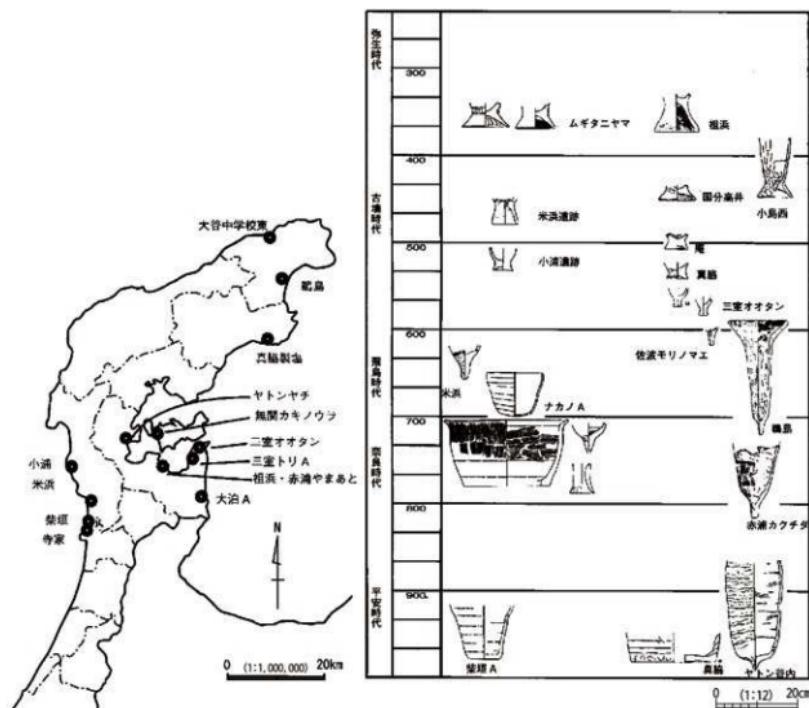


図10 能登半島の主な製塩遺跡と製塩土器（空2010）

古代には「熊来」と呼ばれた地域には、古墳時代中期の種ヶ島古墳群も造られるのですが、この一角に机島古墳という前期初頭の前方後方墳があり、さらに後期のヤマンタン（山岸）古墳群が造られる地域ということで、七尾西湾の有力な豪族が存在していたことが推定できる場所です。ちょっと長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

トークセッションⅡ

海辺に築かれし古墳～三河・志摩・能登・若狭～

七尾市教育委員会 スポーツ・文化課 専門員

北林雅康

志摩市教育委員会 生涯学習スポーツ課 主査

三好元樹

岡崎市教育委員会 社会教育課 主査

山口遼介

進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 副館長（学芸員）

松葉竜司

【松葉】では2回目の「海辺に築かれし古墳」のトークセッションを始めます。今回は三河、志摩、能登と若狭から離れた地域についてご報告いただきました。前回は若狭と丹後との近しい関係性が明らかとなったのですが、今回は逆にいろいろな地域性があり、地域ごとに違いも多く、面白い反面、難しいとも思った次第です。

1. 古墳時代前期・中期の海辺に築かれし古墳

【松葉】まず今日は6～7世紀を中心とした古墳のお話しが多かったのですが、古墳時代前期から中期にかけて、4～5世紀において海を意識した古墳がそれぞれの地域にあることが改めてわかりました。各地域で4～5世紀の海辺に築かれし古墳にはどのような特徴があり、後の6世紀以後につながっていくのか、ということを簡単にご紹介していただけますか。

【山口】三河の古墳時代中期前葉の海辺の古墳として正法寺古墳をご紹介しましたが、三重県松阪市の宝塚1号墳と同じ前方後円墳で、墳形もよく似ている、造り出し部の祭祀の仕方、埴輪なども似ているということで、すでに古墳時代から伊勢と三河の間で伊勢湾を通じた交流があったと思います。正法寺古墳は5世紀前葉の築造ですが、畿内系の埴輪をもち、畿内政権との関係の中で海上交通を担う役割として海を望む高台に造られた古墳ですが、前時代の首長層の地盤の上に古墳時代後期の幡豆地域に古墳が造られるということで、やはり前期・中期の古墳の立地をある程度踏襲しながら、後期古墳の立地も少し小高い、海を見下ろす場所を選んで古墳を造っている傾向があると思っています。

【三好】志摩では5世紀のおじょか古墳しかありません。おじょか古墳が最初に造られた古墳で、海に面しています。伊勢地域では松阪市の宝塚1号墳をはじめ多くの古墳があります。その当時、松阪のあたりは現在より海が入り込んでいたので、宝塚1号墳は海からも眺めることができたと考えられます。



トークセッションの様子
(左から山口遼介氏・松葉竜司氏)



トークセッションの様子
(左から北林雅康氏・三好元樹氏)

5世紀には、大阪で大仙陵古墳が海辺に造られます。海に面する古墳そのものは特別に時期を限定するものではないと思っています。その意味付け、どのような層が古墳に埋葬されているかということになると、それぞれの地域、時代によって変わってくると考えています。

【北林】能登では前期初頭の古墳（前方後方墳）として机島古墳、この少し東側に垣吉B22号墳があります。海辺に立地するところもありますが、もう少し内陸に入ったところにある大槻11号墳のような川の水系のところに立地するものもあって、小さい古墳がいくつか造られる状況は読み取れるかと思います。ただ、それは七尾南湾から西湾地域と宝達志水町のあたりの古墳に限定され、内陸の邑知地溝帯、外浦では現在、見当らない状況です。後出して、邑知地溝帯の北端、七尾南湾を望む丘陵に国分尼塚1号墳が出現します。

【松葉】ありがとうございました。よく考えると、5世紀には丹後では網野銚子山古墳がラグーン、潟湖を望むところに造られ、若狭でも最近発掘調査された丸山城址古墳が山の上の小浜湾を望むところに造られています。越前の免島長山古墳も三国湊の海を望むところに造られているということで、各地でこのような事例が認められる中で、今、皆さんにご紹介いただきました。

2. 海辺に築かれし古墳の被葬者像

【松葉】今回のテーマからは外れるのでこれくらいにしますが、若狭の海辺の古墳と土器製塩遺跡の立地をみると、とても近い関係があります。三好さんのご報告では海辺の古墳と漁撈民がかなり近い関係にある、逆に製塩との関係性はよくわからないということであったかと思います。例えば三河や能登では、能登については北林さんがご報告の最後の方に製塩について取り上げておられたので、ひょっとすると海辺の古墳と製塩は関係するのかなと思いながらお話しをお聞きしましたが、三河や能登ではいかがでしょうか。

【山口】三河では、知多半島でも渥美半島でも三河三島でも、そして三河湾の沿岸部でも古墳時代の製塩遺跡が実際にあります。

例えば日間賀島では古墳の建築が始まる6世紀前半から製塩が始まる、そして製塩遺跡の近くに古墳が所在するという関係もあります。ただ、日間賀島の北地古墳群では漁撈具も古墳の石室から出土し、製塩土器も石室から出土するように、日間賀島に限らず三河三島に関しては漁業もすれば製塩もするといったような海の民としての被葬者の性格が見えるのではないかと思います。

渥美半島にも製塩遺跡があって、塩の貢進木簡に記載された渥美郡大壁郷がおそらく渥美半島先端の西の浜製塩遺跡群に比定されると思います。また大壁郷は伊勢国の有力氏族、大庭氏に由来するとされていますが、やはり製塩遺跡と対となって古墳が築かれるという関係性は受けられると思っています。

【松葉】今のお話は、三河三島の中でもそれぞれの島ごとに漁撈、製塩とカラーがある、特色があるということです。三河三島や渥美半島の地域では奈良時代以後に都に何を納めたのか、塩なのか、海産物なのか、都から出土する木簡でわかると思いますが、海辺の古墳の被葬者の性格と後の木簡記載の内容とは対応するのでしょうか。また、このような地域ごとの性格の違いは何に起因しているのでしょうか。

【山口】三河三島の木簡では塩を中央に納めたものはないと思います。渥美半島の大壁郷だけが唯一の塩の貢進地かと思います。

【松葉】少し引っ張りますね。例えば半島の沿岸部の人達が三河三島の人達をある程度掌握している、コントロールしているといったようなことはあるのでしょうか。例えば渥美半島では塩を

作り、三河三島では海産物を捕るといったような地域間分業のようなものが存在したのでしょうか。

【山口】そこまでは私も把握していないのですが、三河湾沿岸地域の集団が三河三島を主導するような気もしますが、でき過ぎな気もします（笑）。

【松葉】ありがとうございました。能登ではいかがでしょうか。

【北林】実際、基本的に七尾湾のほぼ全域、そして内浦にも製塩遺跡が分布しています。能登だけで200か所ほどの製塩遺跡があると思いますが、古墳の分布から製塩との直接的な関係性は言いにくいです。能登では、今のところ古墳の副葬品として製塩土器は出土していないと思います。

【松葉】そうですよね。逆に若狭では古墳と製塩遺跡との対応関係がきれいに見えてしまうのですが、能登の場合は状況証拠として製塩をしている人達もいるし、漁撈や交易、航海など、いろいろな関係性の中である程度古墳と結びついているという理解になるのかと思います。

逆に志摩では若狭とは対照的な感じがあるので、志摩はそもそも都に塩を納めた地域ではなかったですね。古墳時代から海産物を捕って加工するということがあったと思いますが、木簡から見ても古代もそうなのでしょうか。

【三好】そうですね。古代に都に塩を納めたという木簡は少なく、ほとんどが海藻類を含む魚貝類の木簡です。ただ、志摩で塩を作っていないのかといえばそうではなく、奈良時代の製塩土器が出土しますし、塩の貢納の記録もあります。ただ、製塩土器の出土分布はほぼ三重県内で収まりますし、若狭と同じ御食国ですが、主に都に納めたものは塩ではなかったと理解してよいと思います。

【松葉】ありがとうございます。今日のご報告の中で、答志島などの島のお話もありましたが、おじょか古墳を含む志島古墳群の一帯が中心で5世紀から7世紀にかけて古墳が造られたという中で、その造営集団の人達は答志島の古墳に埋葬されている人達に何かをさせていたのでしょうか。答志島の有力者に対して、どの程度関与していたのでしょうか。

【三好】どうですかね。答志島にもそれぞれ6世紀中頃、7世紀後半のそれなりに大きな古墳が造られていますので、答志島まで志島の勢力が及んでいたというのは、怪しいところですね。おそらく当時の支配は、どこまでが自分の土地というよりは、それぞれの集落を単位とするもので、入り組んだ形もあったと想定してよいかと思います。おそらく面的にここからここまでというような支配の仕方はしてなかったと思います。答志島まで影響力を持ったということは疑問です。

【松葉】イメージとして内陸の有力者が答志島を支配していたと考えるのではなく、答志島にも力をもっている人達がいたということですね。

【三好】各地に、その時々によって古墳を造ることができる人達が現れ得る地域であったという考えをもっています。

3. 能登の横穴墓とその被葬者像

【松葉】ありがとうございました。北林さんにおうかがいしたいことがあります。今日のご報告の中では直接的に触れられなかったと思うのですが、横穴墓、山の斜面に横穴を掘って古墳の石室のように見立てるような埋葬方法があります。前回のトークセッションでも話題になりましたが、丹後にも横穴墓はあるのですが丹後半島の内陸の方にあるので、やはりその立地からいわゆる海人集団なり、海部にあたるような人達の墓とは考えにくい。若狭にも数例ありますが、それもそのような人達の墓とは考えにくいという結論に至ったのですね。逆に、山陰の隠

岐国、隱岐島にも横穴墓があつて、海に面した崖にも造られています。いろいろな事例があるのですが、能登の横穴墓の被葬者はどのような性格なのでしょうか。

【北林】特に数が多い、200基以上の横穴墓があるのではないかと言われているのが能登半島先端部の珠洲です。他には七尾湾の能登島の東側も多く、海とは関係ありませんが宝達志水町の散田金谷古墳のあるあたりも越中に抜ける要衝の地ということなのか横穴墓が多く分布しています。珠洲のあたりで急激に横穴墓が増えていくということは、やはり能登の場合、7世紀に入ると東北遠征というところに大きな意味があるかと思っています。その中で、稻舟横穴墓群（輪島市）からも豪華な玉類などが出土しているのですが、そのような東北遠征に大きく貢献した人々が横穴墓を造っていたのではないかと考えられています。

【松葉】それらの横穴墓は、古墳時代のものというより少し後の時代のものということでしょうか。それとも古墳時代のものでよいですか。

【北林】古墳時代の後期、6世紀後半以降です。『日本書紀』にも出てきますが、実際に薄葬化していくますが、須曾蝦夷穴古墳が能登島に造られるという中で、被葬者のお話になりますが、石室が高句麗式ということで最初は渡来人が被葬者という見方が強かったのですが、一つはいきなり古墳が造られたのではなく、地域の中すでにあった在地の技術を組み合わせて須曾蝦夷穴古墳の石室を造っているとも考えられるのではないかということで、その時に能登臣馬身龍が阿倍比羅夫に率いられて齊明4年（658）から大船団を率いて渡島や唐慎に戦いに行くわけですが、馬身龍は能登の水夫を管理していた人と思うのですが、彼の地で亡くなっています。その時期と須曾蝦夷穴古墳の造られた時期が合致するということで、そのようなことも考えられるのではないかという意見もあります。

【松葉】確かにニューアルされた石川県立歴史博物館の展示でも須曾蝦夷穴古墳の被葬者が能登臣馬身龍とされていますよね。この古墳の被葬者は、今まで渡来系の直接海を渡ってきた人達の墓ではないかと言われていたのが、在地の技術で造られた、いろいろな概念的な要素が組み合わされてこのような特徴的な石室ができたのではないかというお話しがあるようです。北林さんのご説はいかがですか。私は須曾蝦夷穴古墳の石室はあまりに特徴的ですので、渡来系の、海の向こうからの技術で造られた石室と考えてもよいのではと思ってしまいますが、いかがなのでしょうか。

【北林】私は在地の技術は確かに存在するかなと考えております。確かに一つ一つ積み上げていくと、須曾蝦夷穴古墳の石室になりますという意味で理解しているのですが、では私はどう考えるかと言われると、実は答えは持ち合わせていません。

【松葉】ちなみにこの古墳は整備されて、きれいになつています。能登島に渡られると見学することができます。普段、門は開いていますか。石室の中まで入れるのですか。

【北林】石室の中にはいつでも入ることができますし、ライトもつきます。

【松葉】皆さんもぜひ見学いただければと思います。実は私、小学生の時にこの古墳を行ったことがあります。当然、古墳が整備される前で、確かにこの古墳の前に細い山道が農道があり、そこに車を停めて連れて行ってもらいました。雑草が多くて蛇も出そうな怖い感じのところだったので、



写真1　須曾蝦夷穴古墳(南からの墳丘全景)
(七尾市教育委員会所蔵)

大人になってから行ってみるときれいに整備されていて、ゆっくり見学できました。

4.まとめ

【松葉】予定の時間も迫ってきました。では最後に一言ずつコメントをいただいて閉会としたいと思います。

【山口】私は三河で実際に古墳の発掘調査をしたことはなかったのですが、今回、資料を作るにあたっていろいろと勉強になりました。また、伊勢・志摩地域との関わりについても調べていきたいと思いました。ありがとうございました。

【松葉】山口さんはご地元で古墳の発掘調査をされていないことですが、三河の各地で石室の実測図を作成されて精力的に活動されていますので、今回ご登壇いただきました。

【三好】これまでの古墳時代の考え方でいえば、農地が広がっていて、それを支配する首長層が山の上に古墳を造るというような、支配領域がある中で古墳が造られるという考え方方が一般的でした。これに対して、海辺にある古墳はかなり遠い地域の様相が急に入ってくるということで、近年注目されているところかと思います。

若狭ではかなりローカルな、むしろその地域の生業に根差して古墳が造られているということで、海の古墳ということで他の地域と一緒ににはできないという印象を抱きました。おそらく今後も志摩にいる限りは、海、そして海と関わりがある古墳について研究していくことになるかと思いますので、もっと他の地域のこと勉強していきたいと思います。ありがとうございました。

【松葉】ちなみにおじよか古墳の石室には入れるのでしょうか。

【三好】松葉さんは入れないですが（笑）、山口さんは入れます。石室の入口が20cmくらいしか開いていないので、かなり狭いです。痩せている人や小さい人であればすっと石室の中に入っています。入れる人は入れますので、ぜひお越しください。

【松葉】体が細い皆さんは近くに行かれた際にぜひ寄っていただければと思います。

【北林】今回、他地域の三河と志摩の古墳のご報告を聞いて、そのような目で能登を見直してみるということを勉強させてもらいました。一元的な見方になっていると私自身を感じていて、今後、多面的に見ていく必要があるなあ、やらなきゃいけないなと思っています。今日はどうもありがとうございました。

【松葉】後悔されていませんか。北林さんは七尾市でいろいろな事業を抱えられてすごくお忙しい方ですが、心苦しい中、今回のご報告をお引き受けしていただきました。

それでは「海辺に築かれし古墳」シリーズの2回目を終了させていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

寄稿

おおい町の横穴式石室踏査記録

岡崎市教育委員会 社会教育課 主査 山口遙介

1.はじめに

本稿は福井県大飯郡おおい町に所在するヒガンジョ古墳群、神田古墳群、滝見古墳群で行った踏査で得られた成果を報告するものである。

踏査での横穴式石室の略測図作成にあたっては任意で割り付けを行い、基本的に1/20の縮尺で現況の石室床面の平面図、石室奥側壁の立面図・断面図、天井石の見上げ図を作成した。図の方位は大体の磁北を示し、立面・断面の水平は任意に設定したもので、標高は付加していない。

現地調査は平成20年(2008)2月11・12日、3月15・16日、4月5・6・12・13日に断続的に実施し、石室略測図の作成は山口遙介、小林裕季(滋賀県文化財保護協会)、小原雄也(三重県埋蔵文化財センター)、山本原也(小野市立好古館)、松葉竜司(美浜町教育委員会)が分担した。令和2年(2020)12月5日に山口が再確認の踏査を行い、本稿は山口が執筆した。

なお、踏査や執筆にあたり、おおい町郷土史料館の川嶋清人氏には大変お世話になった。

2.大島半島の古墳(ヒガンジョ古墳群・神田古墳群)

ヒガンジョ古墳群と神田古墳群は大飯郡おおい町大島に位置する。大島半島は若狭湾有数の半島の一つで、東の内外海半島とともに小浜湾を抱き込むように南西から北東に延びている。半島基部は高浜町和田の地峡でわずかに本土と接するのみで、半島の外海側に平地ではなく、全般に急峻な海蝕断崖となる。内海側は半島基部の青戸入江に面する犬見地区に集落があり、犬見古墳群(3基)が所在する。犬見地区から北東へは海蝕断崖となり、その先の大島地区的浦底、大島、宮留地区に点々と小集落が分布する。移動、交通に関しては現在でこそ県道241号線により陸路交通が可能であるが、昭和の半ばまで「陸の孤島」と言われてきた大島半島への移動ルートは海路であった。必然的に大島半島の生業は漁業を主とする。

今回報告するヒガンジョ古墳群、神田古墳群は大島半島の先端に近い宮留集落の両岸に所在する。ヒガンジョ古墳群は16基で構成され、集落西側の丘陵裾部に1~6号墳が、北側の丘陵裾部に9~16号墳が分布し、7・8号墳は集落に近い平野部にそれぞれ離れて立地する。一方の神田古墳群は15基で構成され、集落東側の丘陵裾部に分布し、1~6号墳と7~15号墳は間に谷を挟んで対峙するような位置関係にある。

なお神田10号墳は昭和33年(1958)に発掘調査がされ、11号墳は現況の石室実測図が作成された。神田4号墳とヒガンジョ4号墳は昭和35年(1960)にそれぞれ発掘調査が実施されている^(注1)。

【ヒガンジョ5号墳】

墳丘 墳丘土の流出が著しく、正確には計測しえないが径8m前後の円墳と思われる。南に4号墳、北に6号墳が近接して立地する。

石室 南東方向に開口する横穴式石室である。奥壁側の天井石が原位置を留めるのみであり、他

の天井石は石室内に崩落している。そのため石室内への流入土が多く下半部は埋没している。奥壁・右側壁は天井石を受ける石材が1段分確認できるのみだが、左側壁は2段分が確認でき、横目地が通る。両側壁では長辺1.0m、短辺0.4m程度の石材を使用し、横長手積みを基調とする。玄室幅は奥壁付近で1.2m、玄室長は残りのよい左側壁で奥壁から3.8mを測る。高さは現状1.0mを測り、両側壁の断面形はおおむね直立する。平面形は不明だが、狭い玄室幅からすれば無袖になるものと思われる。



図1 ヒガンジョ古墳群・神田古墳群位置図（おおい町発行1/2,500地形図を改変）

【ヒガンジョ 6号墳】

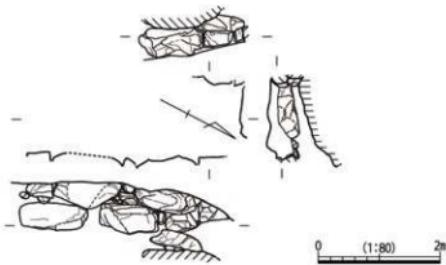
墳形 径約 9.0mの円墳。南に4・5号墳が近接して立地する。

石室 横穴式石室を主体とし、開口方向は真南からわずかに西に振れる。奥壁側の天井石が2石残り玄室内の石材がうかがえるが、それより先は埋没し右側壁でわずかに天井石を受けていたと思われる石材が数石確認されるのみである。

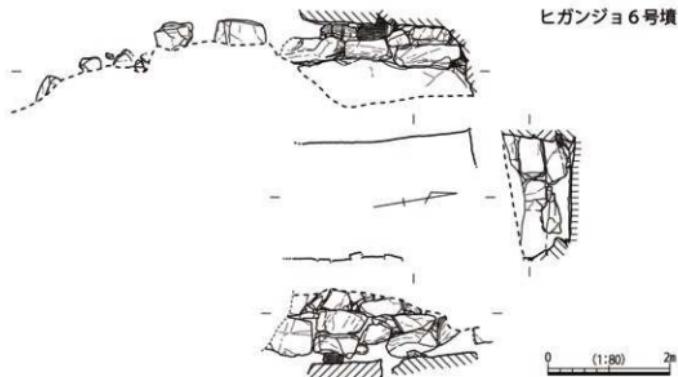
石室の規模は現状で奥壁幅 2.0m、高さ 1.4m、全長は右側壁部で奥壁から 7.0m を測る大型の横穴式石室であるが、袖の有無、羨道部の規模や構造は不明である。奥壁は1段2石で構成され2段目まで確認できる。左側壁は奥壁の段積みに対応し、3段目まで確認できる。石材には長辺1.0m前後、短辺約 0.4m のものを使用し、積み方は横長手積みとし、目地は比較的通る。右側壁は基底石に長辺 2.7m 以上の巨石を横位に配置し、上部に奥壁・左側壁同様の石材を2段積み天井石を受ける。両側壁及び奥壁の立面は直立するが、上部のみやや内傾して天井石を受ける。6号墳から南に約 50m の距離に位置する4号墳では奥壁・側壁の基底石に巨石を配置する大型の横穴式石室が確認されており、両古墳の石室形態に強い関係性がうかがわれる。

【ヒガンジョ 13号墳】

墳丘 円墳で径 14.8m ほどの規模が想定される。古墳群内で最も高所に立地し北西から南東へ下る斜面の中腹に構築されており、墳丘の南側と東側には腰巻状に巡る自然礫の積み上げ（5段程



ヒガンジョ 5号墳



ヒガンジョ 6号墳

図2 ヒガンジョ 5・6号墳横穴式石室略測図

度)が認められることから、墳丘外護列石となる可能性がある。墳丘北西側は斜面を削り墳丘据を造り出している。

石室 南西に開口する横穴式石室。開口部に向かい土砂の堆積が厚くなるものの天井石5石が現存し、遺存状況は良好といえる。平面形態は左片袖式で、全長4.6m、玄室長3.6m、玄室幅1.6m、玄門幅0.8m、玄室高1.2m、羨道長1.0mを測る。開口部は埋没していることから、全長についてはさらに長くなることが想定される。

石室平面形は奥壁付近で最大幅を測り、玄門部に向かいや幅を狭め、玄門部では左側壁から多石積みとなる袖部が0.4mほど内側に張り出し、その幅のまま羨道部側壁へと連続する。

天井石は奥壁から3石は大型で、玄門上部および開口部の2石はこれと比して小型となる。玄門上部の天井石はやや高さを減じる。

壁面の石材には長辺0.6～0.8m、短辺0.4～0.5m程度のものを使用し、横長手積みを基調とする。右側壁は比較的目地が通り、3～4段で構成されるが、左側壁は目地が不明瞭となる。奥壁は3段で構成される。奥壁・両側壁の断面は直立して天井部へ至る。

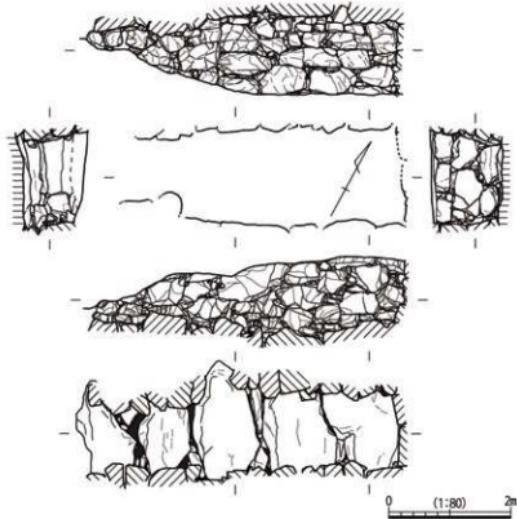


図3 ヒガンジョ13号墳横穴式石室略測図

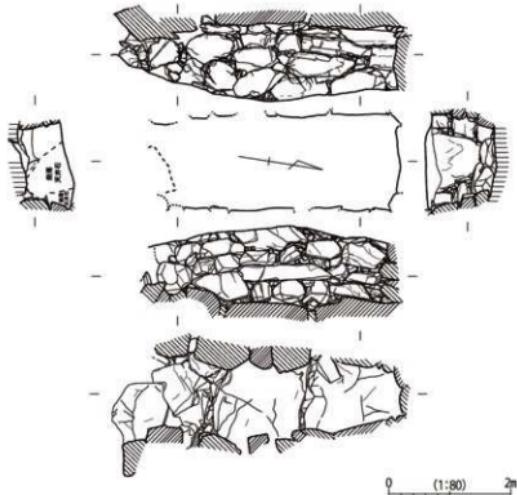


図4 ヒガンジョ16号墳横穴式石室略測図

【ヒガンジョ 16号墳】

墳丘 径約 10.0m の円墳。墳丘北側は斜面を削り墳丘裾を造り出している。開口部付近となる墳丘南側の裾部は小規模な崖面を呈し、石が積まれているが、周囲には近代と思われる平坦面造成の痕跡も認められることから、一概には古墳時代の墳丘外護列石とはいえない。

石室 横穴式石室を主体とし、開口方向は真南からわずかに東に振れる。開口部付近は土砂の堆積が厚くなるものの、天井石 3 石が現存し、遺存状況は比較的よい。平面形態は左片袖式と想定され、全長は右側壁で 4.0m を測るが、開口部は埋没していることから全長はさらに長くなることが想定される。奥壁部では幅 1.6m、高さ 1.3m を測る。奥壁は大型の石材を 1 石配置するが、玄室全幅は占めず側壁からまたがる石材が認められるため、隅角部が奥壁に向かいやや窄まる。

壁面の石材は主に長辺 0.6~0.8m、短辺 0.4~0.5m 程度のものを使用するが、一部に横長の石材（長辺 1.0m 以上）も併用する。積み方は横長手積みを基調とし、両側壁とも比較的目地が通り、3~4段で構成される。壁面の断面では奥壁・両側壁とも直立して天井部へ至る。天井石は水平に架構され、玄門上部の天井石はやや高さを減じる。

【神田 5 号墳】

墳丘 径約 9.0m の円墳。4 号墳の立地する稜線から逸れた谷側の緩斜面に立地する。

石室 南西に開口する横穴式石室。開口部では土砂が厚く堆積している。天井石が陥没しそこから石室の様子がうかがえる。奥壁部の天井石の崩落が著しく、奥壁は抜き取りによるものか現状では確認できない。また開口部も天井石や側壁が崩落しており、特に右側壁の奥壁側は石材が内

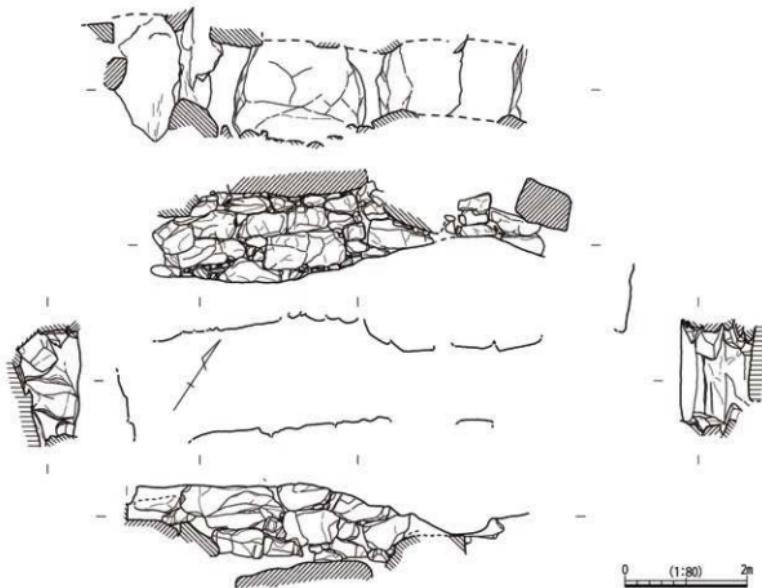


図 5 神田 5 号墳横穴式石室略測図

側に大きく孕み出している。平面形態は不明であるが、現状で石室全長 6.9m、石室幅 1.7m、高さ 1.4m を測る。使用する石材は長辺 0.8~1.5m、短辺 0.4~0.6m とややばらつきがあるものの、積み方は横長手積みを基調とし、両側壁とも比較的の目地が通り 3~4 段で構成される。

2. 佐分利川地区の古墳（滝見古墳群）

滝見古墳群は大飯郡おおい町野尻に位置し、若狭湾に注ぐ佐分利川の河口から約 2km 上流の右岸に位置する。野尻集落東側の南から北へ延びる丘陵の東斜面から裾部にかけて古墳が密集して分布する。集落側ではなく大津呂川の沖積低地を望む立地であり、川を挟んだ対岸（東側）には大飯神社古墳群（総数 30 基）が立地する。滝見古墳群は『若狭大飯』の分布図では総数 32 基が確認されるが、平成 16 年（2004）には 27 基までが確認ないし推定が可能な古墳とされた^{〔注3〕}。なお、滝見 10・11・16 号墳は昭和 29 年（1959）に、27 号墳は昭和 57 年（1982）に、20 号墳は平成 9 年（1997）にそれぞれ発掘調査が実施されている。

【滝見 12 号墳（旧 18 号墳）】^{〔注3〕}

墳丘 径約 17.0m の円墳。古墳群中では高所に立地し、墳丘規模も大きい。西から東へ下る斜面の中腹に構築されており、墳丘西側は斜面を削り墳丘裾を作り出している。一方の東側は盛土により墳丘を構築したものと思われる。

石室 南に開口する横穴式石室。石室内は土砂が堆積しており、床面はさらに下位にある。平面形態は左片袖式、石室の規模は現状で全長 10.0m、玄室長 4.5m、奥壁幅 1.6m、玄門幅 1.2m、玄室高 1.6m、羨道長 5.5m を測る。天井石は 5 石残存し、玄室は 3 石で構成される。玄門部上部と羨道上部の天井石は玄室に比べて小型の石材が架構されている。

奥壁は基底部に高さ 1.0m の大型の石材を配置し、上部に長辺 1.0m、短辺 0.5m の石材を横長手に積む。側壁は長辺 1.0m、短辺 0.6m 程度の大型石材とそれより一回り小振りの石材が混在するが、積み方は横長手積みを基調とする。左側壁の奥壁側には高さ 1.3m、幅 1.4m の巨石を配置し 1 石で天井部まで至る。この巨石のためか左側壁の目地の通りは悪い。両側壁は全体に東側（谷側）に傾くが、これは墳丘が斜面に立地するために生じた変動と考えられる。玄室の左側壁が膨らみ、袖石と乖離しているのもこれに起因する。



図 6 滝見古墳群位置図（おおい町発行 1/2,500 地形図を改変）

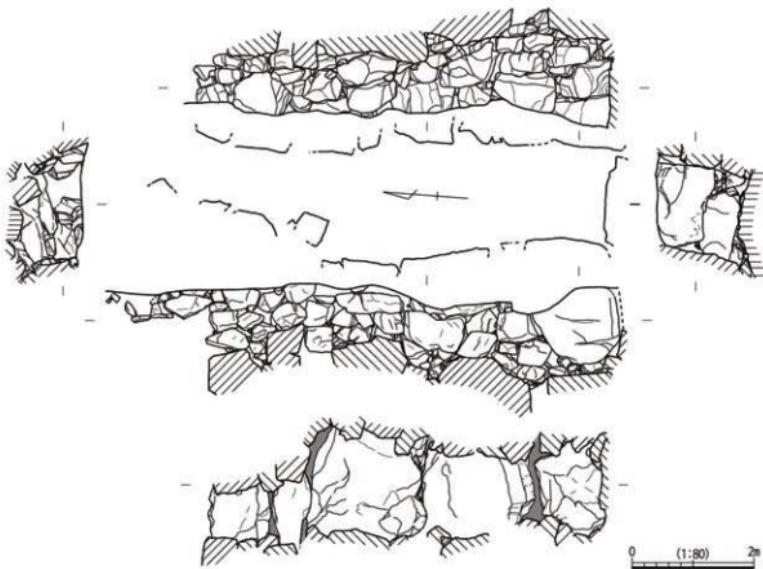


図7 滝見12号墳（旧18号墳）横穴式石室略測図

3.まとめ

最後に、踏査した古墳の築造時期と大飯郡内の横穴式石室の開口方向について若干の考察を加えたい。

築造時期 ヒガンジョ 6号墳の右側壁基底部の巨石は大島半島で最大級とされるヒガンジョ 4号墳と共通する要素である。玄室幅も 2.0m と大きく、石室の大型化を示す好例といえる。ヒガンジョ 4号墳では 6世紀末から 7世前半の須恵器が出土していることから、6号墳もこれと同時期の築造が想定される。ヒガンジョ 13号墳は左片袖式の横穴式石室で、奥壁を含め多石・多段積みである点などは絶じて古相を示す。6世紀中～後葉の築造であろうか。一方のヒガンジョ 16号墳は奥壁が 1 石となり使用石材が大きくなる点で 13 号墳よりも後出する要素が認められることから 6世紀後葉以降の築造が想定される。

ヒガンジョ・神田古墳群は近接して立地し古墳総数は両者を合わせて 31 基を数えるものの、これまで石室形態や築造時期が判明する古墳はわずかであった。特に、神田 4号墳（6世紀前葉）に後出する古墳の存在は不明で、6世紀末以降のヒガンジョ 4号墳や神田 10号墳の間には大きな時期の隔たりがあったが、今回の踏査によりこの期間を埋める石室の存在を明らかにすることができた。

滝見 18号墳は古墳群中でも高所に位置し、墳丘や石室は最大規模と目されることから古墳群の立地や形成過程を考える上で重要な古墳といえる。左側壁の奥壁側基底部に大型の石材を据える点はヒガンジョ 6号墳の配石方法に似る。

また、玄室が狭長となる特徴は滝見 10・11 号墳などと共にすることも考慮すると 6 世紀後葉以降の築造が想定される。

開口方向 ヒガンジョ・神田古墳群の場合、石室の開口方向は南東から南西にかけてまとまり、一見すると集落（宮留遺跡）や生産基盤（浜畠遺跡）を望むように構築されたようにもみえる。一方で、滝見古墳群の場合は南から南東にかけて開口するものが多く、その開口方向は谷奥であり集落域となる芝崎遺跡の方向を指向するのであれば北へ開口しなければならない。上記の例からは必ずしも開口方向は集落や生産域を向くとは限らないことがわかる。

大飯郡内の横穴式石室の開口方向を確認すると、北から東にかけて開口する石室は認められないことから、開口方向には一定のルールが存在していた可能性が高い（図 8）。古墳の築造時期別に開口方向を確認すると 6 世紀中葉までに築造された古墳（Ⅰ期）の場合、二子山 3 号墳（南東開口）を除けば神田 4 号墳、大飯神社 1 号墳、虫山 1 号墳、行崎古墳、輪岡東古墳、山の上古墳は北西から南西に開口し、西方を指向する。一方、6 世紀後葉以降に築造された古墳（Ⅱ期）はそのほとんどが東から南にかけて開口する。群集墳築造が隆盛するなかで石室形態は多様化するが、開口方向は共通して南東方向を指向していることがわかる。今回踏査した古墳でも基本的には南から南東方向へ開口するものであり、6 世紀後葉以降の築造であることを示している。

今回報告した、どの古墳群でも現地を詳細に観察すると、既存の分布図にはない新規古墳と思われる墳丘状の高まりや石材の散乱箇所が確認された。より詳細な分布調査が求められる。

註 1 発掘調査は『若狭大飯・福井県大飯郡大飯町考古学調査報告』1966（本文中では『若狭大飯』とする）で報告されている。

註 2 『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群－近畿自動車道教習線建設事業に伴う発掘調査－』2003 福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによる。

註 3 古墳の号数は註 1 文獻の 18 号墳、註 2 文獻の 12 号墳に該当するものと思われる。今回の報告では 12 号墳とし、18 号墳を旧番号とした。

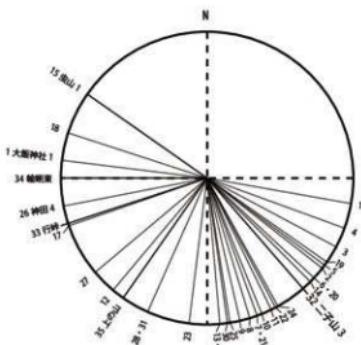


図 8 大飯郡における石室開口方向（番号は表 1 に対応）

佐分利川流域			大島平島		
No.	古墳名	時期	No.	古墳名	時期
1	大飯神社1号墳	I 期	21	ヒガンジョ4号墳	1960年調査
2	大飯神社2号墳	1998・99年調査	22	ヒガンジョ5号墳	今回報告
3	大飯神社3号墳	1998・99年調査	23	ヒガンジョ6号墳	II 期
4	大飯神社4号墳	1998・99年調査	24	ヒガンジョ13号墳	今回報告
5	大飯神社5号墳	1998・99年調査	25	ヒガンジョ16号墳	今回報告
6	大飯神社6号墳	1998・99年調査	26	神田4号墳	I 期
7	山田古墳群毛沙門支群1号墳	1999年調査	27	神田5号墳	今回報告
8	山田古墳群毛沙門支群2号墳	1999年調査	28	神田10号墳	1958年調査
9	山田古墳群毛沙門支群3号墳	1999年調査	29	神田11号墳	1959年調査
10	滝見10号墳	1959年調査	30	御村古墳	1960年調査
11	滝見11号墳	1959年調査	31	吉見1号墳	1971年調査
12	滝見16号墳	1959年調査			
13	滝見18号墳	今回報告			
14	滝見20号墳	1997年調査			
15	虫山1号墳	I 期	32	二子山3号墳	1988・89年調査
16	山の神1号墳	1960年調査	33	行崎古墳	1990・91年調査
17	鹿野1号墳	1961年調査	34	輪岡東古墳	1995・97年調査
18	鹿野7号墳	1961年調査	35	山の上古墳	1961年調査
19	鹿野今谷古墳	1961年調査			
20	八ヶ崎2号墳	1960年調査			

開屋川流域		
No.	古墳名	時期
32	二子山3号墳	1988・89年調査
33	行崎古墳	1990・91年調査
34	輪岡東古墳	1995・97年調査
35	山の上古墳	1961年調査

I 期：～6世紀中葉　II 期：6世紀後葉～

※一部表掲載の古墳は開口方向の判明するもののみを取り上げる。

※石室構築時期は報告書に従うほか、石室形態からの推定も含む。

※各古墳の開口方向は報告書に記載のあるものはそれに従う。記載のないものは図上から算出した。

※方位は磁北、真北が混在する。

表 1 大飯郡内における開口方向の判明する古墳

図表・写真出典

講演「総括・海辺に築かれし古墳」

- 図 1 美浜町教育委員会作成(ベース図に Google earth 写真を使用)
- 図 2 魚津作成
- 図 3 鈴木康高・川畑純『五條猫塚古墳の研究』報告編「第 6 章 壁穴式石槨外出土の遺物 4 農工道具 (16 銀)」第 134 図 銀実測図 2014 奈良国立博物館
- 図 4 川畑純『五條猫塚古墳の研究』総括編「第 11 章 総括 2 解題 五條猫塚古墳」第 240 図 壁穴式石槨外出土遺物の外部性概念図 2015 奈良国立博物館
- 図 5 神戸市教育委員会『住吉宮町遺跡第 50 次発掘調査報告書』「第 1 章 調査に至る経過 2. 歴史的環境」第 3 図 住吉宮町遺跡既調査地及び古墳検出状況図 2014
- 図 6 兵庫県教育委員会『坊ヶ谷遺跡(住吉宮町遺跡群 II)』「III. 調査結果 2. 周溝墓・古墳」図 57 SX02 遺物出土状況 1990
- 図 7 魚津知克『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』「古墳時代社会における鉄製漁具副葬行為の意義」図 6 鉄製漁具と平根式鉄織との共伴状況(1)、図 7 鉄製漁具と平根式鉄織との共伴状況(2) 2010 『遠古登攀』刊行会
- 図 8 森田喜久男『日本古代の王権と山野河海』「I 古代王権の諸段階と山野河海 一 山野河海支配の統治理念-「山海之政」- 3 「天下之政」における「山海之政」の位置」図 2 倭國の統治空間 2009 吉川弘文館
- 図 9 田中元浩『学術研究集会 海の古墳を考える III 一紀伊の古代氏族と紀淡海峽周辺地域の古墳を考える一発表要旨集』「基調報告 4 西庄遺跡と磯間岩陰遺跡」図 5 各集落における手工業生産と集落要素の比較 2013 第 3 回海の古墳を考える会
- 図 10 稲山洋『講座日本の考古学 8 古墳時代(下)』「第 5 章 生産と流通 二 塩業と漁業」図 2 西日本の主要製塩土器(1)・(2) 2012 青木書店
- 図 11 弘田和司『喜兵衛島 一師楽式土器製塩遺跡群の研究-』「第 III 部 考察 第三章 喜兵衛島古墳群の形成とその特質」図 191 喜兵衛島の古墳分布、図 192 南西斜面古墳群拡大図 1999 近藤義郎編『喜兵衛島』刊行会
- 図 12 森本徹『学術研究集会 海の古墳を考える I 一群集墳と海人集団一発表要旨集』「群集墳の類型からみた海の群集墳」図 4 群集墳の分布類型 2011 海の古墳を考える会
- 図 13 松尾充晶『史林』第 98 卷第 1 号「古代の祭祀空間 一『出雲国風土記』にみる地域社会の神と社-」図 6 村落と社の関係概念図 2015 史学研究会
- 図 14 神戸市教育委員会『住吉宮町遺跡第 24 次・第 32 次発掘調査報告書』「阪神・淡路大地震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」「第 2 章 第 24 次調査の成果 第 2 節 調査の成果 3. 古墳時代の遺構と遺物」fig. 26 2 号墳出土人物埴輪 2001、森岡秀人『手前大学史学研究所 平成 26 年度公開講座発表要旨・資料集 大阪湾岸の古墳』「西摂津の古墳文化」黙面人物埴輪(打出小縦古墳周溝) 2014 大手前大学史学研究所
- 写真 1・2 魚津撮影
- 写真 3 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳・小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』「写真図版」図版 2 上段 1. 五色塚古墳と小壺古墳(北から明石海峡と淡路島を望む) 2006
- 写真 4 美浜町教育委員会所蔵

フォーラムⅠ「若狭東部の海辺に築かれし古墳」

- 図 1 美浜町教育委員会作成(ベース図に Google earth 写真を使用)
- 図 2 美浜町教育委員会『帝釈寺古墳群調査概要』「2. 調査概要」第 2 図 帝釈寺 4 号墳調査位置図 1993 福井県立若狭歴史民俗資料館

- 図 3 美浜町教育委員会『帝釈寺古墳群調査概要』「2. 調査概要」第3回 帝釈寺4号墳出土遺物実測図 1993
福井県立若狭歴史民俗資料館
- 図 4 美浜町教育委員会成
- 図 5 敦賀市教育委員会『西浦古墳群』「白塚古墳 3. 調査の結果 (1)検出遺構」第5回 白塚古墳石室実測図 1991、川村俊彦『発掘された北陸の古墳報告会資料集 シンボジウム「5世紀の越の国一大型古墳の動向と地方豪族ー』「越前国 墓原1,2号墳」第2回 墓原2号墳の石棚付石室 1997 まつおか古代フェスティバル実行委員会、敦賀市教育委員会『穴地蔵古墳 福井県指定史跡保存修理事業報告書』「Ⅲ章 発掘調査」図9 石室実測図 2001、美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書II』「第4章 浄土寺古墳群 第5節 浄土寺2号墳」第122回 浄土寺2号墳石室実測図、「第4章 浄土寺古墳群 第6節 浄土寺3号墳」第130回 浄土寺3号墳石室実測図 2007
- 図 6 敦賀市教育委員会『衣掛山古墳群 一敦賀市堂土地改良事業に伴う緊急発掘調査ー』「第3章 調査の結果 2 遺物」第49回 土師質製塙器実測図 1988、敦賀市教育委員会『西浦古墳群』「香丸山古墳 3. 調査の結果 (2)出土遺物」第10回 香丸山古墳出土遺物実測図 1991、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『滻見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群ー近畿自動車道敦賀線建設事業に伴う発掘調査ー』国版第百二十 遺物 大飯神社古墳群横丘外実測図(五) 2004、美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書II』「第4章 浄土寺古墳群 第5節 浄土寺2号墳」第125回 浄土寺2号墳横丘背後出土土器実測図 2007
- 図 7 敦賀市教育委員会『西浦古墳群』「香丸山古墳 3. 調査の結果 (1)検出遺構」第7回 香丸山古墳石室実測図 1991
- 写真 1~6 美浜町教育委員会所蔵

フォーラムII 「若狭西部の海辺に築かれた古墳」

- 図 1 森川昌和他『高浜町誌』「第3章 古代の高浜 第1節 高浜町の開発 一 古墳時代」広瀬古墳群・小和田古墳群、高浜町内出土の須恵器実測図 広瀬1号墳 1985 高浜町、山口謙介・小林裕季・小原雄也・山本原也・松葉竜司『美浜町歴史シンポジウム記録集7 若狭国と三方郡のはじまり～若狭の古代社会のあり方から考える～』『寄稿 青郷周辺の横穴式石室踏査記録』図2 広瀬1・4・6号墳横穴式石室略測図 美浜町教育委員会 2013
- 図 2 森川昌和他『高浜町誌』「第3章 古代の高浜 第1節 高浜町の開発 一 古墳時代」広瀬古墳群・小和田古墳群 1985 高浜町
- 図 3 福井県立若狭歴史民俗資料館『平成2年度若狭地域における発掘調査の成果』「二子山3号墳」墳形と横穴式石室の位置 1991、福井県立若狭歴史民俗資料館『平成3年度若狭地域における発掘調査の成果』「行津古墳発掘調査」横穴式石室の位置、横穴式石室実測図 1992、網谷克彦『日本考古学年報』42(1989年度版)「22 福井県大飯郡高浜町二子山3号墳」図1 二子山3号墳横穴式石室実測図 1991 日本考古学協会
- 図 4 石部正志他『若狭大飯ー福井県大飯郡大飯町考古学調査報告ー』「2 古墳の調査 (2)神田10号墳 附神田11号墳」第11回 宮留地峠部の遺跡分布 1966 大飯町・同志社大学文学部
- 図 5 石部正志他『若狭大飯ー福井県大飯郡大飯町考古学調査報告ー』「2 古墳の調査 (1)神田4号墳」第6回 神田4号墳石室実測図、「2 古墳の調査 (2)神田10号墳 附神田11号墳」第13回 神田10号墳石室実測図、第14回 神田11号墳の石室、「2 古墳の調査 (3)ヒガンジョ4号墳」第21回 ヒガンジョ4号墳石室実測図 1966 大飯町・同志社大学文学部
- 図 6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『滻見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群ー近畿自動車道敦賀線建設事業に伴う発掘調査ー』「第4章 大飯神社古墳群 第1節 大飯神社古墳群の調査の概要 2. 大飯神社古墳群の概要」第38回 大飯神社古墳群分布図、「第4章 大飯神社古墳群 第2節 大飯神社古墳群の構造と遺物 1. 大飯神社1号墳」第42回 大飯神社1号墳墳丘測量図 2004
- 図 7 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『滻見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群ー近畿自動車道敦賀線建設事業に伴う発掘調査ー』「第4章 大飯神社古墳群 第2節 大飯神社古墳群

の遺構と遺物 1. 大阪神社1号墳 大阪神社1号墳石室実測図、「第4章 大阪神社古墳群 第2節 大阪神社古墳群の遺構と遺物 2. 大阪神社2号墳」第55図 大阪神社2号墳石室実測図 2004

国8
表1 国土地理院発行1/50,000地形図「西津」「銚崎」を50%に縮小の上、美浜町教育委員会作成
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『滝見古墳群・大阪神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群
—近畿自動車道敷設建設事業に伴う発掘調査—』「第2章 地理的・歴史的環境 第2節 歴史的
環境」第1図 周辺の遺跡 2004

フォーラムIII「丹後の海辺に築かれし古墳」

- 国1 美浜町教育委員会作成(ベース図にGoogle earth写真を使用)
- 国2 加藤晴彦『丹後国遷政』「丹後国前史、いわゆる「丹後王国」の実像 一「北タニワ」史としてー」
資料16 古墳時代前期から中期前半の王墓の変遷 2015 与謝野町教育委員会
- 国3 加藤晴彦『第22回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 古墳時代後期における地域首長墓像』「丹後
半島域におけるTK23期～TK209期の首長墓の素描」丹後半島における古墳時代後期の古墳編年図
京都府埋蔵文化財研究会 2015
- 国4 加藤晴彦『丹後国遷政』「丹後国前史、いわゆる「丹後王国」の実像 一「北タニワ」史としてー」
資料22 北タニワの主要な横穴式石室の編年 2015 与謝野町教育委員会
- 国5 細川康晴『季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』「横穴式石室の導入と展開」図1 導入
期石室の系譜(1)・図2 導入期石室の系譜(2) 2000 广瀬と雄山閣
- 国6 中村浩『MUSEUM』No.501 「福井県美浜町所在獅子塚古墳出土須恵器について—東京国立博物館出品の
再検討—」図6 獅子塚古墳出土須恵器実測図 1992、京丹後市教育委員会『大耳尾古墳群発掘調査報
告書』「第Ⅲ章 調査の概要 2号墳」第23図 2号墳第1主体棺上方遺物 2014
- 国7 大宮町教育委員会『裏除遺跡発掘調査概報』「第2章 遺跡の環境 (2)周辺の主な遺跡と遺物」第10
図 新戸1号古墳横穴式石室実測図 1979、野田川町教育委員会『高浜古墳発掘調査概報』「4. 調査
概要」第4図 石室実測図 1985
- 国8 京都府教育庁指導部文化財保護課『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』「2. 大成古墳群発掘調査概要」
第10図 第7号墳石室実測図 1968 佐藤晃一・細川修平・細川康晴『同志社考古』11「加悦谷の横
穴式石室」第9図 入谷11号墳横穴式石室実測図、入谷14号墳横穴式石室実測図、第15図 鞍谷5
号墳横穴式石室実測図 2003 同志社大学考古学研究室、与謝野町教育委員会『滝谷古墳群』「4. 滝
谷1号墳の調査 ③石室構造」第5図 滝谷1号墳石室立面図 2009
- 国9 下高瑞哉『島根考古学会誌』第6集「鳥取県東部における中高式天井石室に関する一考察」第2図 坊
ヶ塚古墳(註6より)、第3図 スクモ塚古墳・第4図 神垣3号墳(註1より)、第5図 神垣6号墳・
第6図 神垣8号墳、第7図 美歎40号墳(註6より)・第8図 美歎41号墳(註6より)、第9図 上野
2号墳、第10図 平野5号墳(註14より)、第13図 米岡2号墳(註18より) 1989 島根考古学会、
河野一隆『新修亀岡市史』資料編第一巻「考古 五 古墳時代 53 北ノ庄古墳群」第184 北ノ庄4号
墳の埴丘(1/300)と石室(1/150) 2000 亀岡市史編さん委員会編 亀岡市
- 国10 同志社大学考古学研究会・大泊古墳群調査グループ『古代学研究』第38号「丹後大泊古墳群調査報
告」第3図 大泊1号墳石室実測図、第8図 大泊3号墳石室実測図 古代学研究会 1964、京都府
教育庁指導部文化財保護課『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』「2. 大成古墳群発掘調査概要」第10図
第7号墳石室実測図、第11図 第8号墳石室実測図、第12図 第9号墳石室実測図 1968
- 国11 横口隆康『京都府文化財調査報告』第22冊「第七 網野町の三古墳 三、岡第二号墳」第50図 岡第
二号墳石室実測図、「第七 網野町の三古墳 四、岡第三号墳」第54図 岡第三号墳石室実測図 1961
京都府教育委員会、網野町教育委員会『林遺跡発掘調査報告書』「第6章 網野町の発掘調査 (1)岡
4号墳の発掘調査」第56図 岡4号墳石棺実測図、「第6章 網野町の発掘調査 (3)新浜2・3号墳
発掘調査概要」第62図 新浜2号墳箱式石棺実測図、第63図 新浜3号墳箱式石棺、石枕、鐵劍実測
図、第64図 勝山古墳箱式石棺実測図 1977、丹後町教育委員会『竹野遺跡』「4. 石棺」第14図 2号
石棺(2)、第16図 3号石棺 1983

トークセッションⅠ「海辺に築かれし古墳～若狭湾沿岸～」

- 図1 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター『犬見古墳群一県道赤堀崎公園道路改良工事に伴う調査－』
「第3章 遺構 第2節 遺構」第7図 調査区変更後遺構平面図 2018
- 図2 教賀市教育委員会『査横穴群・小櫃谷1号横穴 一市道西浦1号線道路整備工事に伴う発掘調査－』
「測量図版」測量図版1 査横穴群周辺地形測量図 2013
- 図3 加悦町教育委員会『入谷西A-1号墳発掘調査概要』「4 横穴式石室」第4図 入谷西A-1号墳石室
立面図 1983、入江文敏『わかさ美浜町誌』第六巻 掘る・使う「第四章 美浜の古墳時代 第三節
美浜町の古墳 一 獅子塚古墳」図7 獅子塚古墳横穴式石室実測図 2009 美浜町誌編纂委員会編
美浜町
- 図4 網野町教育委員会『離山古墳・離湖古墳発掘調査概要』「III 離山古墳の調査 3 遺構」第9図 離山
古墳石室平面・立面実測図 1993
- 図5 辻哲朗『齊賀塚古墳』「第3章 発掘調査の結果 第1節 石室」図3-3 石室実測図 マキノ遺跡
群調査団・マキノ町教育委員会 1998
- 図6 国土地理院発行1/25,000地形図「小浜」を50%に縮小の上、美浜町教育委員会作成

フォーラムV「三河の海辺に築かれし古墳」

- 図1 西島庸介『企画展 三河の古墳—安城の古墳時代を探るー』「第一章 西三河の古墳」三河の領域 2008
安城市歴史博物館
- 図2 西島庸介『企画展 三河の古墳—安城の古墳時代を探るー』「第一章 西三河の古墳」西三河における後・
終末期古墳の分布 2008 安城市歴史博物館
- 図3 岡崎市教育委員会『経ヶ峰1号墳』「第3章 墳丘および外部施設」第7図 石室実測図 1981、三田教
司『新編西尾市史』資料編 考古「第2章 主要遺跡解説 第5節 豆地区の遺跡 112 中之郷
古墳』図5 横穴式石室測量図 2019 新編西尾市史編さん委員会編 西尾市
- 図4 斎藤嘉彦『新編岡崎市史』史料 考古 下16「第4章 古墳時代の遺跡と遺物 第16節 東部地区的古
墳 12. 神明宮1号墳」第237図 神明山1号墳石室、「第4章 古墳時代の遺跡と遺物 第16節 東部
地区的古墳 13. 神明宮2号墳」第242図 神明山2号墳石室 1989 新編岡崎市史編さん委員会
- 図5 三田教司『企画展 三河の古墳—安城の古墳時代を探るー』「正法寺古墳の出現」第1図 矢作川河口地
域の古墳年表、第2図 矢作川河口地域の古墳と集落の分布 2008 安城市歴史博物館
- 図6 三田教司『新編西尾市史』資料編1 考古「第2章 主要遺跡解説 第5節 豆地区の遺跡 116 とう
てい山古墳」図7 石室測量図 2019 新編西尾市史編さん委員会編 西尾市、愛知県埋蔵文化財
センター『西川原古墳』「第II章 遺構」図5 石室 2002
- 図7 西島庸介『企画展 三河の古墳—安城の古墳時代を探るー』「第二章 東三河、渥美半島、三河湾に浮
かぶ島々の古墳」渥美半島・三河湾島嶼部における古墳分布 2008 安城市歴史博物館
- 図8 愛知県『愛知県史』資料編3 考古 3 古墳「第2章 主要遺跡解説 第6節 西三河 202 佐久島古墳群」
図2 山ノ神塚古墳石室実測図 2005 愛知県史編さん委員会、愛知県西尾市『新編西尾市史』資料編
1 考古「第2章 主要遺跡解説 第3節 一色地区的遺跡 第2項 一色地区的古墳 68 平地古墳群」
図5 1号墳石室測量図、「同 70 石塚1・2号古墳」図2 1号墳石室測量図、「同 72 平古墳群」
図5 3号墳石室測量図、「同 75 5号墳石室測量図、「同 73 佐久島のその他の古墳」図1 佐久島の
遺跡分布図 2019 新編西尾市史編さん委員会
- 図9 南知多町教育委員会『日間賀島の古墳』「第三章 北地第11号墳 1. 石室の構造」挿図4 北地第11
号墳の構造、「第五章 上海第2号墳 3. 石室の構造」挿図10 上海第2号墳の構造 1979、愛知県
『愛知県史』資料編3 考古 3 古墳「第2章 主要遺跡解説 第5節 知多半島 134 北地古墳群」図3
副葬品実測図1、図4 副葬品実測図2 2005 愛知県史編さん委員会、南知多町『南知多町誌』資料
編六「第一編 考古資料 第一節 遺構・遺物 3 古墳時代 北地第四号墳」図1-280 北地第4号墳
石室、「同 北地第六号墳」図1-304 北地第6号墳石室、「同 北地第五号墳」図1-291 北地第5号
墳石室、「同 北地第八号墳」図1-318 北地第8号墳石室、「同 北地第十四号墳」図1-377 北地第
14号墳石室 1997 南知多町編さん委員会

- 図 10 西島庸介『企画展 三河の古墳－安城の古墳時代を探る－』「第二章 東三河、渥美半島、三河湾に浮かぶ島々の古墳」古墳時代後期 渥美湾沿岸部の首長層・有力古墳の変遷 2008 安城市歴史博物館
- 図 11 西島庸介『企画展 三河の古墳－安城の古墳時代を探る－』「第二章 東三河、渥美半島、三河湾に浮かぶ島々の古墳」組合式石棺・屍床施設の分布 2008 安城市歴史博物館
- 写真 1 山口撮影

フォーラムVI「志摩の海辺に築かれし古墳」

- 図 1 美浜町教育委員会作成(ベース図に Google earth 写真を使用)
- 図 2 米田文孝他『紀伊半島の文化史的研究－考古学編－』「第IV章 志摩地域の遺跡と遺物 8 阿児町志島古墳群の調査」Fig. 160 志島古墳群周辺地形図、Fig. 163 おじよか古墳石室実測図、Fig. 183 おじよか古墳出土埴製枕実測図、Fig. 184 おじよか古墳出土埴製枕直弧文実測図・拓影 関西大学文学部考古学研究室編 1992 清文堂出版、志摩市教育委員会『おじよか古墳（志島古墳群 11号墳）発掘調査報告－金属製品編－』「第3章 遺物 第2節 遺物の観察記録」第2図 遺物実測図①、第5図 遺物実測図④ 2016
- 図 3 三重県教育委員会『鳥羽・志摩地区遺跡地図』「附2 泊古墳」泊古墳測量図、「附3 鳥ヶ巣古墳群」鳥ヶ巣古墳群測量図 1969、山本達也『志摩国の古墳』「泊り古墳石室構造の復元と出土遺物について」第42図 泊り古墳石室推定復元図 2002 皇學館大学考古学研究会、宮原佑治『Mie history』Vol. 23 「畔名泊り古墳の研究－志摩における後期古墳の研究(2)－」第6図 泊り古墳出土銀装飾円形薺葉 2016 三重歴史文化研究会
- 図 4 米田文孝他『紀伊半島の文化史的研究－考古学編－』「第IV章 志摩地域の遺跡と遺物 8 阿児町志島古墳群の調査」Fig. 192 上村古墳石室実測図 関西大学文学部考古学研究室編 1992 清文堂出版、宮原佑治『専修考古学』第15号「志島上村古墳の研究－志摩における後期古墳の研究(1)－」図4 上村古墳出土の刺菱形飾金具・帶状金具・歩掛金具、図5 上村古墳出土透十文字心葉形鏡板・承盤 2016 専修大学考古学会
- 図 5 志摩市教育委員会『平成23～28年度志摩市内遺跡発掘調査報告』「第2章 塚穴古墳（志島古墳群4号墳）発掘調査概報 第1節 調査の経過と方法」第29図 塚穴古墳調査区位置、「同 第2節 遺構」第30図 塚穴古墳横穴式石室①・塚穴古墳横穴式石室②、「同 第3節 遺物」第33図 塚穴古墳出土遺物①、第34図 塚穴古墳出土遺物② 2018
- 図 6 和田年弥『伊勢市史』第六巻 考古編「第四章 特論遺跡 第三節 高倉山古墳 四 墳丘と石室」第7図 高倉山古墳石室実測図 2011 伊勢市
- 図 7 米田文孝他『紀伊半島の文化史的研究－考古学編－』「第III章 度会郡南勢町ヒロサキ遺跡・礐浦古墳群の調査 3 球浦古墳群の調査」Fig. 38 球浦所在遺跡周辺地形図、Fig. 48 宮山古墳石室実測図、Fig. 62 宮山古墳出土環頭大刀柄頭実測図、Fig. 64 宮山古墳出土鉄製品実測図(2)、Fig. 66 宮山古墳出土銅鏡実測図、Fig. 78 日和山古墳石室実測図、Fig. 80 浅間山古墳墳丘測量および復元図 関西大学文学部考古学研究室編 1992 清文堂出版
- 図 8 米田文孝他『紀伊半島の文化史的研究－考古学編－』「第IV章 志摩地域の遺跡と遺物 1 志摩地域の地理的・考古学的環境」Fig. 89 岩屋山古墳周辺地形図、Tab. 15 岩屋山古墳周辺遺跡地名表、「第IV章 志摩地域の遺跡と遺物 2 鳥羽市答志島所在遺跡・遺物の調査」Fig. 91 岩屋山古墳墳丘測量図、Fig. 94 岩屋山古墳石室実測図 関西大学文学部考古学研究室編 1992 清文堂出版、三重県生活部文化課 県史編さん室『蟹穴古墳発掘報告』「I はじめに」図1 東京国立博物館所蔵蟹穴古墳出土須恵器、「IV 蟹穴古墳の調査 3. 理葬施設」図8 石室実測図 1999
- 図 9 宮原佑治『三河考古』第25号「三重県における古墳時代臨海遺跡の特質」第9図 県内の集落出土漁撈具（各報告書より一部改変） 2015 三河考古学談話会編 三河考古刊行会
- 写真 1～5 志摩市教育委員会所蔵

フォーラムVII「能登の海辺に築かれし古墳」

- 図 1 戸潤幹夫・北林雅康『新修七尾市史』14 通史編Ⅰ 原始・古代・中世「原始・古代 第二章 古墳建築と地域社会 第四節 古墳文化の変質」「能登半島 古墳時代後期終末期の主要な古墳分布図」
2011 七尾市史編さん専門委員会編 七尾市役所
- 図 2 西野秀和他『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』『通史編 第一章 原始・古代 第三節 古墳文化 二 七尾湾岸の古墳群』図 1-10 中島町域内の主要古墳分布図 1996 中島町史編纂専門委員会編 中島町役場
- 図 3 伊藤雅文『加賀・能登王墓の世界』『特別論考 加賀・能登の潟湖と古墳』第 3 図 能登の古墳と潟湖 2016 石川県立歴史博物館
- 図 4 七尾市教育委員会『佐味今田谷内古墳群発掘調査報告書 平成 25・26・27 年度に実施した内容確認調査報告』『第 3 章 調査の成果』第 7 図 佐味今田谷内古墳群測量図及び墳丘測量図 2016
- 図 5 七尾市教育委員会『佐味今田谷内古墳群発掘調査報告書 平成 25・26・27 年度に実施した内容確認調査報告』『第 5 章 まとめ』第 16 図 七尾鹿島地区主要古墳編年略図 2016
- 図 6 石川県立埋蔵文化財センター『三室まどかけ古墳群』『三室まどかけ 2 号墳の発掘調査』2 号墳横穴式石室実測図、『三室まどかけ 3 号墳の発掘調査』3 号墳横穴式石室実測図 1994
- 図 7 伊藤雅文他『能登高爪山 高爪山山頂山麓遺跡群総合調査報告書』『第 5 章 千浦二子塚古墳群の調査 6 古墳の調査』第 73 図 古墳群全体図、第 81 図 C2 号墳墳丘測量図 2014 石川考古学研究会
- 図 8 志雄町教育委員会『能登散田金谷古墳 一之手路の族長墓とその周辺』『II 散田金谷古墳 2 横穴式石室』図 5 散田金谷古墳石室実測図 1980 石川考古学研究会・石川県立埋蔵文化財センター編、七尾市教育委員会『院内勒使塚古墳 環境整備(保存修理)事業に係る第一次発掘調査報告書』『IV 調査 1 石室』第 8 図 石室実測図(1/80) 1985
- 図 9 能登島町教育委員会『史跡須曾蝦夷穴古墳 II -発掘調査報告書-』『第 5 章 石室 1 雄穴石室』第 12 図 雄穴石室実測図、『第 5 章 石室 2 離穴石室』第 23 図 離穴石室実測図 2001
- 図 10 空良寛『石川県埋蔵文化財情報』第 23 号『環日本海交流史研究集会の記録「日本海域の土器製塙」発表概要 能登地方の土器製塙遺跡』図 9 製塙土器編年図、図 10 能登半島の主な製塙遺跡 2010 財團法人石川県埋蔵文化財センター
- 表 1 北林作成
- 写真 1 羽咋市教育委員会所蔵
- 写真 2~6 七尾市教育委員会所蔵

トークセッションII「海辺に築かれし古墳～三河・志摩・能登・若狭～」

写真 1 七尾市教育委員会所蔵

寄稿「おおい町の横穴式石室踏査記録」

- 図 1・6 おおい町発行 1/2,500 地形図を 1/2 に縮小し、山口作成
図 2~5・7 山口作成(山口謙介・小林裕季・小原雄也・山本原也・松葉竜司 実測)
図 8 山口作成
表 1 山口作成

- ※ 表紙には、七尾市教育委員会提供写真、山口謙介氏提供写真、美浜町教育委員会所蔵写真を使用した。
※ パネリスト顔写真はご本人より提供いただき、講演・トークセッション等の風景写真は美浜町教育委員会撮影写真を使用した。
※ 図表・写真的収録にあたっては、出典図表、史料、写真等の内容・縮尺等を適宜、改変の上、使用した。

講師（著者）略歴



魚 津 知 克 (うおづともかつ) 1971 (昭和 46) 年生まれ、京都府出身

〈経歴〉 2000 年 京都大学大学院文学研究科 博士満期退学

2001 年 大手前大学 史学研究所

2019 年 学校法人大手前学園 総合企画室

〈著書〉 2012 年『鉄製生産用具からみた古墳のはじまり』『菟原 11』『菟原』刊行会

2012 年『漁具と漁業生産』『古墳時代の考古学』第 5 卷 同成社

2013 年『日本古代の木製農具・工具』『韓日古代木器遺物の研究成果と向後課題』

大韓民国・国立伽耶文化財研究所

2017 年『鉄製農具』『モノと技術の古代史』金属編 吉川弘文館

2017 年『日本海沿岸地域の鉄製生産用具が示す十二つの特質とその背景』

『大手前大学史学研究所紀要』第 11 号 大手前大学史学研究所

2017 年『政権による海産資源の調達と海上交通』『古代学研究』211 号 古代学研究会

2017 年『『海の古墳』研究の意義、限界、展望』『史林』第 100 卷第 1 号 ほか



加 藤 晴 彦 (かとう はるひこ) 1968 (昭和 43) 年生まれ、愛知県出身

〈経歴〉 1994 年 南山大学経済学部 卒業 (日本経済史ゼミ)

1994 年 加悦町教育委員会 (1996 年～ 正規職員)

2006 年 与謝野町教育委員会

〈著書〉 2000 年『環境集落の規模と構造』『季刊考古学別冊 10 号 丹後の弥生王墓と巨大古墳』 雄山閣

2014 年『丹後地域における古墳時代の石棺文化』『第 127 回埋蔵文化財セミナー資料

いにしえの丹後地域のムラと墓 一弥生・古墳時代の最新成果から一』

京都府教育委員会・公益財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

2015 年『丹後半島域における TK23 期～TK209 期の首長墓の素描』

『古墳時代後期における地域首長墓像』京都府埋蔵文化財研究会

2015 年『第 1 講 丹後国前史、いわゆる「丹後王国」の実像 ～「北タニワ」史として～』

『丹後国遷歴』与謝野町教育委員会 ほか



川 嶋 清 人 (かわしま きよと) 1975 (昭和 50) 年生まれ、福井県出身

〈経歴〉 1999 年 花園大学文学部史学科 卒業

1999 年 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

2002 年 大阪市立教育委員会 大阪市立郷土史料館

2006 年 おおい町教育委員会 おおい町立郷土史料館

〈著書〉 2006 年『小浜藩の台場跡 一史跡松ヶ瀬台場跡の整備から一』『第 23 回全国城郭研究者セミナー

テーマ 城館の分布から何がわかるか』中世城郭研究会・城郭談話会

2008 年『平成 20 年度特別展 若狭の塙づくり おおい町発掘 50 年史』おおい町立郷土史料館

ほか



北 林 雅 康 (きたばやし まさやす) 1975 (昭和 50) 年生まれ、石川県出身

〈経歴〉 1998 年 奈良大学文学部文化財学科 卒業

1998 年 守口市教育委員会

2000 年 七尾市教育委員会

〈著書〉 2003 年『古墳時代初頭の大型孤立柱建物群と方形区画』『条里制・古代都市研究』第 19 号

条里制・古代都市研究会

2008 年『長齢寺 前田利家・利長石廟 一能登半島地震による修復調査報告一』

『能登の文化財』第 42 輯 能登文化財保護連絡協議会

2012 年『第二章 古墳築造と地域社会 第 4 節 古墳文化の変質』

『新修七尾市』14 通史編 I 原始・古代・中世 七尾市役所 ほか



三好 元樹（みよし もとき） 1982（昭和 57）年生まれ、奈良県出身

〈経歴〉 2006 年 大阪大学文学部人文学科 卒業

2008 年 岡山大学大学院社会文化科学研究科 修了

2009 年 静岡県埋蔵文化財調査研究所

2011 年 志摩市教育委員会

〈著書〉 2011 年「備讃瀬戸の縄石核の変化と行為」『旧石器考古学』74 旧石器文化談話会

2014 年「近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年」

『旧石器研究』10 日本古石器学会

2017 年「おじょか古墳の出土遺物とその評価」『学術研究集会

海の古墳を考えるVI 三河と伊勢の海一古墳時代の海道を往還するー』

学術研究集会「海の古墳を考えるVI」実行委員会・海の古墳を考える会

2018 年「おじょか古墳と古墳時代の志摩」『おじょか古墳発掘 50 年記念シンポジウム

おじょか古墳と 5 世紀の後記録集』志摩市教育委員会

2018 年「有袋鉄斧の使用方法に関する基礎的検討

—近畿地方南部の古墳出土資料を対象として—

『侍兼山考古学論集』III 大阪大学考古学研究室

2020 年「旧石器時代の年代と愛鷹山麓の古環境」『愛鷹山麓の旧石器文化』敬文館 ほか



山口 還介（やまぐち ようすけ） 1983（昭和 58）年生まれ、愛知県出身

〈経歴〉 2007 年 奈良大学文学部文化財学科 卒業

2008 年 岡崎市教育委員会

〈著書〉 2011 年「岡崎小針跡跡の再評価 ー古代集落の変遷と二期を中心としてー」

『考古学フォーラム』20 号 考古学フォーラム

2011 年「羽角山古墳群における分布調査中間報告 西三河に所在する群集墳の再検討」

『三河考古』第 21 号 三河考古学談話会（共著）

2014 年「矢作と岡崎」『新・清州会議 資料集』新・清州会議実行委員会（共著）

2015 年「羽角山古墳群における分布調査中間報告 II 西三河に所在する群集墳の再検討」

『三河考古』第 25 号』三河考古学談話会（共著）

2020 年「銘文瓦にみる三河地域の瓦師の動向」『三河考古 第 30 号』三河考古学談話会 ほか



松葉 竜司（まつばたつし） 1973（昭和 48）年生まれ、岐阜県出身

〈経歴〉 1997 年 奈良大学文学部文化財学科 卒業

1998 年 美浜町教育委員会

〈著書〉 2013 年「若狭湾沿岸地域における土器製塩と塩の流通」『第 16 回古代官衙・集落研究会報告書

塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所

2015 年「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生產」『解報 平成 25 年度』福井県立若狭歴史民俗資料館

2015 年「若狭湾沿岸の土器製塩と地域社会」

『丹後国遷政 歴史連続 塚・鉄、丹後国「國產品」の生産と流通』与謝野町教育委員会

2019 年「古代若狭における寺院造営の一様相 一興道寺廃寺を中心にー」『古代寺院史の研究』

菱田哲郎・吉川真司編 思文閣出版

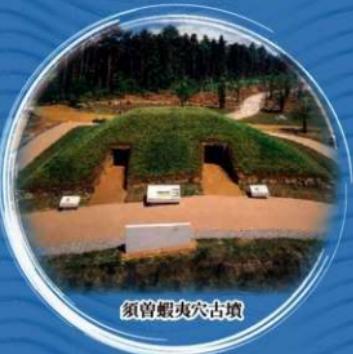
2020 年「若狭湾沿岸における「領式」土器の再検討(1) ー「領式」土器の年代観をめぐってー」

『いにしえの河をのぼる 一古川登さん遺職記念歓呈考古学文集ー』

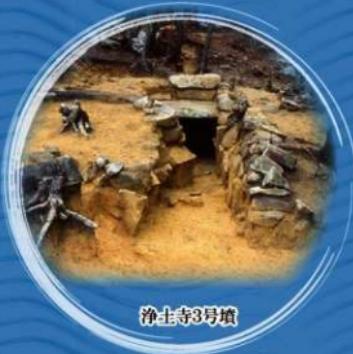
『いにしえの河をのぼる』制作委員会 ほか



いせや山古墳と三河湾



須曾蝦夷穴古墳



浄土寺3号墳



美浜町歴史シンポジウム記録集15
若狭の海辺に築かれし古墳

2021年（令和3年）3月12日発行

発行 美浜町教育委員会
福井県三方郡美浜町郷市25-25

印刷 若越印刷株式会社美浜営業所
福井県三方郡美浜町金山19-7-1

この電子書籍は、2021年3月12日、美浜町教育委員会が発行した『美浜町歴史シンポジウム記録集15 若狭の海辺に築かれし古墳』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：美浜町歴史シンポジウム記録集15 若狭の海辺に築かれし古墳

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和4年(2022)3月1日